山本勘助

異形の軍師

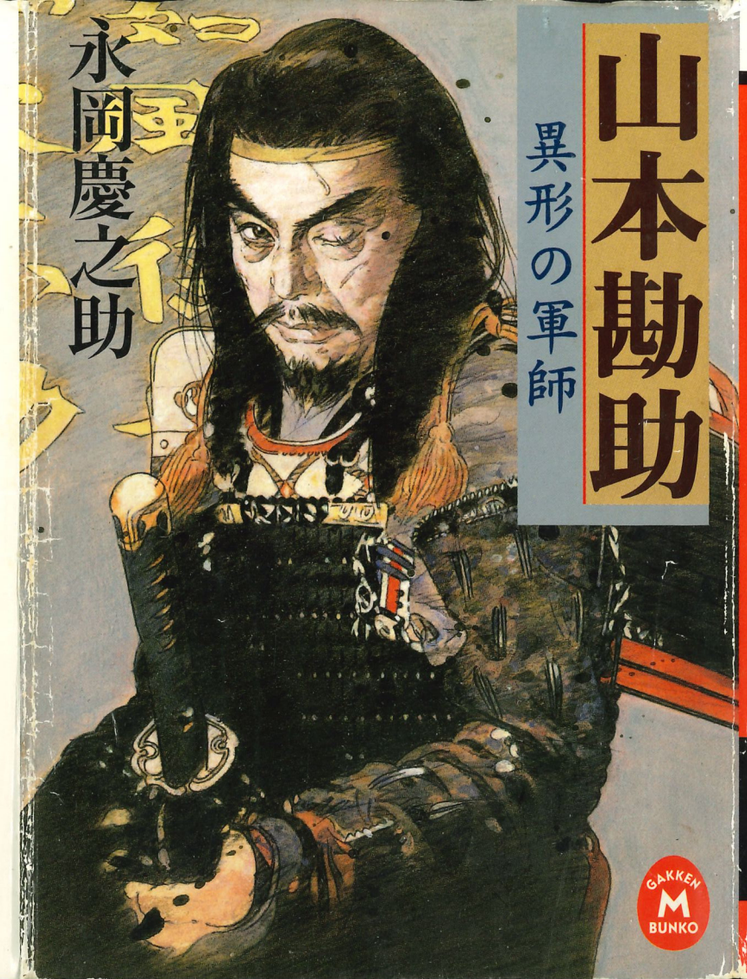
永岡慶之助

GAKKEN M BUNKO

著者紹介

永岡 慶之助(ながおか けいのすけ)

1922年、福島県会津に生まれる。
日本文芸家協会会員。
『斗南藩子弟記』で第45回、
『紅葉山』で第60回の直木賞候補となる。
主な著書に
『大坂の陣名将列伝』『北条氏康』(ともに学研M文庫)
『会津戦争始末記』『彰義隊の怨念』
『伊達政宗』『サムライド巴里』『上杉謙信』
などがある。



山本勘助

異形の軍師

永岡 慶之助

GAKKEN M BUNKO

山本勘助 異形の軍師 永岡 慶之助

学研M文庫

な 2-3 ¥630

9784059002024

1920121006301

ISBN4-05-900202-X

C0121 ¥630E

1B1342

定価:本体630円
※税が別に加算されます。

戦乱の諸国を巡る武者修行により、武術を極め軍略にも長けた山本勘助。甲斐の武田信玄は、熟年の勘助を破格の知行で迎え入れる。勘助もまた、信濃攻略を目指す若き猛将・信玄の才華に惚れ、重臣らを畏怖さす神算鬼謀でそれに応えた。幾度もの合戦を勝ちぬき、絶対の信頼関係で結ばれた主従の前に、越後の虎・上杉謙信が立ちはだかり、ついに宿命の対決を迎えるが…。主君に命を賭した私心なき戦国最後の勇将、その苛烈なる物語。

GAKKEN M BUNKO

永岡慶之助の本

- 大坂の陣名将列伝
- 北条氏康

好評発売中

- 後藤又兵衛 風野 真知雄
- 蜂須賀小六正勝 星 亮一
- 九鬼嘉隆 星 亮一
- 黒田長政 石川 能弘
- 真田幸村 江宮 隆之
- 北条早雲 高野 澄
- 藤堂高虎 高野 澄
- 史伝 佐々成政 遠藤 和子
- 史伝 前田利家 左方 郁子
- 史伝 鍋島直茂 中西 豪

カバーイラスト:毛利 彰
カバーデザイン:妹尾 浩也
ブックデザイン:中谷 匡児

山本勘助

異形の軍師

永岡 慶之助

学研M文庫

山本勘助
異形の軍師
永岡 慶之助
学研M文庫

山本勘助

異形の軍師

永岡慶之助

学研M文庫

目次

山本勘助　異形の軍師

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

風の章

秘客　7
石飛礫　16
星の記憶　26
暗闘　35
隠忍の季節　42
国境閉鎖　51
運命の時　58
旅立ち　66

林の章

忍び屋敷　77
非情の謀殺　87
おとこ二人　99
真田残党　108
秘命二つ　119
奇才の人々　129
記録人高白斎　138
女人多佳女　148

火の章

運命の子　161
スバルの残映　170
戦国の鬼　179
青白磁　190
北の曲輪様　197
氷雪・大門峠越え　208
板垣信方死す　217
小源太の行方　229

山の章

女忍の最期 240
戸石崩れ 250
勘助の休日 262
諏訪姫入水 271
川中島へ 282
虚々実々 288
秘策と秘策 294
さらば丈太郎 300

風の章

秘客

その漢山本勘助は、今川家の重臣庵原阿波守忠胤から緊急の呼び出しをうけた時、安倍川の渡し場に近い、居酒屋と宿泊所を兼ねた住吉屋の、いつもの席で、いつものように、大ぶりの素焼きの酒壺を前にして、うっそりと杯を傾けていた。

それが癖で、時々、思い出したように、ひとくち、酒を口にふくんでは、なにやら思念するように目を閉じ、かれこれ一刻（約二時間）ほどもそうしているのだった。

この日、天文十年（一五四一）五月もあと数日で終わるという季節の夕景を迎え、人も風景も青々と染まるや、一夜の宿をもとめる人々がぽつぽつ住吉屋の暖簾をくぐり出していた。今川義元の駿府城下は、北条氏の小田原城下と並び称される天下に聞こえた繁昌の地だ。東海道を上下する旅人たちは、申し合わせたように、この駿河・遠江・三河の三国におよぶ大守のお膝元にふさわしい、活力溢れる大城下町に旅装をとくのであった。

当然、安倍川の渡し場近い一角には、それら旅人のために、旅宿や遊女屋も軒をつらねるようになったが、居酒屋と旅籠を兼ねたのが、この住吉屋なのである。

暖簾をくぐった正面の大飯台は、時分どきには、先を急ぐ旅人たちで賑わうが、その横を通り過ぎた奥が、三十畳ほどの広さの、追い込みの宿泊所になっており、中二階は公用をおびた武士や、ふところの裕福な商人などが席をとった。

今、勘助が占めているのは、暖簾を割って入って直ぐ右側の、川人足や馴染みの定連客が、気安く寛げるように配慮された一角だ。土間には大きな囲炉裏が据えられてあり、川風の冷たい時分ならば、これを囲んで世間話に興ずることも出来るのである。

むろん、炭火の無い五月の空炉の縁は、荒壁に背をもたれた勘助には、酒壺や肴の皿小鉢を並べるお誂え向きの飯台となっていた。

「旦那」

店の亭主が、そっと小鉢を空炉の縁に並べて、遠慮がちに、

「これは山椒の若芽を煮込んだ物で……」

「ほう、季節の珍味であるな」

薄目を明けてこたえた勘助は、なおも思念をつづける風情で、亭主も足音を殺して、静かに調理場へ引き退るのだが、長居する勘助を迷惑がる様子はまったくない。

亭主は知っているのだ。

牢人者の癖に、いつも小ざっぱりした身なりの山本勘助が、今川家の重臣庵原阿波守の食客であることを。そしてまた、いかなる仕事上のつながりがあるのか、駿府城下でも富裕をもって知られる塩商人や革商人らが自ら訪ねて来、なにやら慇懃に指示を仰いでいる光景も目撃しているのである。

しかも勘助は、小田原から来たという組紐の行商人や、西国を廻っての帰途という修験者、あるいは富士講の御師、時には流れ遊女らにまで、酒壺を詰め替えてまで振る舞ってやり、彼らの語る世間話に耳を傾けるのであった。例えば、ほろ酔い気嫌の組紐の行商人が、

「先ごろ、鎌倉の鶴岡八幡宮が、小田原の北条氏綱様によって修築再建されましたが、十年がかりの大事業とあって、その祝典には神楽、舞楽、相撲、経供養が催されるなど、いやはや、その壮麗なこと、まことに大変な御威勢でありましたなぁ」

と感歎の声を放てば、修験者は、

「安芸の桜尾城主が、陶隆房なる御仁に攻められ、自殺なされたとか、なんとも油断のならぬ御時世でおじゃる」

と風聞を口にするなど、諸国の情報がいながらにして知れるのだった。

こうした、勘助に酒を振る舞われた連中の中でも、特に亭主の印象に残っている変わり種は、川人足の喜多嶋小源太であった。年の頃は二十五、六か、夕飯を摂りに暖簾を

くぐって来たのだが、手拭で頬被りした面立ちに一種風味があり、身のこなしに武家の気配を読みとった勘助が言葉をかけたのだ。

「一杯、いかがじゃ」

「え?」

一瞬、怪訝な顔をした若者は、すぐにことして、

「や、それは忝い。酒には久しぶりにお目にかかる」

と率直、正直なのであった。

この若者が喜多嶋小源太であり、意外な経歴の持主で、泉州堺（大阪府）の豪商天王寺屋の傭兵――雇い武装牢人隊の一人だったという。ところが、ひょっとしたことから、剣をとっての荒事よりも、むしろ商才・渉外の才に長けていると評され、内所――すなわち、物産取引の帳場へ組み入れられたというのである。

堺は明国交易の港町だ。

この町の町政は、納屋衆とよばれる町年寄たちによって治められ、外部からの侵入をはばむため、町の三方に濠をめぐらし、さらに自衛のために、武装牢人を雇い入れている町人だけの自治都市であり、その豊かな財力は、時に戦国大名の動向を左右するほどであった。

とりわけ天王寺屋は、雇用する武装牢人三百人と称される大豪商だ。武装牢人から帳

場へと抜擢登用された喜多嶋小源太なる者、よほどに才気が光っていたに違いない。

「確かに」

と小源太は、勘助の酌をうけながら、

「万事順調で御座った。片言ながら明国の言葉も話せるまでになり、日比屋、高石屋、草部屋などの間でも、喜多嶋小源太の名は知られるようになったと思うたら……好事魔多しの諺どおりになってしまい申した。お笑い下され、同じ納屋衆の臙脂屋の娘とよい仲になったはよいが、それを知った臙脂屋では、さっさと同業の大店に縁付けてしまった。で、何もかも嫌になって堺の町を飛び出し、今や評判高い関東の小田原城下を目指したものの、この駿河に辿り着いたところで、路銀が尽きてこのていたらくで御座るわ」

と言って頭を掻いたが、「酒を馳走になったのに、今の拙者には返礼にすべきものがまったくない。ついては堺の町で習い覚えたはやり唄を一節」と前置きして、

来し方より今の世までも
絶えせぬものは
恋といへる曲者
げに恋は曲者、曲者かな
身はさらさらさら

さら、さらさら
更に恋こそ寝られね

と声を張って歌い出したのだ。

「よい喉をしている。これでは臙脂屋の娘に惚れられた咄も嘘じゃなさそうじゃ」

呆れたように住吉屋の亭主は唸った。人生の辛酸を舐めた老爺には、行商人やこの小源太のような者に酒を振る舞う山本勘助の意図するところは、おぼろげながら推察し得たつもりだが、この日の勘助の思案顔からは、

（この漢、一刻もの間、一体何を考えているのだろうか。吉なのか、凶なのか、顔の様子では悪いこととも思われないが……）

まったく見当がつかないのである。

実は、勘助は半眼を閉じ、一昨日以来の庵原邸での慌ただしい動きを思い返していたのだ。

あれは戌ノ刻（午後八時）頃であったか、久しぶりに庵原忠胤と囲碁を娯しんでいると、書院前の庭先にすうっと黒い影のように佇んだ者がいる。人影は二つ。

「誰じゃ!?」

と誰何しかけた庵原忠胤は、問髪を入れず勘助の差し出した、燭台の光の輪の中に浮き出た人物の顔を見るや、

「や、板垣殿……！」

と言いかけた言葉を、相手のあたりを憚る様子にはっとして呑み込むと、手真似で室内に招じ入れ、素早く障子をしめた。

夜のふいの訪問者は、甲斐武田家の重臣板垣駿河守信方とその従者だったのだ。

この板垣と庵原忠胤は、四年前の天文六年二月、武田信虎の娘が今川義元に嫁して以来、昵懇の間柄になっていた。義元夫人に甲斐国産の季節の品々を届け、御機嫌伺いに参上した折りなど、板垣信方は囲碁を口実として庵原邸に立ち寄っては、かなり立ち入ったことまで腹蔵なく話していた。

そうした時、庵原忠胤は、たまたま居合わせた勘助を、

「これなる山本勘助は、わが縁者ゆえ、お気づかいなくお話しあれ」

と紹介しており、だから一昨夜、突然訪れた板垣は、勘助を見てむしろ吻とした面持で、思いもよらぬ重大事を口にした。

「庵原殿、われらが大殿を、今川家にてお預り戴けないだろうか？」

「えっ、何と仰せられた？」

庵原忠胤は、咄嗟には板垣の言葉を理解しかねたようだが、即座に勘助は、眉ひとすじ動かさぬ物言いで、

「やはり、そう決断なされたか……噂は得ており申したが、信虎公も少々無理を押し通

されたようだ。甲斐の国を生かすには、もはやそれより道はありますまい。武田家にとっても、今川家にとっても、その御決断は、将来必ずや佳き花を咲かせることになりましょうぞ」

「おお、山本氏もそう思うて下さるか？」

板垣は、よい知己を得たとばかりに、ぱっと顔を明るくした。

庵原忠胤も、この時になって、ようやく板垣の真意を悟ったか、

「ともあれ、その話は雪斎師に通した上で、共々に義元公のお許しを願うことに致そう」

「有難い、しかし極々、事は隠密裡に……」

「もとより、心得ており申す。なお板垣殿、あなたが駿府に来ていると知れては、事が面倒になる恐れがある。このまま、わが邸内にひそんでおられるがよい」

庵原忠胤のいう「雪斎師」とは、義元の叔父で今川一族の中心的人物である太原崇孚を指す。大龍山臨済寺の住職の身でありながら「智謀湧クガ如シ」と称され、軍陣にも参画する「黒衣の軍師」であった。

庵原阿波守忠胤は、珍しく機敏に行動した。生来、慎重な性格で、日頃から目立った動きを見せることのない老人だが、今川家にあってともすれば雪斎太原崇孚と比較されて、下風に立たされることが多いため、ここらあたりで存在を誇示したいと思ったに違

いない。

その彼が、板垣に対し、

「万事、うまく運び申した。御懸念なく事をすすめられよ」

と報告したのは、この日の午後も未ノ下刻（午後三時頃）であった。

なお、その際、庵原は、義元公ならびに雪斎師の同意を得るに当たっては、今川家に隠居滞留中の信虎公はじめ従者一同の賄料・衣服費などの一切を、武田家にて負担するなど、細部にわたって取り決めていたことが好感されたと言い、

「これは勘助の手柄であった」

と明かした。現実的な生活費の明細を口にしたのは勘助であった。

勘助は、こうした点を、厳格に決めておかないと、当主義元の生母で、「駿河の尼御台」と称される寿桂尼あたりから、必ずや異議がはさまれると主張したのである。

「有難い、これで武田家も救われ申した」

顔を輝かし、声も弾ませた板垣は、

「これより、直ちに……」

と、すぐにも甲斐へ帰国し、信虎の嫡男晴信を擁する腹心の飯富兵部少輔虎昌や甘利備前守虎泰らに、朗報を伝えたいと言ったが、庵原忠胤はそれを制して、

「この白昼、万が一にも、貴殿が当城下にあられる姿が、お方様付きの者らの目に触れ

でもしたら、それこそすべてが水の泡となりましょう。出立は人目につかぬ明朝未明として、ここは逸る気をおさえ、まずは一盤。囲むことと致そうではないか」

と碁石を打つ仕草をしたのは、いかにも何事にも慎重な老人らしい致し方であった。

勘助は、老人と板垣がいそいそと碁盤を囲むのを見てから庵原邸を出、この住吉屋のいつもの席に腰を据え、これからの武田信虎をめぐる事態の成行きに思案を凝らしていたのである。

（どうやら、いよいよ、この山本勘助の出番がやってくるようじゃ）

とそんな勘助の想念を断つように、突然、野太い声が頭上から降ってきた。

「一杯、馳走にあずかりたい」

石飛礫

酒を所望した声の主は、先程から大飯台の席について、しきりに勘助の方を盗み見していた筋骨逞しい、六尺有余（約一八二センチメートル）の牢人者であった。砂塵にまみれた蓬髪、右の眼尻から頬にかけてざっくりと刀痕を刻んだ、見るからに険悪な形相の持主である。

恐らく男は、居酒屋の小暗い店内の片隅で、一人ぽつねんと杯を舐めている小柄な勘助に目をつけ、ただ酒をせしめる魂胆と見てとれた。が、男がもし眼識ある者であったなら、この山本勘助という風采の上らぬ小柄な男の、時折り、思い出したように半眼を明けて、あたりを見る鋭い眼光や、酒壺を傾ける手の運びに、一点の無駄のないことに驚嘆の声を放ったに違いない。

しかし、酒を無心した牢人者は、勘助がいわれるままに黙って酒壺を手にとり、穏しく酒を注ぐと見てとるや、与し易しと思ったのであろう。

「椀に一、二杯では面倒である。その壺ごといただこう」

と言いざま、厚かましくも、勘助の中指の欠けた左手から酒壺を捥ぎとろうとした。

途端に勘助の右手がぴしりと牢人の手を払い退け、

「もはや、貴公には、一滴たりとも呑ましはせぬ」

と低声に叱責した。

「な、何っ、こ奴め！」

牢人者は、思わぬ勘助の手厳しい拒絶に、一瞬はっとたじろいだが、「こ奴め！」と言ったおのれの言葉に激情して、腰の刀に手をかけ、

「許さぬ。斬ってやる！」

「困った御仁だ……どうやら、これまで、このようにして押し通ってきたと見える。止むを得ぬ、お相手致そうが、ここでは店の迷惑となる。表に出られよ」

物憂げに言った勘助は、ツと荒壁の席を離れると、暖簾をはね上げて戸外へ出た。どうやら片脚が不自由のようだが、身のこなしは意外なほど敏捷なのである。

「……！」

牢人者は、この時になって初めて、自分はとんでもない化物を相手にしてしまったのかも知れぬ、と感づいた。これまでは居酒屋の屋内が小暗いために気づかなかったが、勘助の浅黒い顔には、数条の刀痕が刻まれてあり、そのくぐり抜けてきた人生の、ただならぬ激越さを無言のうちに物語っていた。

（これは！）

牢人の身内を、さっと恐怖感が走りぬけた。彼は心中に「失敗った！」と呻いたが、恐怖感に駈り立てられたように、いきなり抜刀して勘助に斬りつけた。

「死ねっ！」

と叫んだつもりが、次の瞬間、

「わあっ」

と悲鳴を上げて跳び退いたが、その彼の顔面をめがけて、二撃、三撃と石飛礫が襲いつづけた。

「や、石飛礫の丈太郎だ！」

見物人の誰かが叫んだ。見れば十四、五歳の少年が、牢人を狙って小石を投げつける

のだが、顔面を襲って強烈であり、的確なのである。

「あっ、小僧、危い、止せい！」

悲鳴を上げた牢人は、次々に襲いかかる石飛礫をかわし切れず、ついに顔面を左の掌でおおったが、指の間から鮮血がしたたり落ちて、もはや完全に闘志を喪失したと見てとれた。

「丈太郎、もうよい。勘忍してやれい」

「はい、お師匠様」

少年は、投じかけた手を下すと、

「あちらに、御家老様がお待ちです」

と川原の方を指さした。

この少年丈太郎は、今川氏親没後の家督相続をめぐる内紛、いわゆる「花倉の乱」の際、敗者に与して討死した桜庭某の遺児である。縁者無く、浮浪児同様の暮らしをしていたが、二年前の秋、勘助の目にとまって人生が一変した。

その時、丈太郎は、安倍川に石を投じて水切りを楽しんでいたが、飽いて宙を飛ぶ水鳥を狙い撃ちしたところ、殆ど百発百中の確率でこれを撃ち落とした。たまたまそれを目撃した勘助は、見どころありとして少年を屋敷に連れ帰った。少年の顔は、日灼けと垢で薄よごれ、着物も膝小僧が出ている粗末なものを身につけ異臭を放っていたが、双

の瞳は、見るからに悧発げに輝いていた。

「庵原阿波守様の食客が、食客を養うたそうじゃ」

これは、当時駿河城下で、半ば揶揄まじりに囁かれた評判である。

が、その浮浪児丈太郎も、今では小ざっぱりした着物にたっつけ袴、腰に小刀をたばさんだ、野性的な長身の少年に成長しており、勘助を「お師匠様」と呼んでいることでも察せられるように、行流の太刀捌きも厳しく仕込まれているのである。

勘助は、丈太郎に導かれ、庵原阿波守忠胤が待つという川原の方へ行きかけたが、ふと立ちどまって、まだ顔面を掌でおおって、蹲っている牢人者に、

「酒壺は、そこもとへ進ぜる。傷の手当てを済ませたなら、存分に呑むがよい」

と言い捨ててから、その場を離れた。

(御老体が、自ら出向いて来るとは、一体、何事が起きたというのか……?)

勘助は、心中に怪しみながら、草いきれのする土手径をたどった。夕映えをうつして、安倍川の流れが青く静かである。

丈太郎が案内した漁師の網小屋の陰には、意外にも、乗馬の手綱を手にした庵原忠胤と、同じく乗馬の手綱を握った、厳しい旅装の板垣信方と田丸半蔵主従が佇んでいた。老体の庵原が馬を駈って来るなど、尋常ではない。

「勘助」

案の定、庵原忠胤は、勘助の顔を見るなり、いきなり咳込むように、

「まずい、実にまずいことになりおった」

「一体、どうなされた?」

「実は」

と、板垣信方が庵原に代わって、勘助の疑問にこたえた。

「これなる拙者の家来田丸半蔵が、昨夕、二丁町にて、裏木九十郎とばったり顔が合ってしもうたと申します。御存知のごとく、九十郎は新当流の遣い手で、先年、われらの姫が義元公にお輿入れの際、特に信虎から姫付きの侍として、駿府に差し向けられた者で御座る。むろん彼は、半蔵が拙者に仕える者と知っております。当然、半蔵が駿府に来ているとなれば、主人の板垣も参っている筈と思うたでありましょう。

ところが拙者は、こたびは微行の旅ゆえ、まったく公の場に顔を出しておりません。いつもなら、何をおいても、まず姫——いや義元公夫人の前に、御機嫌伺いに参じるのが、これまでのならわしでした。それゆえ半蔵も、私用の一人旅とその場を繕ったと申します。

しかし、やはり不審に思った九十郎は、庵原殿が義元公や雪斎師と接触し、密談されしこと、拙者と半蔵が御家老邸に潜んでいることなどを、ひそかに探索したものと考えられます。とにかく、その九十郎が、今より半刻(約一時間)ほど前、にわかに旅仕度

をととのえて城下を出たと申します。これは、もはや彼がわれらの企てを察し、信虎公に訴えんとしていると見なして間違えありますまい」

「なるほど」

眉をひそめた勘助は、

「それはチト厄介なことになりそうですな」

「左様、事が露見すれば、拙者や飯富兵部、甘利備前などは、いかようになっても覚悟の上としても、若殿晴信様に難儀がおよぶのだけは、絶対に避けねばなりませぬ。何分にも大殿信虎公は狂気のお人、なにをなさるか分からんのです」

板垣駿河守信方ほどの者が、顔色を青褪めさせているのも無理はない。万一にも、嫡男晴信を中心にした重臣らに、信虎追放のクーデター計画ありと知ったなら、恐らく信虎は、即座に板垣らはもとよりのこと、晴信も容赦なく処断するに違いない。ここはいかなる手段を講じてでも、九十郎の甲府行を阻止せねばならないのである。

「勘助、これより直ちに九十郎を追跡せい」

庵原忠胤は、竹鞭でおのが横腿をぴしっと撲って言った。

「断じて、九十郎めに、国境を越えさせてはならぬ。断じてじゃ」

「……」

勘助は、内心に苦笑した。

（まことに勝手な老人だ。いつもこうである。斬れなどと、えらく簡単に言うが、実際に生死を賭けて闘うのは、他ならぬこの山本勘助なのだ。どうせまた、このことが無事に成就せば、仕官の儀は必ず纏まるよう尽力する、などと言うに違いない）

実際、庵原阿波守忠胤は、勘助を関東甲信越の諸国に潜行させ、情報の収集にあたらせる一方、今川家に害ありと見定めた人物の抹殺をはかってきたのだ。

（まこと古狸よ、この老人は。しかし今回は、俺自身のためにもなると見てよさそうだ。命ぜられずとも、やって見せ申す……）

心中に勘助は呟いたが、板垣は勘助が庵原忠胤の老人斑の浮いた顔を見返ったなり、沈黙したままでいるので、不安そうに、

「山本氏、思わざる御迷惑をかけることになってしもうた。が、もはや一刻も猶予ならぬ事態となりましたゆえ、ぜひ、われらに力を貸して戴きたい。本来ならば、わが手にて解決せねばならぬ問題なのだが、供の者といえば、これなる半蔵ただ一人。しかるに裏木九十郎めは、新当流手練の腕自慢……とても自分らの手に負える相手ではない。ここは何としても、行流の達人と聞く貴殿の御助力を仰がねばなりませぬ。ぜひ、お力添えを願いたい」

板垣は、必死の思いをこめて訴えた。

「勘助、板垣殿もああ申されている。助力して差上げるがよい」

庵原忠胤も、いつになく勘助が返辞を渋っているので、いささか困惑顔で言葉をつけ加えた。

「すでに同意なされたことであり、計画が信虎公に知られたら、それこそ今川、武田両家の間に、ヒビが入るような大事にまで発展しかねない。勘助、御助力致せ」

「分かりました。参りましょう」

勘助は、このへんが引きどころと見て、九十郎追跡を同意した。

聞いて板垣は、「有難い」と声も明るく、

「九十郎めを片付けたら、拙者らはそのまま甲府へ奔ります。信虎公が信濃海ノ口から凱旋なさる前に、何としても甲府に入らねばなりませぬ。皆様への御挨拶は、後日に改めて伺いまする」

「勘助、わしの馬を使うて、板垣殿とともに九十郎を追うがよい。よいか勘助、心してかかってくれ。事は飽くまでも、隠密裡に処理せねばならぬのだ。重ねて言う。絶対に隠密にだ。何、わしか、わしのことなら心配せずともよろし。屋敷までぶらぶら歩いて帰る。何だその顔は。年寄と思うて馬鹿にするな。屋敷へ戻るくらいの元気はまだまだある」

庵原は、勘助に手綱を渡すと、

「日が暮れる。さ、早よう去ねい」

「では、お馬拝借致す」

勘助は馬に跨ると、ちょっと夕空を仰いでから、ピシリと鞭をあてた。板垣信方がこれにつづき、遅れじと丈太郎と半蔵が走り出した。半蔵は、年の頃二十四か五か、見るからに実直そうな若侍であった。青い夕映の中を、一行は無言で走る。

勘助は、裏木九十郎は、興津宿から身延道を北上すると読んだ。駿府から江尻の宿まで二里二十九町（約十一キロ）。江尻から興津まで一里三町（約四キロ）の道のりだ。一気に北上と考えられないこともないが、九十郎の場合は、恐らく興津泊りで明朝未明出発、と勘助は確信していた。

身延道――駿河と甲斐をむすぶ街道は、興津川に沿った山峡の細道をたどることになる。夜分の旅は、緊急の場合といえど避けるに違いないのである。

（慌てるにおよばぬ……）

勘助は、時々、馬の歩調をゆるめた。丈太郎や半蔵のためだが、そのたびに板垣信方は不安げな顔をした。九十郎に追いつけないのではとの危惧なのだが、勘助は無視した。

東海道を上下する旅人は、すでに宿所に入ったか、たまに往き交う人の足も、心なし歩調を速めているようであった。

勘助は、この一件が、自分の生涯を左右するという予感めいたものを覚えていた。

星の記憶

夕空が暮色を深めるに従って、行く手の中天にポツンと星の瞬きが見られた。

「あ、一番星だ！」

弾んだ丈太郎の声に、勘助の表情に微妙なゆらめきがあった。彼は、星に思い出を持っているのだ。

勘助は、明応二年（一四九三）、駿河国富士郡山本村（静岡県富士宮市）に生まれ、幼名を源助といった。山本家は南朝の遺臣の後裔という吉野浄雲入道貞倫が、この地に落ちのびて、村名を姓としたに始まる。

入道貞倫は八幡社を創建して、自ら神職をつとめており、この貞倫の次男弾正貞久は、「海道一の弓取り」と謳われた今川家に仕えて功績をつんだ。弾正貞久の子、図書貞幸は、今川家の重職庵原阿波守忠胤の妹を妻に迎えており、その末っ子が源助である。

源助には、幼時から変わった性癖があった。星空に異常なほどに好奇心を示したのだ。大気澄明な晩秋初冬の候ともなると、幼い身でありながら、八幡社の階に腰をかけ、星空を仰いで飽かないのであった。それで祖父の貞久が、

「夜気が冷たい。もう内に入るがよい」

とうながすが、源助はかぶりを振って、

「大丈夫だよ、お祖父さま」

「そんなにも、星が好きか」

「うん」

「さては、客星吉凶を占う、陰陽師にでもなるつもりかな」

「いんや、兵法者になりまする」

「何、兵法者？……そなたは、並みよりも体が小まい。武術専一では大成もおぼつかなかろう。もっとも頭脳を使う軍師ならば、案外そなたでも道は拓けるやも知れぬ」

星空を仰ぎながら、白髯の祖父と孫はそんな言葉を交わしたが、そのとき祖父が何気なく口にした一語が、孫源助の生涯を決しようとは、さすが老練な元今川家臣にも予想だに出来なかった。

源助は、十二歳の時、三河牛窪（愛知県豊川市牛久保）の城主牧野右馬允の家老大林勘左衛門の養子となり、養父の一字をもらって勘助と名を改めた。

だが勘助は、文武研鑽と称して諸国巡遊に明け暮れた、実父山本図書貞幸の熱い血を色濃くうけたのであろうか、彼もまた、二十歳になるのを待っていたように、諸国修業の旅に出た。

旅する勘助の脳裏には、つねに、

「頭脳を使う軍師ならば」

という祖父の一語があった。だから彼は、剣術も当時高名な塚原卜伝の創始になる新当流ではなく、ほとんど世に知られぬ行流を学んだのも、新当流といえども上手と下手がいる筈、流儀などはどれでもよい、という彼なりの判断からである。世に広く知られないだけに、いかなる秘技を隠しているか、と相手に遅疑逡巡をおぼえさせる効果もある筈なのだ。

勘助は、戦国の諸国を遍歴しながら、国主や城主の人物評、将兵の強弱から兵備戦力、経済力および地理風俗にいたるまで克明に頭脳に刻みつけた。これらは、体の小柄な彼が、骨格雄偉な兵法者たちにも優る秘策なのであった。

そんな勘助でも、高野山の摩利支天堂に籠って心気を凝らしたのは、われながら神妙のいたりであったと、のちのちまで彼は、おのれの若き日を懐かしんだものである。

ともあれ、諸国を巡歴すること十五年余、その間どれほど生死を賭した修羅場をくぐり抜けたことか。日灼けした浅黒い顔には、いつしか数条の刀痕が刻まれ、手の指は欠け、足も片脚不自由という凄じい姿は、彼のたどった激越な人生を如実に物語った。

やがて、三河牛窪の大林家に戻ったところ、勘助の無残な姿を見た養母は、いかにも薄気味悪げな面持で、おずおずと、

「そなたが……あの勘助かえ?」

と言ったことである。

「……」

静かに頷いた勘助は、この瞬間、心中に大林家との決別を決断した。十五年余もの歳月、広く世間を見てきた彼は、もはや大林家を継ぎ牛窪城の家老として一生を終える気など、完全に喪失していたのだ。

養家を去り、生まれ故郷・駿河の山本村に帰った勘助は、旧姓に復して山本勘助となった。祖父弾正貞久はすでに亡く、父図書貞幸が神妙に八幡社を守っていた。

この実家に留まること、わずか数日にして勘助は駿府城下へ出た。母の縁により庵原阿波守忠胤の推挙をうけ、今川家へ仕官しようと望んだのである。今川氏は足利将軍家の支族であり、

「将軍家に嗣子なければ吉良家より選び、吉良家に子なくば今川から」

とまで言われた名門なのだ。その今川家に仕えて、長年、研鑽してきた戦術・戦略などの腕を、存分にふるうことが出来たら、と勘助が願ったのも無理はない。

しかし、勘助の不運は、今川家を「海道一の弓取り」と称されるまでにのし上げた雄将今川氏親が亡くなっていたことだ。氏親の未亡人寿桂尼が、家臣から「尼御台」と畏怖されるほど権勢をふるっており、老臣庵原忠胤ほどの者が、

「これなる山本勘助は、城取り、陣取りの軍法に練達している大剛の者で御座る。お召

し抱えあらば、必ずやお家のために寄与すること大なるものがありましょう」
と力説して推薦したにもかかわらず、彼女は勘助の面貌に嫌悪の情を露骨に示し、すうっと座を立って奥に入ってしまった。
老臣庵原の面目丸つぶれだが、後刻に彼女は、
「わが今川家は、京都との交流が深く、これからはいよいよ緊密となる筈じゃ。あのような醜い面貌の者が当主の身辺にあっては、都への聞こえもいかがなものかと案ぜられる。重職にある阿波守ともあろう者が、少々、気配りが浅うはありませぬか」
と叱責した。
むろん、庵原忠胤は、そのことは胸に秘め、勘助には言葉やわらかに、
「運悪く、本日は寿桂院様御不快の日であった。仕官のことは、日を改め、御機嫌うるわしき折りに申し上げるであろう」
と慰めている。
以来、勘助は庵原忠胤の食客として、ひどく不安定な歳月を送ってきたが、このたび、武田家の重臣板垣駿河守信方があらわれた途端に、事態は思いもよらぬ展開を見せたのであった。
（この機会を生かさずば、わが一生は食客で終わることになる）
勘助は、凝と思念をこらして馬を進める。

裏木九十郎を追跡した勘助ら一行は、興津の清見屋なる旅籠に上った。このあたりは東海道切っての景勝地である。往昔、上洛した源頼朝が鎌倉への帰途、当宿に宿泊しており、また女流歌人阿仏尼が『十六夜日記』に書きとどめて以来、興津浦の浪音の聞こえる宿として世に知られているが、もとより、今の勘助らにその風流心は無縁のものであった。
とりわけ板垣信方などは、九十郎を見失うではないかという不安で、ひどく落ち着かぬようであった。
「山本氏、九十郎めは、確かにこの宿場におりましょうか。よもや夜道をかけて旅をつづけているじゃありますまいな」
「御案じあるな、貴奴はきっとおります」
実は勘助は、宿に着くなり、丈太郎に何事かを命じており、さっと姿を消した少年は、わずか四半刻（三十分）後には、九十郎が薩埵屋なる旅宿に草鞋をぬいだことを突き止めて来た。薩埵屋は清見屋の三軒先にあり、容貌のすぐれた遊女を抱えていることで知られていた。
「板垣殿、聞いての通りであります。九十郎が確かに当宿にいるとあれば、もはや案ずることはありませぬ」
勘助は、板垣に酒をすすめ、おのれも盃を傾けて、いかにも九十郎との対決など歯牙

にもかけぬといった風情であったが、床に入った途端、厳しい表情になって、凝と天井を睨んでいた。

その勘助が、翌朝未明、意外な行動をとった。板垣にも、丈太郎にも知らせず、そっと宿を脱け出た彼は、東海道と身延道（甲駿街道）の分かれ路にある、皂莢の巨樹の根方に腰をおろしたのだ。これより左に路をとり、興津川に沿って緑濃い山峡の街道を北上すれば、おのずと甲斐国へといたるのである。

夏の夜明けは早い。乳白色の朝霧も、間もなく晴れ上るに違いない。——と、勘助が立ち上った。それまで地面に立てていた差料を、ゆっくりと腰にたばさむと、片足を引きずるようにして、道の中央に進み出た。

宿場の家陰からあらわれた騎乗の武士もまた、馬をとめてこなたを見据え、

「やはり、そなたが来おったか」

と言ってから、

「確か、山本勘助とかいうたな。おのれを今川家に売り込まんがため、笑止にも、行流を良く遣うなどと広言しおるから、こうしたことになりもするのだ。もっとも食客の身では、主人の下知を拒むわけにもいかんだろうが、この裏木九十郎を相手にしての決闘など、命あっての物だねというものよ。止しとけ、止しとけ。今のうちなら、いずれへなりと姿をくらますか、それとも行き違いになって、遭わなんだことにしてやってもよろしい。さ、早く立ち去るがよい。さもなくば、可哀そうだが斬り捨てることになる」

九十郎は、軀が小柄で、足も不自由そうな勘助を頭から呑んでかかっている。六尺有余の筋骨逞しい彼にすれば、勘助など一撃で討ち果たせると思っても不思議はない。が、それでも勘助に立ち去る気配はなく、黙然と行く手をさえぎっているため、ふっと表情を険しくして、

「どうやら、死ぬる覚悟のようだな。貴様がその気ならば、止むを得ぬ。可哀そうだが、斬って捨てるほかないな」

と言い、馬上から降り立とうとした。

瞬間、それまで一語も発せず、馬上の九十郎を凝視して、うっそりと佇んでいた勘助が、一転、ぱっと跳躍した。

「えいっ！」

気合を発し、九十郎めがけて殺倒した時には、抜き放った白刃が九十郎の脇腰を裂いていた。

「げえっ」

鐙にしがみつくようにして、ずるずると地面に崩れ落ちた九十郎が、苦しげに、

「ひ、ひ……」

と呻いたのは、恐らく「卑怯」と言いたかったのであろうが、勘助は表情も変えず、

「われらの決闘は、おぬしが駿府を脱け出た時から、すでに始まっていたのだ。人をあなどり、油断したおのれを恨むがよい」

と言いざま、九十郎の太い喉元へ、留めの一太刀を真っ直ぐに突き通した。

それからの勘助は、まるで何事もなかったように沈着冷静であった。宿所の清見屋に戻って板垣信方に、

「もはや霧は晴れ申した。板垣殿、朝食をとられたら、甲府へ発たれるがよい」

と言ったが、寝覚めたばかりの板垣は、咄嗟には勘助の言葉の意が汲みとれず、

「霧が晴れ……？」

と問い直したほどであった。が、その時、宿の者の立ち騒ぐ物音がしたと思うと、

「大変だ、薩埵屋泊りの御武家さんが、皂莢の木の近くで斬り死しているそうじゃ」

と言う叫び声が響き渡った。

「あ」

驚く板垣に、勘助は頷いて見せ、

「さぞかし飯富・甘利の御両人も、やきもきしてあられましょう。あとは信虎公が凱旋される前に、甲府へ入られることだけで御座る」

「忝い！」

板垣は声を弾ませて、

「半蔵、朝食を食ったら、直ちに出発じゃ！」

勘助も、ぼそりと言った。

「丈太郎、われらも駿府へ戻るぞ」

強い日射しは、もう夏のものであった。

暗闘

その頃、甲斐国甲府では——。

飯富兵部少輔虎昌が、足ずりせんばかりに気をもんでいた。つい先程、信濃小県の海野氏攻略の捷報が、伝騎によって躑躅ヶ崎館にもたらされたからである。

（どうする、どうする……信虎公が凱旋された時、板垣信方の顔が見えなんだでは、何と説明すればよいのだ。まさに駿河へ参っているとは言えんじゃないか……信虎公の駿河隠居のこと、不首尾に終わったらおわったでもよい。板垣氏よ、とにかく、一刻も速く帰って来てくれい）

今、飯富兵部の脳裏を占めているのは、ただそのことのみであった。飯富兵部といえば、身につける武具のすべてを赤色にした騎馬兵団を率いて戦野を疾駆し、ために「飯富の赤備え」と敵に恐怖された武田家切っての猛将だ。その彼も、万一にも信虎凱旋ま

でに板垣が甲府に戻らぬ場合を考えると、足ずりせんばかりに気持が焦るのであった。むろん、書院前の心字池のほとりに、去年、要害山から移植した山百合の花が一輪、この日、初めて開花したなど目にも入らない。

（それにしても……）

と飯富は、熱くなった頭で考える。

（どうして、御当主信虎公を強制的に駿河へ隠居させる、などという途方もない企てを思いついたのだろう。何事であれ慎重に過ぎるほど慎重な筈の甘利備前守虎泰までが、もはや腹をくくるしかあるまい、と俺の手を握りしめるに到った発端は何なのだ……？）

宙に眸を据える飯富兵部の脳裏に、ぼうっと浮かび上がるのは、あの躑躅ヶ崎館の大広間に突然現出した、空気の凍りついたような一瞬の光景であった。

あれは確か、信虎の嫡男晴信が、十四歳を迎えた正月のことだから、天文三年（一五三四）の年頭恒例の賀宴の席上であったと思う。

前夜遅くまで吹き荒れていた雪も、その日は朝から、雲ひとつない抜けるような青空と、眩しく輝くばかりの雪景色となった。そして賀宴の始まる巳ノ下刻（午前十一時頃）には、寒気も大きくゆるんで、館の軒廂からつたわり落ちる雪解水の水滴が、タチ、タチと音を聞かせるまでになった。

武田一門衆をはじめ諸部将が、白雪を踏んでぞくぞくと年賀に姿をあらわし、たちまち館の大広間は、武骨な面々で埋められた。

近隣諸国から「甲斐の虎」と畏怖される武田左京大夫信虎も、この日ばかりは新年の賀詞をうけるたびに、にこやかに挨拶を返すなど、見るからに好機嫌のていであった。その信虎の近くには、北の方大井夫人および、嫡男勝千代（晴信）、次郎（信繁）兄弟も行儀を正して控えており、これまた正月ならではの光景といってよい。

一通り、年頭の挨拶が済んだところで、引きつづき酒宴となったが、やがて酒気をふくんだ部将たちの声高な談笑や、さびのある謡が聞かれたと思うと、柄にもなく艶っぽい声で、

　髷の中へ身を投げばやと
　　思へど底の邪が怖い

などと、「外面女菩薩、内面女夜叉」を諷刺した、はやり唄をうたう者もあり、これまた新春の賀宴らしい華やぎが感じられたことだった。

飯富兵部には、すべてが、なごやかに何事もなく平穏に過ぎていくと思われた。が、隣りに座っていた板垣駿河守信方が、なんぞ披露することでも思いついたか、空咳をひとつして立ち上り、両手をひろげて、

「御一同、静まられよ」

と制した。

板垣信方の声に、ざわめきが潮を退くように消えた時、それまで満足気に、一座の華やぎを見守りながら、にこやかに朱杯を口にはこんでいた信虎が、突然、

「次郎、杯をとらす」

と言ったのだ。

それが丁度、ざわめきが静まった時なので、甲高い信虎の声のみがはっきりと聞かれた。当主が長男の勝千代をまったく無視し、まず第一番に次男の次郎信繁に祝いの杯を与えるというのだ。

「……!?」

嫡男勝千代の傅役たる板垣信方が、一瞬摶たれたように眼を見張って絶句し、居並ぶ諸将もまた息をつめたのも無理はない。これは当主左京大夫信虎が、

「わが武田宗家の家督相続は、次男の信繁に決した」

と暗に公表したものと見たからである。

「……!」

瞬時、目出たかるべき大広間の空気が凍りつき、死んだ。思わざる信虎の振る舞いに、おろおろし、しかし一語の抗議もしかねている夫人の姿は痛ましいが、板垣信方や飯富兵部の困惑を救ってくれたのは、勝千代当人が何事もないかのように、眉ひとすじうご

かさず、平然としていたことだ。

信虎は、徹底した独裁者である。彼はいかなる者の諫言でも、いっさい受けつけない。もし、諫言する者があれば、即座に「主を軽んずる」と断ぜられ、死を与えられた。

例がある。

重臣山県虎清、馬場虎貞、内藤虎賢、工藤虎豊らが、あい次いで果てたのも、信虎が一族の加々美四郎を討ったのを諫言したためなのだ。彼らは、その名に「虎」の一字を与えられていることでも知れるように、まさに「股肱の臣」というにふさわしい忠誠の臣ばかりであった。にも拘わらず、ひとたび信虎の意に逆らえば、容赦なく死にいたらしめられている。これでは、諫言する者などあろう筈はなく、今、信虎が長男勝千代を無視し、弟の次郎信繁に酒杯を与える理不尽をおかしても、さすがの板垣信方や飯富兵部ですら、ただ息をのんで見守るばかりなのであった。

その時、彼らは一様に、

(殿と若が、かような事態になろうとは……)

と胸に呟き、嫡男勝千代が誕生したと知った時の、信虎の小躍りせんばかりに狂喜した姿を思い起したものである。

そもそも左京大夫信虎は、父の十七代の信縄が若くして急逝したため、わずか十四歳にして、始祖新羅三郎義光いらいの血脈を誇り、武家の名門「甲斐源氏」といわれる甲

斐国守護の武田宗家十八代目を相続した者だ。

武田家の拠点たる甲斐国は、山と山の間――「峡」の国の意をもって国名とされたといわれるほど、四面重畳なる山脈にとりかこまれた山国である。この地理的悪条件ゆえに、武田氏は小土豪的な地位に甘んじざるを得なかったが、気性の激しい信虎は、歯ぎしりして隣国への進出をはかった。とりわけ気候が温暖で、地味豊饒な南への進展は、彼、年来の悲願といってよい。

しかし、南には駿河に今川氏、相模に北条氏という強大な勢力が控えていて、信虎の南下を頑強に阻んでいる。いや、甲斐から南下をはかるどころか、逆に、いつ、今川や北条が大軍をもよおし、甲斐に侵攻してくるか分からぬ、というのが現実なのであった。小土豪的な群雄割拠の甲斐国には、悲しいかな、大国の乱入をこばむだけの力がないのである。

大永元年（一五二一）、今川氏の部将福島上総介正成が、富士川沿いに攻め入ってきた時も、途中、少しも抵抗をうけることなく、するすると武田家の膝元まで侵攻して、飯田河原の合戦となったのだ。

この合戦は、信虎得意の謀略でもって敵将福島正成を討ち取り、さいわいにして武田軍の勝利に終わりはしたが、その時の信虎は、万一の場合にそなえて、躑躅ヶ崎の館から妻女を裏山の要害山城に移した上で出陣したほどで、心中まことに悲愴なものがあった。

その信虎が、二ヶ月ぶりに凱旋すると、思わぬ吉事が留守中に起きていた。夫人に男子が出生しており、しかも聞けば、彼が福島正成を討ち取り、敵勢を撃破した当日に、産声を上げたことになるではないか。信虎は、

「これは、家運隆盛の瑞祥ぞ！」

と狂喜し、この戦乱の真っ只中に生れた男子に「勝千代」と命名したのだ。

歓喜の声を放ったその時の信虎の、高揚した明るい笑顔を板垣信方や、飯富兵部、甘利備前ら宿将らは今でもはっきり覚えているのである。それだけに、現在の嫡男勝千代晴信に対する信虎の仕打ちが信じ難いのである。

父子の奇妙な感情のずれは、次男の次郎信繁が誕生した頃から、しだいに表面化していった。信虎の愛情が次郎信繁にと移っていき、ついに勝千代十三歳の時、いわゆる「鬼鹿毛事件」が起き、父子の仲は最悪の状態に陥ってしまったのだ。

（人生、いつ、何が起きるか分からぬものだ）

板垣や飯富らには、あの「事件」で一気に父子関係が暗転したという思いが濃いのである。

隠忍の季節

信虎が長男勝千代を無視し、弟の次郎信繁に、新年の賀宴の席上、諸将を前にして、

「次郎、杯をとらす」

などと、露骨に嫌がらせの態度に出るのも、あの「鬼鹿毛」のせいであると板垣信方と飯富兵部らは知っていた。

「鬼鹿毛」

これは信虎秘蔵の名馬で、丈四尺八寸五分（約一四七センチメートル）。往昔、宇治川の先陣争いで有名な、源頼朝の部将佐々木高綱の生月、梶原景季の摺墨という両名馬に優るとも劣らぬと評判される駿馬である。

勝千代が、この名馬「鬼鹿毛」を、使いの者をもって父にねだった。むろん信虎には、愛馬を譲りあたえる気持などないが、嫡男の所望とあっては、嫌だともいいかねて、

「まだ若年の勝千代に、鬼鹿毛などという駿馬は似つかわしくない。来年は十四歳を迎えて元服することだから、その際、わが武田家重代の御旗、楯無しの鎧、郷義弘の太刀、左文字源慶の脇差など、ことごとく譲って進ぜるつもりである」

と返答した。

この時点での父子には、それほど深刻な溝はない。独裁者信虎も勝千代を嫡男とみとめていたし、勝千代にも父親への甘えが見られるからだ。

しかし、勝千代は、父信虎の返辞に納得しなかった。彼が「鬼鹿毛」をむしょうに欲しくなったのは、家中の若侍たちが、馬場で愛馬の早駈けを競っているのを見物してからである。

躑躅ヶ崎館の大屋根に夏陽炎がゆらぎ、要害山の峰の上空に、白銀色の巨大な入道雲が湧きあがっていた日、黒ずんだ緑の氾濫する馬場を奔る馬は、風を斬って光り軽快であった。時折り、短い気合を発し、鞭をふるう若侍たちも、片肌を脱いで心地よげだ。

（父上の鬼鹿毛で奔ったなら、いちだんと爽快に違いない！）

脳裏をその思いが掠めた途端、勝千代の頭は鬼鹿毛欲しの一念で凝り固まっている。

彼は、かさねて父信虎のもとへ使者をつかわして、

「武田家重代の宝物は、御家督を譲りくださる時に頂戴すべきであり、来年、元服とはいえ、これまで通り部屋住みの身分では、宝物を譲りうけることは出来かねます。しかし鬼鹿毛のほうは、ただ今から乗り習って、一両年のあいだに、どこぞへ御出陣の際には、若年ながら御後備えをつとめたいと覚悟すればこそ、かように所望いたすのでございます。それなのに、先のようなお言葉は、何とも納得いきかねまする」

と口上させ、あらためて、鬼鹿毛を賜わるように懇望した。

板垣や飯富が、心中に、

（まずいな……）

と思った時には、事態は一変した。

「何っ」

信虎の眉間に稲妻が走って、

「勝千代めが、左様なさかしらなことを申しおったか！」

独裁者には、勝千代の反抗的な態度が癇にさわるのだ。信虎は凄じい形相で、

「家督を譲るも、譲らぬも、この信虎の胸ひとつによることだ。他人に容喙はさせぬ。せっかく、武田家重代の宝物を譲りあたえようというのに、それがいやだと申すならば、弟の次郎を総領となし、これに家督を譲り、父の下知に従わぬ奴は、わが武田家から追放するほかはない」

と言いざま、備前兼光三尺三寸（約一メートル）もの大太刀を抜き放つや、

「おのれ、斬ってくれるわ！」

と使者を追いまわした。

信虎は兇暴だ。ひとたび、かっとなれば、重臣、老臣をも手討ちにするし、何をしでかすか分からない。

もっとも、そんな漢なればこそ、わずか十四歳で武田宗家を相続して以来、目標を宗家の権威確立の一点にしぼり、そのためには叔父油川信恵をも討ち果たし、一族であり妻の父親大井信達が、駿河の今川氏親の支援をうけて反抗した際も、容赦なくこれを撃破して臣属せしめるなど、十数家もの一族すべてを、宗家の傘下におさめ、甲斐の統一をなしとげ得たというべきかも知れない。

ともあれ、「鬼鹿毛事件」の場合は、たまたま躑躅ヶ崎館に来合わせた、信虎も信をおく春巴和尚のとりなしで、危く事なきを得たものの、以来、信虎は露骨なまでに勝千代をうとんじるようになった。

信虎の狂気を知る板垣信方は、

「若、あまり大殿に逆らい給うな」

と注意した。

「天下の名馬鬼鹿毛というても、しょせん馬は馬……そんなものと引き換えに怪我をしてはつまりませぬ」

「わかった」

「飯富兵部も、胸を痛めておりましたぞ」

「うむ、今後は充分に気をつけよう」

勝千代も、信頼する二人の配慮には素直であった。確かに、このままでいくと、武田家嫡男の資格を取り消され、ほんとうに追放されかねないのだ。信虎ならば、やりかね

ないのである。

（確かに、危いな……）

これまでの勝千代、しばしば少年とも思えぬ鋭さを示したが、父信虎の敵意を避けて、茫洋とした言動をとるようになり、心の中をのぞかせぬようになった。そんな彼の姿を『甲陽軍鑑』は、

「馬に乗っては落ちて背に土をつけ……物をかけ共あしく書き、水をあびてもふかき処に入りて取りあげられ、石・材木の大物を引けども、舎弟次郎殿は二度引き給えば勝千代殿は一度なり……」

としるしてあり、真実、うつけた少年のようになって、十四歳を迎えた新年の賀席で、父信虎が嫡男である自分よりも先に、弟次郎へ杯をあたえても、何事もないように平然としているのであった。

板垣や飯富には、そうした勝千代の胸中が分かるだけに、ひそかに、

（痛ましきことよ）

と暗然としていたが、それでも信虎の長女が今川義元に嫁いだ翌年には勝千代にも元服の日が訪れた。

天文五年三月一日、十六歳の勝千代は、元服して信濃守大膳太夫晴信となった。

また、同年夏、甲斐の山々の上空に白銀色の入道雲が湧きあがる頃、京の名門清華七

家の一である転法輪家三条左大臣公頼の息女が、晴信のもとに降嫁した。これが世に三条夫人と称される正室であり、晴信という名のりも、足利十二代将軍義晴の一字をあたえられたという風に、いかにも甲斐の守護武田家の嫡男にふさわしい華やかさであった。これまで父信虎にうとんぜられた小暗い境遇を思えば、まさに一陽来復といった趣きさえ感じられたことである。

板垣信方と飯富兵部は、ほっと胸を撫でおろしたが、元服後も、婚礼後も、信虎の晴虎に対する態度は少しも変わらなかった。信虎は無言のうちに、まるで、

「わしのすることに異論のある奴は、わしの前に出てはっきりと言うてみよ」

と言っているように挑戦的にすら見うけられた。青味を沈ませた眼の奥に、時折りちらと揺曳する狂気の光を見ては、板垣、飯富といえども沈黙しているよりなかった。

二人はこもごもに、不運な少年を慰め、

「若、今しばらく、隠忍なされよ」

「やがて大殿のお気持も、きっと綻びる日が参りましょうぞ」

「心配すな。おれは、かほどのことで、参ったりはせぬ」

晴信はそうこたえ、心中に期することがあるように、深い微笑を口辺に湛えるのであった。

その晴信が、この年陰暦十一月、父信虎に従って、信濃海ノ口城の攻略に出陣した。

武将たることの門出ともいうべき初陣である。

海ノ口は、今の長野県南佐久郡南牧村海ノ口だ。山城の城主平賀源心は、身の丈七尺余（約二一〇センチメートル）、十人力、つねに四尺三寸（約一三〇センチメートル）もの剛刀をおびているという怪物的な豪の者で、その勇猛果敢な武者ぶりは広く世に知られていた。

源心は、武田軍来攻と知るや、ただちに諏訪、村上、小笠原ら信濃の諸豪族に支援をもとめる一方、急遽、籠城の態勢をととのえた。歴戦の経験豊かな彼は、この寒気きびしく、雪深い季節に、どれほどの期間、武田軍が海ノ口城包囲陣をしいておれるか知っているのだ。

「信虎の馬鹿めが、なにを血迷いおったものやら、この大雪に兵を繰り出しおって……」

源心は、四尺三寸の大太刀を撫でながら、不敵に笑ったものである。城の構えを堅くして、凝と籠っていさえすれば、いずれ武田軍は、雪中の陣に耐えかねて、兵を引揚げざるをえない筈なのだ。

一方、兵八千を率いた信虎は、雪の峠を越えて信濃に乱入、海ノ口城の攻撃を開始したものの、予想以上に城は堅固であり、なかなか攻め陥せぬ上に、幾年ぶりともいう大雪ときびしい寒気になやまされ、ついに兵の引揚げを決断した。

滞陣、一月余、天文五年も余すところあと数日となっており、吹雪の中の長滞陣に兵の疲労も濃いのである。

「年明けてから、あらためて参るわ」

信虎は、いかにも無念の面持で、甲斐への引揚げを宣言した。

すると、晴信が進み出て、

「この晴信に、殿軍を申しつけて下されよ」

と願い出た。

聞いて、信虎は苦り切った面持で、

「武田家の総領たる者が、われから殿軍を望み出るとは、まことに呆れ果てた奴よ。たとえ命ぜられたとて、断わるが当然ではないか。これが次郎ならば、必ずやそうするであろうに、なんと情けない奴じゃ」

と、またもや、晴信の弟次郎信繁の名を持ち出して叱りつけた。

「しかし」

と晴信は言葉をつづけた。

「兵三百をもって、敵の追撃を断ちますゆえ、なにとぞ、殿軍たることをお許し下さりませ」

「馬鹿な、この大雪だ、追撃などしてくるものか」

信虎は、いまにも癇癪玉を破裂させそうな顔でこたえた。

それでも晴信はあきらめず、再三願って、ついに許しを得た。最後に信虎も、

「勝手にせい」

と吐き捨てるように言ったのだ。

「有難う存知まする」

礼をのべた晴信は、翌日、信虎の率いる本隊が甲府へ引揚げるのを、わずか三百の殿軍で見送っている。

そして夜、最後に本隊の後を追って引揚げると見せかけた。このとき晴信は、殿軍の将兵に対し、一人につき三人前の兵粮をこしらえさせた上、軍装を改め、馬にも充分に餌をあたえて万全の準備をした。

また、部隊発進は明朝寅ノ刻（午前四時頃）。厳寒の時刻ゆえ、上戸・下戸にかかわらず、出立の際は酒を飲むようにと、自ら触れまわった。それで将兵たちは、

「なるほど、大殿が晴信様をうとんじなさる理由が分かった。この寒天に、しかも寒気のもっとも厳しい寅ノ刻に、後を追ってくる敵などいるものか。これはやはり、御舎弟次郎様が、武田家をお継ぎなさるのが良いのかも知れない」

「まったくじゃ、妙なお方に上に立たれては、下々のわれらが苦労するばかりだからな」

などと囁き合った。

国境閉鎖

翌朝寅ノ刻。

前触れのごとく、暖かい食事をとり、酒で体を暖めた武田殿軍三百は、進軍の下知が発せられると同時に、甲府へは向かわず進路を反転、さっと海ノ口城へと迫った。

これが暮の二十八日のことで、一時は籠城三千人をかぞえた海ノ口城も、今はわずか七、八十人の兵しか残っていない。武田軍が甲府へ引揚げたと見てとった支援の将兵たちが、年越しの用意をするため、それぞれ自領へ戻ったためである。

城に残った源心らも、夜には武器を伏せ、鎧を脱いで酒宴を催し、月余におよぶ籠城戦の疲れを癒していた。むろん彼らは、晴信の一隊が進路を急反転し、ひそかに城へ迫っているとは夢にも知らず寝込んでしまった。

やがて——城壁をよじ登り、音もなく忍び入った晴信隊は、火を放って、にわかにどっと攻撃を開始した。

寝込みを襲われては、さしもの平賀源心もたまらない。筋金入りの太い八角棒をふりまわして暴れまわったが、弱冠十八歳の教来石民部——のちの馬場美濃守信春に討ち取

られてしまった。

猛将と恐怖された父親信虎が、八千の兵をもって、月余をかけてなお陥せなかった海ノ口城を、わずか三百の兵で一夜に落城させてしまったのだ。うつけた少年と見られてきただけに、この鮮やかな初陣の印象は強烈である。

板垣信方が、眉を開いて、

「良かった、よかった。これで大殿の若を見る眼もお変わりなさるじゃろう」

と言えば、飯富兵部も、

「まっこと、長い長い冬じゃったのう」

と頬を綻ばせたものである。が、事態は二人の思惑を完全に吹きとばす方向へと突き進んだ。

勝利の報告をうけた信虎は、意外にも不気嫌な面持で、

「晴信めは、海ノ口城を陥したと自慢しているようだが、それなら、そのまま城にとどまって、使者をもって報告すればよいことであり、城を捨てて帰るなど、臆病者のすることよ」

と、まったく喜ぶ様子を見せず、それなり二度と、海ノ口城や平賀源心の名を口にしようとしなかった。

恐らく信虎は、これまで不敗の猛将として聞こえ、「甲斐の虎」と畏怖された誇りを、

初陣の晴信によって傷つけられたとの思いであったに違いない。

独裁者信虎にとって、このことは、たとえわが子なりとも赦せないのである。彼が、わが子の戦功に対してすら、

(小癪な小僧めが……)

と、敵愾心めいたものを覚えるのは、戦国乱世に生きる武将の、ほとんど宿業ともいうべき哀しいさがであった。

「父上が、さようなことを申されたか」

晴信は、暗い眼をして唇を噛んだといわれるが、板垣や飯富も、予想を裏切る成行きには、額を叩いて、異口同音に、

「なんたることぞ」

と呻いたことだった。

事実、信虎・晴信父子の間に生じた亀裂は、日をへるにつれて拡大し、深刻化し、もはや和解は不可能かとすら思われた。この二人の険悪な関係に、ひそかに胸を痛めたのは、晴信の弟の次郎信繁であった。

(兄上こそ、わが武田家の統領たるにふさわしいお人なのだ。父上は何故に、優れた武人である兄上をあのようにうとんじられるのだろうか……)

生まれつき温厚な次郎信繁は、兄と対比されることを、つねづね苦痛に思っていた。

同じ母から生れた兄弟なのにと、子供ながら不思議に思えてならなかった。事実、当主の信虎におもねって、家中の者たちも、嫡男の晴信をあなどり、弟次郎信繁のほうを褒めあげるといった歪んだ風潮になっていたのである。

（困ったことだ……）

次郎は、首をふって歎じた。彼は少年ながら豪気で、しかも詩才に長けた兄晴信が好きだったのだ。

こんな次郎の困惑をよそに、しかし当の晴信は、一見、父親にうとんじられていることなど、それほど気にかけていないかに見うけられた。傳役の板垣信方に諫められたほど、部屋に閉じこもって、詩文つくりに熱中していたのである。

簷外ノ風光分外新ナリ
簾ヲ捲ケバ山色吟身ヲ悩マス
屏風マタ蛾眉ノ趣キアリ
一笑靄然美人ノ如シ

また、

さみだれに庭のやり水瀬を深み
浅芽がすえは波よするなり

などの作品が遺されているところをみると、相当文学的な才能にめぐまれていたと見てよさそうだ。

そんな晴信の噂を耳にした信虎は、

「武将たる者が、何たることぞ……！」

と吐き捨てるように言い、いよいよ晴信に嫌悪の情を露骨にして、

「次郎ならば、さような馬鹿はしまいに」

と、もはや晴信を廃嫡に処するほかない、といった物言いであった。

晴信二十歳の天文九年十二月、妹禰々十六歳が、信濃の名族諏訪刑部大輔頼重のもとに嫁ぎ、信虎はいよいよ精力的に武田家の伸長をはかるかに見うけられた。

その翌十年の春は、

「人馬トモ死ヌルコト無限、百年ノ内ニモ御座ナク候ト人々申シ来リ候。千死一生ト申シ候」

と、『妙法寺記』にしるされているほどの大飢饉であった。

この時である。板垣信方と飯富兵部という武田家の重臣が、重大な決意をせざるを得ないような事態が起ったのは。「人馬トモ死ヌルコト無限」という大飢饉の最中に、信虎は平然と、信濃小県の海野氏攻略を強行したのである。

さすがの板垣信方も、思わず、

「狂気の沙汰じゃ」

と唸るように呟いたものである。

事実、甲斐の人民は、軍役の過重に苦しみ、苛酷な兵粮の徴発にあえぎ、いまや信虎怨嗟の声が山野に満つ、といった危機的状況にあったのだ。

「このままでは、武田家が駄目になる」

という板垣の危惧に対して、飯富兵部は低声に、

「晴信様がいなさるではないか」

と応じ、凝と板垣信方の眼をみつめながら、

「もはや、われらが腹をくくるしかないな」

「うむ、どうやらそのようじゃな」

「駿河へ行って下さるか？」

「むろん、喜んで……今川家の家老庵原阿波守とは、われらが姫君の御輿入れ以来、昵懇にしているゆえ、このあたりから話を進めれば、と思う」

板垣信方と飯富兵部は、甘利備前を交えて密談、万端の手順を打ち合わせた上、ひそかに板垣が甲府を脱け出たのである。

ところが、いまだ板垣が駿河から戻らぬうちに、信虎凱旋の報せが伝騎によってもたらされたのだ。さすが豪気な飯富兵部が顔色を青褪めさせたのも無理はない。が、いかに気を揉んだところでどうにもならぬ。

（どうする、どうする……）

たまりかねた飯富兵部が、とにかく甘利備前に会って善後策を講じようと、玄関まで出たところ、当の甘利がこれまた緊張した面持で、咳込むように、

「聞いたぞ……思わぬことになりおったわ。こんなに早く凱旋するとは思わなんだ……駿河へ迎えの者を差し向けても、もう間に合わぬ。なんとするぞ兵部……」

「いざとなったら、三人揃ってこれだな」

飯富兵部が、腹を切る仕草をすると、甘利も青い顔をして、

「うむ、そういうことになるな」

と答え、口元をきゅっと結んだ。

この二人の青褪めた顔が、ぱっと明るく輝いたのは、その翌晩、戌ノ下刻（午後九時頃）であった。飯富邸の門扉をホトホトと叩く者があり、それが旅ごしらえも厳重な板垣信方と家士・田丸半蔵主従であったのだ。

「おう、よくぞ、よくぞ！」

板垣の手を握りしめた飯富兵部は、直ちに家人を甘利邸へ走らせた。

「間に合うたかい！」

さすがに甘利も吻とした表情をみせ、夜の道を飯富邸に馳せつけた。

途中、なにやらの花の香りが夜気の中に漂っていたと、日頃の甘利備前に似合わぬ、

ひどく文学的な感懐をのべたのは、極度の緊張がとけたせいらしい。

飯富邸からは、久しぶりに明るい談笑が夜更けまで聞かれた。信虎・晴信父子が甲府に凱旋したのは、その翌日、六月四日未ノ刻（午後二時頃）であるから、板垣信方は、まさに滑り込み的に間に合ったことになる。

板垣らは、なに食わぬ顔で、凱旋部隊を出迎え、信虎には戦捷の祝辞をのべた。

運命の時

（これは、何としたことだ!?）

板垣信方は、思わず眉をひそめた。勝戦の凱旋というのに、将兵がひどく疲れた表情をしており、独り大将信虎のみが、妙に活きいきしているのだ。時は夏、風光が明るいだけに、兵団がひときわ暗く沈んで見えるのだ。

板垣や飯富らが、口ぐちに、

「皆々、御苦労であった」

と犒いの言葉をかけても、ほとんど反応はないのだ。

凱旋祝賀の酒宴も、ぱっと浮き立つこともないままに終わった。いつもなら果てもなくつづく宴も、信虎が、

「板垣、皆の者に存分に振舞ってやれ」

と言って奥へ引きとるや、待ちうけていたように散会した。申ノ刻（午後四時頃）をまわったばかり、日はまだ高く明るいのである。

「篝火も焚かぬうちに、凱旋祝賀の宴が果てるとは……！」

飯富兵部が、嘆くように甘利備前の耳もとに囁いた。このような場合、こぼれ落ちる篝火の火影をぬって、広場を埋めるあの小隊、この小隊と、酒甕の柄杓を手にして、犒いまわるのが彼だったのだ。そうすることにより、どれほど兵が戦場での苦難を軽くしたことか。

しかるに、今宵のこの気勢のあがらなさはどうだ。まるで敗戦のようではないか。そもそも農繁期に出兵するなど、領民の苦痛を考慮におかぬ暴君のすることなのだ。

信虎によって、強引に臣属せしめられた武田一族の人々が、領地の農作を案じるならば、兵もまた田畑のことが気になって、心もそぞろといった按配なのである。暴君信虎に対しては、その思いを口に出せないだけに、ただ眼だけをぎらぎらさせ、憤懣を全身に籠らせている風であった。

（いかん、実にいかん……このままいくと、いつ暴発するか分からんぞ）

板垣信方や飯富兵部らの、もっとも怖れるのはそのことである。二人は、もはや一刻の猶予もならぬと思った。

その夜半、彼らが甘利備前を誘って、青い夏の闇にまぎれこむようにして、晴信の館を訪れたと思うと、翌朝未明、騎馬侍が一騎、駿河の庵原忠胤とその食客山本勘助のもとへと奔り去った。

信濃の古族海野氏掃討の勝戦で、信虎は好気嫌であった。ために彼は、おのれの眼に見えざるところで、ある企てが素早い速度で、着実に進行していることに気づかなかった。

信虎は、板垣信方、飯富兵部らが、海野一族撃破の労を犒ってくれ、

「さぞかし、お疲れでございましょう」

「これで、ここ当分は、わが甲斐の国も平穏無事でありまするな」

と言えば、日ごろ気むずかしげ顔で、四角に坐って寡黙な甘利備前が、突然遠くを望む目差しをして、

「こたびの勝戦、駿河の姫も、さぞやお喜びなさいましょうな」

と、独りごとのように呟いた。

「うむ、そう言えば、駿河の姫の顔もしばらく見なんだな」

信虎は、甘利備前の独りごとに誘われたか、頬を綻ばせて言った。

「そうだ、合戦の疲れやすめに、ひとつ駿河に遊んでくるとするか……」

駿河の姫とは、晴信の姉で、先年嫁いだ今川義元夫人である。愛娘の顔を思い出した

独裁者信虎の行動は機敏である。

「娘の顔を見てくる」

と言い、供廻りの者数名をともなっただけの軽装で、甲府の躑躅ヶ崎館をあとにした。

これが六月十四日だから、すなわち凱旋十日後のことであった。

むろん、「娘の顔を」というのは表向きのもので、信虎には信虎なりの計算が胸中に秘められていた。どうやら彼は、晴信の廃嫡、次郎信繁の擁立を考えているらしく、旅立ちにあたり、躑躅ヶ崎館を次郎信繁に留守させるとともに、晴信を甘利備前守虎泰の屋敷に移しているのである。

「よいか備前、晴信を預けておくが、勝手な行動をとらぬよう、決して監視の眼をゆるめるでないぞ」

「かしこまって御座る。仰せのごとく、この備前、シカと晴信様をお預り申しました。御懸念なく、どうぞ駿河への旅を存分にたのしんで参られよ」

甘利備前は、信虎の命令に、そう四角になって答え、厚い胸を叩かんばかりであったが、晴信と二人になった途端、万事何事にも慎重な彼らしく、素早くあたりを窺ってから、

「若……板垣、飯富の両人も、やがてこなたへ参る手筈になっておりまする。それまでどうぞ、ごゆるりとなされませ」

と低声に、囁くように言った。

こうして信虎は、甲府の城下をぬけ、雲の影の駈けゆく、白い街道を駿河へむけてゆっくりと遠ざかっていった。この旅がおのれの運命の明暗を決する分岐点になろうとは、さすがの「甲斐の虎」も、なお気づいてはいない。

信虎を国境の関門まで見送った板垣信方と飯富兵部は、信虎主従の姿が視界から消えた途端、甲駿国境の関門を厳しくとざし、駿河から信虎が帰国できぬよう、手筈のごとく到着した兵をもって厳しく固めた。彼らは守備隊に対し、

「よいか、たとえ大殿なりとも、この関門を断じて通してはならぬ。押して通ろうとなされたなら、討ち取っても苦しゅうない。これは新しき御当主晴信様の御命令と思え」

と下知するや、乗馬に一鞭くれて甲府へ奔り戻った。見事に無血クーデターは成功したのである。

一方、駿河の今川家に辿りついてから、甲駿国境の関門がとざされたと知った信虎は、思わず眼をむいて、

「しまった、謀られたか！」

と呻いた。

謀るつもりが謀られたわけである。おのれの智略と権威に絶大な自信を持っていた信虎だけに、一歩先んじられた口惜しさ、無念さにはひとしおなものがあったが、もはやどうするすべもない。

しかも奇怪なことには、甲駿国境の関門がとじられたと知っても、娘婿の今川義元はさして驚いた様子もなく、

「ま、よろしいではありませぬか……御舅殿も長年にわたって、戦野を馳せめぐりなされたのでありますから、当地に御滞留なされて、ゆっくりと骨休めをなさるがよろしゅう御座いましょう。なあに甲斐国のことなら、気性の優れた晴信殿もおられること、少しの御懸念もいりませぬ」

などと、やけにのんびりと構えているのである。それで、

（もしかすると、今度のことには、この義元も一枚噛んでいるのかも知れない）

信虎は、晴信と義元が連携して、自分を追放したのかと初めて気づき、自分が甲斐に戻れる機会の、完全に断たれたことを覚った。

この信虎の他に、甲駿国境の関門がとざされたと知った瞬間、自分の生命もこれで最期と観念した者がいた。次郎信繁である。

彼は、やがて、兄晴信のさしむけた兵が、自分を逮捕するだろうと覚悟した。確かに、家督相続の件は、信繁が自分の意志でそうはかったわけではない。父信虎が勝手にしたこととはいうものの、結果的には信繁が嫡男の座から兄晴信を蹴落とそうとした形になるのである。

「死を賜わっても仕方がない」

次郎信繁は、そう思った。家督相続を争って敗れた場合、死によって排除されるのは、戦国の世の定法といってよい。が、意外にも、いくら待っても何事も起らなかった。晴信は信繁をまねきよせると、

「父上には、駿河へ御退隠ねがうより、もはや、わが武田家を救う道がなかった」

とだけ言った。

晴信・信繁兄弟が幼少期から味わせられた、家督相続をめぐる深刻な対立関係と思い合わせる時、何事もなく終わったのは、戦国時代における一種の奇蹟といってよいかも知れない。

次郎信繁も、このことは心肝に銘じたとみえて、後年、わが子に与えた「九十九ヶ条」の意見書の冒頭第一条に、「屋形様ニ対シ奉リ、尽未来、逆意アルベカラズ」と記しているほどである。

ともあれ、父信虎の駿河隠退に成功した晴信は、時に弱冠二十一歳。自ら甲斐の守護武田家十九代の当主となった。

この実父追放のクーデターは、当時、日本国中の話題となり、晴信は不孝きわまるものとして非難を浴びたが、信虎が駿河へ追放されたと知った甲斐国では、

「人民コトゴトク快楽ノ咲ヲ含ム」

あるいは、

「地下侍、出家男女トモ喜ビ満足イタシ候コト無限」

などと記録されたほど、上下こぞって安堵の胸を撫でおろしたといわれる。

しかし、晴信が戦国武将として行動を起すまでには、さらに一年の歳月を待たねばならない。彼は、クーデター後の武田一族ならびに諸部将、人民の動向を見定めるまで、じっと躑躅ヶ崎館に腰をすえ、民政の安定に力を注がねばならなかったのだ。

「とにかく、足もとを固めることこそ肝要であります」

と板垣信方が言うと、何事にも慎重堅実な飯富兵部は、

「若……いやこれは失礼つかまつった。殿で御座ったわい。殿のこれからは先がお長い」

と、わざわざ両手を大きくひろげて長さを示しながら、

「よろしいか、このように先がお長いのである。なにも焦りなさることはない。今も板垣殿が申されたように、先ずは足場を固め、他のことは万事、それから、それからで御座る」

と、まるで逸る駿馬を制御するような物言いをした。

すると、飯富兵部に倍して慎重であり、頑固一徹の甘利備前も、一語、一語、言葉を選ぶような口調で、

「若く、新しい甲斐の守護殿には、それに見合った武田家を創造して戴きたいものです」

と言った。一言居士らしく、言葉には苦味が含んでいるのである。

「わかった」

晴信が苦笑した時、板垣信方が、

「甘利殿の望まるる武田家創造には、駿河にいる山本勘助のような人物が必要かも知れませんな」

と、とどめを刺すように言った。

旅立ち

天文十二年三月——ついに、勘助は駿府に決別し、甲斐の国へと旅立った。かの田丸半蔵の持参した板垣信方の書状には、禄高百貫にて召し抱える旨が記されてあり、相応の支度金も贈られて来たのである。

（板垣駿河にしては、少々手間どったようであるな。が、百貫は悪くない）

勘助は、裏木九十郎を斃し、武田信虎隠退のきっかけを作った代償は必ず来る、とひそかに心待ちしていたのだ。

報告をうけた庵原忠胤は、

「ほう、武田はそなたに百貫を出しおったか、ふうむ、百貫にて召し抱えるとな……それにしても、とうとうそなたの期待には添えず終いとなってしもうたな。わが力のおよばなんだこと、心より詫びるしかない。しかし、京好みの寿桂院様が在られる限り、そなたの仕官のことは、かなえられぬと思わねばならぬ。ここは思い切って武田家へ仕えた方が、そなたの力を存分に発揮できるやも知れぬ」

と言い、乗馬一頭と、日頃シワイ老人にしては珍しく、多額の贐を奮発してくれた。

供するは丈太郎と、堺の傭兵くずれの喜多嶋小源太。それに板垣の使者となって訪れた田丸半蔵の三人であった。

小源太は、居酒屋住吉屋へ呼び出され、甲斐への同行をもとめられた瞬間、ぱっと顔を輝かせて、

「山本様のお供なら、地獄へなりと参りますぞ！」

と叫ぶように言った。川人足の窮地から脱出できるのが余程嬉しかったに違いない。

時は、弥生三月、甲斐国での人生がどのように展開発展するかは分からないが、さすがに馬上の勘助も、表情こそいつもと変わらないが、時折り思い出したように、丈太郎や小源太をたしなめる声もやわらかなのであった。

なにしろ、駿河国から初めて他国へ旅する丈太郎などは、軽く口笛などを吹いて、放

っておくと馬より先に行ってしまいそうだし、小源太にいたっては、みじめな川人足姿から双刀帯びた旅姿の若侍に戻りえた喜びに、

「ソレ天地ハ万物ノ逆旅ニシテ、月日ハ百代ノ過客、而シテ浮世ハ夢ノゴトシ。イワンヤ陽春ワレヲ召スルニ煙景ヲ以テシ……」

などと口誦み、足どりも軽いのである。

「小源太さんは、なかなか学者なんだね」

「なぁに、堺の町にはしょっちゅう納屋衆の催す茶会があってね、天王寺屋の内所にいた頃の耳学問よ」

「これでは、小源太さんが臙脂屋の娘さんに好かれるのも無理はない」

「冷やかしちゃいけないよ、丈太さん」

「どうやら、甲斐の国も賑やかになるようですな」

生真面目な田丸半蔵の言葉に、明るい笑いが山峡の街道に流れるのを勘助は心地よく聞いていた。むろん頭脳の奥の一点では、武田家における作戦を緻密に組立てていた。

勘助ら主従は、甲府での第一夜を柳小路の豪商塩屋宗右衛門宅に泊った。これは庵原忠胤の紹介によるもので、宗右衛門は、

「庵原阿波守様には、駿府へまかり出ました際、なにかとお世話になっております。もっとも囲碁に関しては、いささか手前のほうがお世話を致しますがね。ははは……とにかく、御遠慮なくお過ごし下されませ」

と寛闊であった。

翌日、勘助は、武田の城である躑躅ヶ崎館の大広間で、当主の晴信にお目見えした。上殿の間に晴信が、左右に板垣駿河守信方、飯富兵部少輔虎昌、甘利備前守ら重臣宿将らが居流れていた。

それらの眼が、勘助の異様な一身に注がれている。突然、晴信が若々しい声で、

「そこでは遠い。もそっと前へ寄れい」

と言った。

「膝を進めよ」

抑えた声で板垣がうながした。

「は」

勘助は、少し前へ膝を進めた。その際、足が不自由なため、上体が前へのめりそうになった。が、彼は悪びれず、口をへの字に引き結んだ顔を上げて、

「山本勘助にございます」

「ふむ」

晴信は、数条の刀痕を刻んだ、浅黒い鞣し革のような勘助の異相を凝と見守ったが、

「なるほど、その面貌では、百貫では不足であろう。よいわい、二百貫を加えてつかわ

そう」

思いがけない晴信の言葉が、平伏した勘助の耳に届いた。

一瞬、勘助も聞き違いかと疑ったが、重臣宿将らの間からも、「あ」という声なき驚きのどよめきがあった。板垣信方は、いかにもさもあらんといったように、二度三度と頷いていたが、その板垣から勘助の陰の働きを聞き知っている筈の飯富、甘利の二人ですら、三百貫という破格の俸禄は、よほど意外だったらしく、驚きの色をあらわにしたものである。新当流の遣い手、裏木九十郎を討ち果たした漢と、目の前に見る山本勘助の異相小柄な姿が一致しないのだ。

お目見えを済ませ、武田の居館から退出した勘助が、塩屋宗右衛門と碁盤を囲んでいると、板垣信方が田丸半蔵を供にして立ち寄って、

「山本氏、本日は御苦労であった。それにしても、百貫の筈の俸禄が、一躍、三百貫にはね上るとは、お屋形様も若いだけに思い切ったことをなさるものだ。家中がその噂でもちきりじゃ。ともあれ、まことに目出度い話ではあるが、人の妬心もあるものと胸に留めおかれるがよろしかろう」

「お気遣い、忝い」

礼をのべる勘助に、塩屋宗右衛門は、

「山本様もお人が悪い。左様なお目出度い話があられたというに、一言も仰しゃられないとは。危うく、この宗右衛門、駿府の庵原阿波守様から、気のきかぬ奴だとお叱りをうけるところで御座いました。さっそく祝宴の用意をさせましょう」

と声を弾ませて言った。

やがて——酒肴の膳がはこばれて、思わざる春宵の祝宴となった。丈太郎、小源太、半蔵らにも席が作られたのは、いかにも寛闊な気性の宗右衛門らしいはからいである。

「若い方がたも、遠慮のう召し上れ」

「頂戴しておりまする」

答えた小源太は、今宵も酒宴の興を盛り上げた。酔いのまわった彼は、例のように年に似合わぬ渋い喉を聞かせたのである。舟歌であった。

棹の歌、歌ふ浮世の一節を

歌ふ浮世の一節を

夕波千鳥声添へて

友呼びかはす海人乙女

恨みぞまさる室君の

行く舟や慕ふらん……

と、驚いたことに、主の宗右衛門が突然、小源太の歌を遮るように、

「おお、室津の舟歌ですな」

と言い、遠くを見る眼をしてつづけた。

「懐かしい……佳き歌をうたうて下された……あの頃は、わたしも若うございました……」

室津（兵庫県揖保郡御津町）は、遊行僧行基によって開かれた、いわゆる「摂播の五泊」――樫生泊・韓泊・魚住泊・大輪田泊・河尻の五港の一つで、行基開港の伝説はともかくとして、『播磨風土記』にもその名が記されている、奈良時代から瀬戸内の良港として知られていた古い港である。

右の「樫生泊」が室津であり、小源太の歌った棹の歌は、室津の有名な舟遊女「室君」たちの舟歌なのであった。

豪商・塩屋宗右衛門も、恐らく若き日に同港を訪れ、忘れがたい思い出をその胸に刻んだものに違いない。

憂きも一時、嬉しさも
思ひ覚ませば夢候よ

と小膝を叩いて口誦み、勘助らのいることすら忘れたようなのであった。

こうして、海近い駿府とは異なる、山国甲府の春の夜は更けていき、陶然たる宗右衛門の、いかにも心地よげな顔を、勘助は微笑をたたえて見守りながらも、破格な三百貫の高禄に、驚きの色を露骨に示した宿老諸将の顔を脳裏に思い浮かべていた。板垣信方以外の武田家の重臣諸将のすべてが、山本勘助という新参者に、一種のうさん臭さを抱いていることは確かなのである。

ところが間もなく、そんな重臣諸将らに、勘助がその異能の片鱗をのぞかせるような事件が突発した。

葉桜の季節が過ぎ、微に夏の気配をたたえた爽やかな風が甲府盆地を吹きわたるようになった一日、武田晴信は昨年来の信濃諏訪領侵攻作戦に出動した部将の労を犒う酒宴を催したが、当日、たまたま所用をもって伺候した勘助にも、

「他に急用がなくば、そなたも一座せよ」

と命じた。

例のごとく、板垣信方および飯富兵部、甘利備前らの重臣諸将が居流れる末座に、勘助もひっそりと控えた。

「やがて信濃も、わが物ぞ」

若い晴信は、酒杯を傾けながらも、すでに想いは、信濃の空に翔んでいるようだ。

変事が激発したのは、その晴信が、

「駿河、杯をとらす」

と腕をさしのべ、板垣信方が酒杯をおし戴き、顔を伏せた瞬間であった。

それまで沓脱石上の履物を揃い直したり砂塵の舞わぬよう打水したり、小まめに立ち

働いていた小者が、突如、手桶の柄杓を投じて、廊下に躍り上がったと思うと、

「晴信、死ねい！」

と叫んだ。

その手元から、キラリと空を切って冷光が飛んだ。

「あっ」

板垣、飯富、甘利らの口から、異口同音に短い叫びが発せられた。

一座の誰もが、脳裏に思いえがいたのは、無残な晴信の姿であった。が、次の瞬間、人々は信じられぬ光景を目にした。宙に投じられた酒杯が手裏剣を弾き落した時には、首を刎ねられた下郎が、どうと庭先へ転落したのである。即死であった。

神技ともいうべき、山本勘助の速業であった。彼は、口元へ運んでいた酒杯を手裏剣めがけて飛ばすと同時に、まるで宙を滑るように身を躍らせて曲者を斬ったのだ。犯人は昨年、晴信によって謀殺された、諏訪刑部大輔頼重恩顧の者であった。

「ふうむ」

さすがに晴信も、よほどびっくりしたものであろう、二呼吸ほどしてから、

「勘助、見事であるぞ」

と言った声がかすれていたといわれる。

とにかく、勘助が晴信の一命を救ったことは、紛れもない事実である。板垣ら重臣諸将らも、これを目のあたりにしているのだ。これまで板垣がいくら申し聞かせても、勘助の異能を眉唾ほどに思っていた飯富兵部や甘利備前も、なにか幻術でも見たような面持で、

「山本勘助、そなたが、あれを……」

「成程、なるほど……」

などと、意味不明な言葉を、繰り返し、呟いていたのは笑止なことであった。が、彼らの勘助を見る目付きが、これまでとは微妙に異なっていた。

突発した変事のため、酒宴は早目に切り上げられた。御前を退出した勘助が、城門を出て濠に架けられた橋を渡る時も、日はまだ明るく、橋の下を爽やかな初夏の夕風が吹き過ぎていた。

（久しぶりに、塩屋宗右衛門を訪ねてみるか……案外、駿府の庵原阿波の消息が聞けるやも知れぬ）

珍しく勘助が、庵原阿波守忠胤の老人斑の浮いた面影を懐かしんだ時、背後から若々しい張りのある声で、

「山本氏、お待ち下され」

と呼び止めた者がいる。

急いで跡を追ってきたらしく、息を弾ませた相手は、先程、晴信の側近くに寄って、

何やら低音に話し込んでいた、浄古寺城を預かる大村右京亮という青年部将であった。

「なんぞ御用か？」

訝る勘助に、右京亮は、好奇と畏敬の思いをこめた物言いで、

「明後日、わが浄古寺城を訪れて戴きたい。突然の申し条で、さぞかし御不審でしょうが、委細はその折りに……なお、念のために申し添えますが、これはお屋形様の御意向です」

と用件のみ言うと、くるりと踵を返した。

林の章

忍び屋敷

二日後、勘助は約束に従って、浄古寺城主大村右京亮を訪ねた。供は例のごとく丈太郎と小源太である。

「丈太郎、そろそろ乗馬の稽古をしておくがよい」

「はい、お師匠様」

「小源太、そなたは乗れるな」

「はい、少しは……」

「やがて、いやでも乗らなければならぬ時がきっとくる。近く馬を与えるゆえ、おこたらず馬に呢んでおくがよい」

道中、主従が交わしたのは、右の数語のみである。馬上の勘助は、供の歩調に合わせて手綱を緩急にさばき、白く乾いた街道にも砂塵は舞わないのであった。

「お師匠様、よい季節になりましたなぁ」

馬の後をとっとと追いながら、丈太郎は嘆声を上げ、いかにも心地よげに口笛すら吹きそうであり、路傍の雑木林の小鳥の囀りすら聞こえるほど長閑なのであった。

大村右京亮の守る浄古寺城は、躑躅ヶ崎館から笛吹川の右岸をさかのぼり、武蔵国に通じる秩父往還と、躑躅ヶ崎の館を見下す要害山城から、太良峠をこえて、鼓川に沿って下る秩父往還の脇道が交差する要衝にある。

往昔、甲斐源氏の武田義定の居館が置かれたと伝えるが、まことに良き地に築城したものといえる。琴川、笛吹川、鼓川という三河川の合流点近い、琴川上流の河岸段丘上に築かれた浄古寺城からは、一望の下にこの地を往来する人影や荷の動きを監視することが可能なのであった。

だから、関東につながる秩父往還の、雁坂峠口の警固という重任をおびる右京亮は、たとえ武田家が信濃侵攻の大動員令を発した際でも、浄古寺城を離れずともよいのだ。

「ほほう、なかなかのものだ……」

勘助は、大手門の前で足をとめると、番士たちが不審に思うほど、しばらくじろじろと城を眺めていた。実は、自分の眼で見るまでは、砦に毛が生えたほどの規模かと思っていたが、さすがは国境守備のためのものとあって、空濠をめぐらし、本丸、二の丸、三の丸を有する本格的な城構えなのであった。

番士に案内された勘助主従を、待ちかねていたように出迎えた大村右京亮は、奥の居館の書院に自ら案内し、「先日は、晴信公の特命であり、重臣方にも秘されていることゆえ、はっきりと用向きを明かすわけにも参らなんだった」と前置きした上で、

「実は、かねてより晴信公より拙者に、諸国使番衆とは別に、女だけの使番衆のようなもの……有り体にいうならば、女の忍びの者を養成するよう申しつかっていたが、まったく様子が分からず困惑していた。ところが、先日、貴公の美事なる手練の業を見て、はっと頭にひらめいたのは、わが望んでいた適任の人物が眼前にあらわれた、ということであった。面白いのは、同じことを晴信公が感じられたことで、例の件は勘助に相談せよと申しつかったのだ。突然の話であり、迷惑やも知れぬが、万事よろしく頼む」

「ほう、晴信公が女の忍びの者の養成、などということを考えておられましたか……」

勘助は、若い晴信が、心中ひそかに特殊な練磨をへた女たちの養成を考えていたことに、いささかの驚きと期待を抱かされた。

（もしかすると、武田晴信という若者は、とてつもなくしたたかで、この戦国乱世を大股に歩きぬく強靱な武将に成長するかも知れんぞ）

胸の高鳴りを覚えた勘助は、案じ顔の大村右京亮に対し、はっきりと、

「お引受け致しましょう」

と答えると同時に、直ちにその場で、あらゆる訓練が可能なだけの広場や、武器倉、女たちの集団生活に不自由をきたさぬだけの住居や調理所を備えた、ほとんど浄古寺城

の詰めの砦と称してよいほどの堅固な屋敷の見取図が作成された。勘助の筆先は、例えば、土足のまま多勢で食事が摂れるよう、土間に腰掛けを持つ長い飯台を備えること、あるいは一室三人以上の雑居は不可。争論起きやすきため、などと注記して微細にわたっているのである。

「成程、なるほど」

右京亮は、しきりに感心し、

「晴信公も、金子を惜しむなと仰せられた。遠慮なく遺漏なき立派な訓練所を造って欲しい」

「心得ており申す。さて、次は肝心の女子衆ですが……」

勘助は、ちょっと考える目差しをしたが、ふっと廊下に控えている丈太郎と小源太を振り返ると、

「小源太」

「はい」

「そなたは、堺の天王寺屋の内所に採られたほどの男だ。人を見る眼は並みの者より確かな筈。縁類無く、しかも厳しい訓練に耐えうる体を持った、若い女……いや、娘たちを狩り集める仕事はそなたに任せよう。大村殿の御指示を仰ぎながら、明日からでも行動を起すがよい」

「かしこまりました」

さすがに小源太は呑みこみが早く、神妙に答えて、もう胸中に方策を探ぐる面持なのであった。

それから右京亮とともに城門を出た勘助は、あたりの地形を丹念に見て廻り、やがて城から一町（約一〇九メートル）ほど奥に入った、雑木林を背にした平地を訓練所にと選定した。新緑の雑木林には山鳩がるると喉を鳴らしており、忍びの者の訓練所などという小暗さとは、まったく対照的なまでに平和なのである。

勘助は、翌朝、小源太を右京亮の手元に置き、丈太郎を供に甲府へ戻ったが、躑躅ヶ崎館に出仕すると、直ちに晴信に呼び出された。

「勘助、右京亮と会うてきたか？」

「はい、打ち合わせを済ませて参りました」

「頼むぞ。あの件に関する総取締はそなたじゃ。将来、必ずや、わが武田家のためになる筈、良きものに仕上げてくれい」

晴信は、そこまで言った時、板垣信方と飯富兵部、甘利備前らが揃って伺候するや、さっと話題を変えて、

「勘助、信濃の高遠頼継めが、性懲もなくまたまた蠢きはじめたようだ。まるで喉に突き刺さった小骨のように気になってならぬが、なんぞ良き方策はないものか？」

瞬間、甘利備前の片頬がピクリと動いたのは、重臣たる自分らをさし置いて、晴信が新参者の勘助に意見をもとめたからだ。が、先日、勘助の秘技によって一命が救われて以来、晴信が勘助に親近感を抱いたことが歴然と見てとれるため、表立って異議をさしはさむことは出来ない。

晴信も、そうした彼らの心情に気づかぬではないが、あえて素知らぬ風をし、勘助もまた、素知らぬ顔で、

「お気になるなら、骨を取り除くしかありませぬ。高遠城に頼継が在るかぎり、彼らが蠢動を止めることはありますまいから……」

「勘助もそう思うか……うむ、小骨を抜き取らぬかぎり、わが不快な思いは絶えることがないな」

「御意」

答えながら勘助は、すでに晴信が高遠城攻略を決意しており、それを自分以外の者の口から提言させたかったのだと読んだ。

（いよいよ面白い。弱冠二十三歳の若者にしては、どうしてなかなかのものだ。これではそう遠くない日、板垣、飯富、甘利らなどが束になっても、手に負えなくなるに違いない）

勘助は、覇気をみなぎらした、晴信の若々しい顔と重臣らの頑固一徹といった相貌を

見くらべながら、心中ひそかに呟いていた。

（ひょっとすると、この武田晴信という若者は、戦国乱世の真っ只中を、物怖じすることなく、大手をふって歩みつづける、逞しい武将に成長するかも知れない）

勘助の想いは、大きくふくらむ。

大体、甲斐の暴発寸前の国情、武田家の絶望的な内紛の実情など、晴信の言い分はあるとしても、その実父信虎の駿河追放劇は、何事が起きても不思議でない戦国にあっても、特異な事件として日本中の話題を賑わせたものである。越後の上杉謙信などは、親不孝の最たるものだと厳しく指弾したほどだが、そんな批難を無視するように、武田家当主となった晴信は、直線的に信濃諏訪領への侵攻を開始した。

晴信の実父追放劇には、陰で一役買った勘助が駿府でそれと聞いた瞬間、

「晴信という若者、ただ者にあらず」

と思ったものである。板垣信方から、武田家と諏訪氏の浅からぬ関係を聞き知っていたからだ。

武田氏は信虎以来、執拗に北方への侵攻をはかったが、そのたびに信濃の名族諏訪氏に反撃されて、手ひどい痛手をこうむった。

もともと、諏訪地方は、古代より諏訪神社の神領であり、累代、同社の大祝（最高祠官）たる名族諏訪氏の支配下に繁栄してきた土地であり、諏訪氏と領民は、おなじ神の

斎という一体感が強く、結束は異様なほどに強固なのであった。

しかも、この諏訪氏を、単なる神官と思うと間違う。

諏訪神社は、諏訪湖をはさんで上社と下社があるが、上社は本宮と前宮に、下社は春宮と秋宮に分かれており、この四社を合わせて諏訪大社となる特異な形式をもっている。建御名方命を祖神とする上社にも大祝家と総領家の別があって、それぞれ武力と居城を有して勢威をふるっていたのだ。特に総領家の諏訪碧雲斎頼満などは、「甲斐の虎」と怖れられた信虎ですら、

「碧雲斎ある限り、諏訪侵略は不可能」

と歎かしめたほどの猛将なのであった。

事実、信虎は、突如、国境を越えて諏訪領へ侵攻したところ、これを迎え撃ったのが碧雲斎頼満と、その孫の形部大輔頼重なる若武者だった。

両軍は国境近くで二度会戦、朝の合戦では武田軍が優勢であったが、夕べの合戦では、諏訪軍が果敢な反撃に転じ、こんどは武田軍が部将萩原備中を失い、雑兵二百余を討ち取られる大敗を喫し、慌ただしく甲斐へ引揚げたものだった。

武田軍を撃退した諏訪氏に、重ねて華やいだ慶祝事があった。刑部大輔頼重に息女が誕生したのだ。姫御料誕生の噂に、諏訪地方一円が湧きたった。

諏訪家はもとより、館内の上下から祝福され、「鶴丸」の家紋縫いとりのある産衣に

包まれて、華やかにこの世に誕生した幼女は、静澄な諏訪湖ほとりの上原城内に、その数奇なる人生の第一歩を踏み出したのである。

この幼女、どんな名前がつけられたかは、いかなる史書にも明記されていない。ただ簡略に「諏訪頼重の女」「母は小見氏」と見えるだけだが、ここでは「諏訪姫」と呼ぶことにしたい。のちの諏訪御料人であり、「御料人」とは貴人の息女をいう。

とにかく、碧雲斎と孫の頼重は、時に国境を南に越えて甲斐領へと突入、ふところ深く、甲府近くまで侵攻し、信虎の心胆を寒からしめているのだ。さすがの信虎も音を上げ、ついに碧雲斎に和議を申し入れた。

しかし信虎は、碧雲斎が没するや、たちまち策をめぐらし、一番目の使者に、まずねんごろに弔意をのべさせたあと、二番目の使者を送って、

「信虎の女禰々を、刑部大輔殿の正室にお迎えいただき、諏訪・武田両家同盟の実を、いちだんと固くしたい」

と申し入れた。頼重の夫人は、先年亡くなっていたのだ。

頼重としては、祖父碧雲斎亡き今、いつ、信虎が同盟を破棄し、国境を突破して来るかわからぬと案じていた時だから、内心ほっとして承諾した。

花嫁の禰々は、時に十三歳。

彼女を乗せた輿は、国境の山尾根が白々と新雪をかぶった日、甲斐国からやって来た。

幾十頭もの騎馬侍や荷駄の行列が黒い帯のようにつづき、風花の舞う上原城下と諏訪の湖も、にわかに明るく感ぜられたほどだった。

その挨拶のため、諏訪頼重が国境を南に越えて甲府へ赴くと、舅の信虎は、武田家をあげて歓待し、禰々の化粧料として十八ヶ村を贈って、頼重を感激させた。

すると、こんどは信虎みずから、上原城に頼重を訪れたが、その際さりげなく、

「久しぶりに娘の顔を見たら、禰々のいない甲府に帰るのが辛くなった。禰々と同じ年ごろの、そこもとの姫御料をあずからしては下さらぬか」

と切り出した。

「さも御座りましょうとも」

頼重は、快く承諾した。

かくて諏訪姫を加えた信虎一行は、夜来の新雪が晴れあがり、朝の光に乱反射する街道を南へ向けてゆっくりと遠去かった。

以後、頼重は武田信虎・晴信父子と協同歩調をとり、信濃の強豪海野一族を掃討するなど、大いに武田家のために活躍した。この凱旋直後に起きたのが、駿河への信虎追放なのである。

非情の謀殺

晴信が実父追放のクーデターをやってのけた時、裏で一役買った山本勘助が、

「この若者、ただ者にあらず」

と看破したように、諏訪頼重もまた気づくべきであったのだ。武田晴信という若者は、祖父育ちの自分などとは、まったく異質の武将であることに。

ところが頼重は、信虎の追放により、「甲斐の虎」の重石がとれ、今後は若い晴信と協力して信濃経営に当たれるといったほどに思っていたのだ。

思えば、諏訪頼重は、苛烈な戦国乱世を生きる武将として、致命的な欠陥を持っていたと言わざるを得ない。少年期に父を失い、祖父碧雲斎の深い愛情の下に成人したため、戦野を疾駆して、ひるむことを知らぬ果敢な若武者ではあったが、あまりにも単純、純情に過ぎたのだ。彼は、自分と禰々との婚姻など、信虎・晴信父子にとって、単なる政略以外のなにものでもないことに気づかなかったのだ。

そんな頼重の甘さを嘲笑するように、クーデターで武田家当主となった晴信は、待ち構えていたように信濃侵攻を開始する。

天文十一年（一五四二）六月二十四日、白銀色の巨大な積乱雲が湧きあがっていた日、

晴信の率いる武田軍が、突如、国境を越えて諏訪領に乱入した。

「そんな馬鹿な……」

諏訪頼重は、物見の兵から武田軍来襲の報告をうけた時、なかなか信じようとしなかったという。

「わが妻禰々は、晴信殿の実の妹である。妹の嫁ぎ先を兄が侵す筈がない」

これが頼重の論理だが、現実に上原城の望楼から武田菱の戦旗が望まれるとあって、ようやく頼重も事の重大さに気づいて将兵を召集した。しかし、集まる将三百五十騎、雑兵七、八百に過ぎぬという哀しさであった。これではとても武田の大軍団に対抗できる筈がない。さればと城と城下に火を放ち、一里ほど北へ離れた詰め城の桑原城へと走った。が、途中で兵のほとんどが逃げ去り、籠城者は弟の頼高以下二十余名に過ぎなかった。

この時も、さらに晴信は、勘助のいう「若いのに似合わぬ」謀略を用いている。

「われらの仲を裂いたのは、諏訪総領家の乗っ取りをたくらむ高遠頼継だから、われら和睦の上、一致協力して高遠を討とうではないか」

「なるほど」

頼重は、晴信の和睦の申し入れに乗った。

高遠頼継の父親継満は、かつては大祝をつとめた諏訪一族だが、総領家の当主以下二十余名を謀殺し、高遠（長野県高遠町）へ逃れた者であり、そのとき危うく謀殺をまぬがれたのが頼重の祖父碧雲斎なのである。

確かに、晴信の言うように、碧雲斎の死後を狙って、ふたたび頼継が総領家の乗っ取りをたくらむことは十分に考えられることなのだ、と頼重にも思えたのである。

しかし、開城した頼重、頼高兄弟の前に、晴信は姿をあらわすことなく、兄弟は甲斐に送られ、甲府の東光寺に幽門された。これはまったく降伏者扱いであり、いかに望んでも晴信との会見はゆるされず、七月二十日、酒と肴を所望した頼重の前に差し出されたのは、一振りの短刀であった。

「おのれ、晴信め、謀りおったな」

頼重は、今更ながら、おのれの不明を後悔したが、

「われらほどのさむらいに腹を斬らせられ候事は、武田の家にはじめたるべき候」

と言い放ちざま、腹を十文字に裂き斬り、三刀目で右乳下を突き立て、天目茶碗ほどの肉をえぐり落として、うしろへのけぞるという凄絶きわまる最期をとげた。行年二十七歳。

おのずから枯れ果てにけり草の葉の
主あらばこそまたも結ばめ

というのが頼重の辞世であった。

なお、彼は介錯人に、

「わが亡骸は、諏訪の湖に沈めて欲しい」

と遺言したといわれるが、この一語に、死しても武田領に留まりたくないという、晴信への痛烈な憤りが籠められているといってよい。ここに神代以来の名門諏訪家も、あえなく滅亡したわけだが、頼重の遺子で甲府に人質になっていた諏訪姫が、たぐいまれなる美貌の持ち主であったことから、やがて事態は意外な方へと発展することとなる。が、それは後日のこと。

晴信が勘助に、

「高遠頼継」

の名を口にしたのには、理由がある。

実は、上原城に諏訪頼重を攻撃した際、晴信は総領家乗っ取りをたくらむ頼継と連携しており、戦勝後は諏訪領を宮川を境にして東西に分轄したのだ。しかし飽くまで諏訪大祝たらんとする頼継は、宮川を東に越えて武田側に侵攻した。

「おのれ頼継め！」

激怒した晴信が、大軍を催して反撃したため、頼継は諏訪から高遠へと遁走したものの、彼が高遠城に拠っている限り、いつまた牙を剝いてくるか分からぬ不安があるのだ。まさに喉に突き刺さった魚の小骨のようなものといってよい。

「さて、勘助。その小骨を、いつ取り除くかだが、そなたの考えを聞きたい」

「恐らく高遠では、武田軍が来攻するものと身構えておりましょうから、今、仕掛ければ当方にも多数の痛手をこうむることになりまする。ここは高遠方の気のゆるむまで、出兵をひかえるのが賢明というものでありましょう」

「うむ、やはりそうか……」

晴信が頷くと、飯富と甘利がほっと安堵の吐息をつく。二人は若い晴信が、父親信虎と同様、連年のように出兵する道を歩み出すのを危惧したのだ。その点、この場合における勘助の晴信への返答と助言は、功罪半ばするといってよい。一は高遠頼継の排除を進言しており、二には、今はその時機にあらずと出兵を制止しているのだから。

（新参者の癖に、とかくいらざる差し出口を挟みおるが、時には良きことを言うものだ）

というのが、飯富兵部や甘利備前ら老臣らに共通した感慨であった。

この頃である。久しぶりに塩屋宗右衛門の夕宴に招じられた勘助が、酒杯を傾けながら駿府の庵原忠胤の消息などを聞き、また一盤、囲碁に興じた後、塩屋邸を辞した時には、戌ノ下刻（午後九時頃）ほどになっていた。

「山本様は、庵原様よりはいささかマシのようですが、まだまだ私めにはおよびませぬな。ま、次回までに腕を磨いて来て戴きましょうか」

「その憎まれ口も、今宵かぎりよ」

勘助は宗右衛門の揶揄にこたえ、苦笑しながら通りに出た。背後から丈太郎がポツリと、

「お師匠様、負けてばかりの囲碁でも、嬉しいものですか……どうも私などには不思議に思えてなりませぬ」

「うむ、打ち負ければ口惜しいが、次なる一盤には勝ってみせるという、思いが湧いてくるのが愉しいのだ。もっとも、わしの場合は、ここのところ負けっ放しだがな」

勘助は、酒の酔いもあって、珍しく声を立てて笑った。

駿府とは異る、山国の夜気が酒気にほてる肌に心地よく、中天に瞬く星屑も青味をおびて眺められるのであった。——と、武家屋敷町にかかる町角に差しかかった時、ふいに、勘助が鋭く、

「丈太郎、わしから離れていよ」

と言った時には、

「死ねい！」

短い言葉とともに、小暗い闇の中に白刃の切っ尖がきらめき、凄い勢いで勘助の顔面を襲った。危うく跳び退いた勘助が、

「何者?!」

と誰何する暇もなく、二撃、三撃と肉迫して来る。しかも横合いからも、無言でダッと斬りかかってきた。

瞬時、勘助の脳裏を、飯富兵部と甘利備前の貌が掠め、

（出る杭は打たれる）

の一語が点滅した。が、身をかわしざま抜刀し、反撃の体勢をととのえた時、三番目に斬りかかったのが、

「師の敵！」

と叫んだ。

「裏木九十郎の門弟か？」

勘助は、

「おぬしらの腕では、この山本勘助は斬れぬ」

言い捨てざまに、一人の白刃を刎ね上げた。どういう仕掛けによるのか、白刃は巻き取られたように宙に飛び、角屋敷の破目板に突き立った。

「あ」

と驚きの声を放った時には、すでに二人目の白刃が腕を離れ、地面に金属的な音を響かせた。

「師の敵を討たんとするは殊勝ゆえ、命は助けてつかわす。刀を拾うて立ち去れい」

勘助の声に、曲者たちはこそこそと闇の中へ逃げ込んだ。
「お師匠様、八つ数えるうちに、カタが付きましたね」
「数えていたのか丈太郎」
「はい、指を折って」
「ふむ」
数歩あるいてから、ふと思い出したように勘助が言った。
「塩屋から贈られた酒壺、零(こぼ)しておるまいな」
「はい、一滴も！」
「それは重畳(ちょうじょう)」
勘助は、星空を仰いで独りごちた。
「明日は、よく晴れそうだ」
晴信が高遠頼継にとどめの一太刀をくれたのは、天文十四年四月になってからだ。十四日、かつての諏訪氏の居城上原城に着陣した武田軍は、十五日高遠城に進撃、二日後の十七日には城主頼継の自刃により落城した。
高遠頼継討滅から凱旋して間もなく、思いもよらぬ事件が発生した。突然、晴信が、
「諏訪姫を側室に迎えたい」
と言い出したのだ。

「何を申される?!」
「殿、お気は確かか?」
「姫は、諏訪刑部殿のお子ぞ」
板垣信方、飯富兵部、甘利備前らの重臣たちは、ほとんど仰天したと称すべきほどに驚愕(きょうがく)した。
「騒ぐな、わしは正気ぞ」
晴信は、重臣の驚きようの大きさに、さすがに困惑の色は隠せない。が、
「わしとて、姫が諏訪頼重の忘れ形見なることは、よく存知ている……しかし、どうしても彼女が欲しいのだ。どうしても……」
と苦しげに心情を告白した。
晴信が諏訪姫を初めて見たのは、彼女が人質として父信虎に伴われて来た際だ。眸(ひとみ)の美しい、色白な可愛い子と思ったが、それからは出陣つづきで、いつしか忘れるともなく忘れ去り、しかも謀略的に頼重を自殺せしめてからは、何となくうしろめたく、あえて顔を合わせたくもなく過ごして来た。
ところが、凱旋後、ふと垣間(かいま)見た美貌の娘が、成長した諏訪姫と知った時から、晴信は一瞬たりとも、彼女の面影が念頭から消えることなく、思いが苦しいまでに募った揚げ句、ついに彼女を側室にと切り出したのだ。

「何たることを！」

と、板垣らが額を叩いて嘆じたのも無理はない。おのれが自殺せしめた諏訪頼重の遺した姫を、側室に望む異常な心理もさることながら、父が殺されたと知ったあとも、なお生きながらえている彼女の心中には、いかなる危険な企てが宿されているか分からないのに、あえて晴信はその危険を冒そうとするのだから。

それにしても、このようにも晴信の心気を惑乱させた諏訪姫とは、果たしてどのような女人であるか。その美容のほどを示す傍証がある。『甲陽軍鑑』品第二十四に、

「諏訪家断絶、但し頼茂（重）息女、其年十四歳になり給う。尋常かくれなき美人にてまします。これを晴信公妾にとある儀也」

とあるのだ。「尋常かくれなき美人」すなわち、彼女は晴信の心をとらえて放さぬほどの、たぐいまれなる美貌の持ち主だったのである。

しかし、

「ほかの儀ならばともかく」

「危険と知りながら、御同意は出来ませぬ」

板垣が真四角に座って難色を示せば、飯富や甘利らも、口をへの字に引き結んで、天井を睨み、反対の意志表示をするなど、とても晴信の要望が通るとは思えなかった。

ところが、その時、末座からずいと膝を進めて、

「恐れながら、ひとこと私見をのべさせて戴きます。諏訪姫側室のこと、これ、もしわが殿に御威勢なき時なら、確かに危険きわまりなき冒険と申さねばなりませぬ。断じてなしてはならぬことであります。しかし、今や殿のお名は天下に聞こえ、やがて文武両道の名将となられるであろうことは、誰疑うものとてありますまい。されば、諏訪家の親類、旧臣どもが蠢動し、わが武田家の滅亡をはかろうなどと考える筈がありませぬ。それどころか、姫にお子が宿れば、諏訪家は御当家譜代の方々とおなじく、喜んで忠勤を励むようになるのではないでしょうか」

弁説爽やかにのべ立てたのは、他ならぬ山本勘助であった。

（新参者が、余計なことを！）

一瞬、板垣ら重臣の表情に、微妙な反発の色が掠めた。彼らは一様に、

（どこかが違う……）

と脳裏に思いながらも、賛成者があらわれたことで吻とした晴信の顔と、策士のこねる奇妙な論理に幻惑され、揃って首を縦に振っていた。

成行き上、諏訪姫の説得は、勘助にゆだねられた形となった。

（嫌な役目をおうてしまった……）

勘助は、自分の発言から、一人の少女の運命を決定してしまったことに、さすがに気重いものを感じていた。

しかし諏訪姫は、勘助の口から、側室に迎えたいという晴信の希望を伝えられた際も、微に眉根に翳りをきざんだと見られたのも一瞬、ほとんど感情の起伏を表わさなかった。

彼女を無理なく説得しようとして、あれこれ懸命に理屈をならべ構築し、弁説をふるう勘助を凝視する瞳には、むしろ憐憫の色さえ見ることが出来た。

（この姫は、天性の貴人だ！）

諏訪姫の前をさがった勘助は、われにもなく強い自己嫌悪に陥っていた。

あの諏訪の湖水を思わせる、姫の静かな瞳に凝視されると、いつしか、おのれが空疎な言葉をつらねている思いに襲われ、

（あなたは、晴信公の側室などになるべきではない！）

などと、あらぬことを口走りそうな危険をすら覚えたことであった。

（この姫を不幸にしたら、たとえ晴信公とて許さぬ。断じて赦さぬ！）

などと脳裏に呟いたのは、一体どうした心情からだろうか、と勘助は奇妙なおのれの心の動きに驚くのであった。

いずれにせよ。勘助は点を稼いだのである。

おとこ二人

甘利備前は、勘助の横顔に目をやって、

（またも、こ奴めが……）

といった表情をした。晴信が諏訪領併呑後、「信濃平定がもっと速く滑らかにいく、なんぞ良き手段はないものか」と問うたのに対し、勘助が、

「ないこともありませぬ」

と答えたのだ。

武田血族の一人を自負する甘利備前にすれば、何かといえば出しゃばる新参者勘助の存在はカンに触るのだ。大体、備前は深謀の持ち主で、先に晴信が諏訪姫を側室に望んだ時、強硬に反対したのも、板垣や飯富が諏訪領民の怨みを恐れたのに対し、彼自身は将来、晴信が天下に志をのべる際の経歴に瑕瑾をつけることになる、という思いがあったからなのである。

（口舌をもって世を渡る山本勘助がような者に、若い晴信公が振りまわされるようでは、わが武田家の先々が案じられてならぬ）

こうした思いが、備前には強いため、勘助の口にする言葉の一語一語に、ほとんど反

射的に不信の念を抱くのであった。

しかし、一方、勘助にすれば、晴信に意見を問われても、咄嗟には反応できず、いっかな対案を示し得ぬ重臣らの鈍重さに苛立ち、つい、いつも彼らより早くに、

「それについては……」

と口を開いてしまうのだ。

晴信にも、それを期待している節があり、直ぐさま、

「勘助、信濃には、上州の関東管領上杉憲政を後楯とする佐久の笠原清繁はじめ、北信濃には村上義清に連なる土豪があまた反抗の牙を研いでいる。彼らを掃討なしうる良き手段があるというなら、遠慮のう申しのべてみよ」

「されば申しのべまするが、彼らの多くは、地縁血縁にて固く結ばれている者どもです。ゆえに真っ向から力攻めに攻めるならば、敵はいちだんと結束を固くし、当然、当方にも多くの犠牲者と、長い時日を要することになります。すなわち、悪策の最たるものと申せましょう。ここは先ず、濃き地縁血縁を有する力ある人物を味方に引き入れ、内部からの切り崩しを図るがよろしかろうと存知ます」

「なるほど、しかし、そのような事の出来る人物がいるだろうか……よほどの智略、才覚、度胸の持ち主でなければ、とてものことに成し遂げることは出来まいぞ」

「心当たりの者が、一人おりまする」

「誰じゃ？」

「真田弾正忠幸隆にございます」

「何ッ、真田?!」

愕く晴信と同様、板垣、飯富、甘利ら重臣も、異口同音に、

「そりゃ無理じゃ」

と口走っていた。

何故なら、幸隆の真田一家が、敗戦流浪の悲運に見舞われたのは、天文十年五月、晴信の父武田信虎が、中信濃の諏訪頼重と奥信濃の村上義清を語らって、東信濃攻略を開始したのに原因する。

当時、佐久・小県地方に勢威を張っていたのは、鎌倉以来の古豪滋野一族であったが、武田・諏訪・村上連合軍に破れた滋野一族の首長海野棟綱らとともに、その支援の真田幸隆もまた、上州吾妻郡の羽尾入道幸全のもとへ逃れ、さらに箕輪城の長野信濃守業正を頼った。

亡命先に、幸隆が上州を選んだのには理由がある。

信濃小県郡の真田村から、鳥居峠を越えると上州吾妻郡となり、その吾妻郡を真横一文字に突っ切って沼田（群馬県北部沼田市）につながるのが「真田道」、あるいは「上田道」と呼ばれる古道だが、この沿線には数多くの海野の支族が居館を構えて、隠然た

る勢力を有していたのだ。

戦乱の信濃を脱出し、同族の勢力圏に逃げ込んだ幸隆が、ほっと安堵の一息ついた翌六月、思いもよらざる情報が飛び込んできた。幸隆らの滋野一族を信濃から追放した当の武田信虎が、なんと嫡男晴信によって駿河へ追放されたというのだ。むろん、追放劇に山本勘助が関わっていることなどは、知るよしもない。

「これは面白うなった！」

幸隆は横手を打ち、

「これで信濃がまた動く。まだまだ、わが真田家の浮かぶ機会は、残されているぞ」

と叫んだが、それからも彼は、同族の諸家を転々とした後、関東管領上杉氏の被官である箕輪城主長野業正のもとに身を寄せねばならなかった。

箕輪近い後閑の長源寺に寄留中、寺僧たちに厄介者扱いされた幸隆は、食事にも事欠く貧窮の日々を過ごしている。それを見かねた接待役の僧晃運が、ひそかに食事を運んでくれた。それで幸隆が、やがて真田郷を取り戻した暁には、必ずや一寺を建立して、そなたを開山にして進ぜようと言ったところ、晃運は左様なこと、敗戦したお前さんに出来ることではない、と笑えんだので、二人で大笑いしたという。が、後日、旧領を回復した幸隆は、約束のごとく真田村に一寺を建立して長国寺と名づけ、上州から先の晃運を招じて開山としている。

これらのエピソードによっても、およそが推察されるように、流転と屈辱の日々を生きた幸隆は、

「戦には断じて敗けてはならぬ。いかに武将らしからぬ所業と誹られようが、嘲けられようが構いはせぬ。どんな穢い手段を使うてでも、おれはきっと真田家を再興させてみせる」

と心に誓い、真田家再興の鬼に化身したのである。

実は、勘助は今川家の老臣庵原阿波守忠胤の食客であった当時、関東、甲、信、越の各地に潜行、情報収集にあたった際、箕輪寄留中の幸隆と面談しており、その鬱勃たる胸のうちを聞き知っているのだ。

もとより勘助は、そのことは噯気にも出さず、真田幸隆の起用を晴信に進言したのだ。

案の定、晴信は、

「あの真田が、われらに力を貸してくれるとも思われないが……もし可能なら、これほど力強いことはない。勘助、真田を説得する自信はあるのか？」

「もとより事の成否は、当たってみなければ分かりませぬが……」

「うむ、やってみる価値はありそうだな」

「はい、あると思われます」

「やってみるか」

「はい」

「幸隆は、上州に身を潜めているというが……勘助、そなた、いつ発つ？」

「只今より、即刻……」

晴信に一礼し、居流れる板垣ら重臣たちに軽く会釈した勘助は、不自由な足を引きずりながら大書院を退出した。

勘助は屋敷へ戻ると、直ちに旅装をととのえて出発した。供はいつものように石飛礫の丈太郎ただ一人。

もっとも、このたびは丈太郎も馬に跨っており、

「落馬すな」

と言う勘助の注意に対し、

「大丈夫です。だいぶ馴れました」

と元気に答えている。すでに彼も、声変わりのした若衆侍なのであった。

道中、勘助は間道から間道へと辿り、身分は時と場合に応じて、駿河の今川家臣、あるいは同家の重臣庵原阿波守忠胤の家士、あるいは武田晴信の家来という風に使い分けた。

怪しみ、尋問した村役人などは、今川の名を出すと恐れ入って、重ねて質問したりはしなかった。

勘助・丈太郎主従が、上州後閑の長源寺に真田幸隆を訪ねたのは、雨もよいの日の夕暮れであったといわれる。

雛僧から来客の名を聞いた幸隆は、一瞬、眉をひそめ、

「駿河の山本殿と申されたか……？」

と勘助の来意を審しむ風であったが、

「すぐお通し申してくれ」

と命じた。

この時点での幸隆は、以前とおなじように勘助を、今川家の重臣庵原阿波守の食客と思い込んでいたようだ。

狭い納屋めいた居室で、

「相変わらず、このような有様で、折角、お立寄り下されたのに、何のおもてなしも出来申さず、まことに面目次第もござらぬわ」

と恐縮していた。

するとそこへ、中年の穏やかな面立ちの僧が、雛僧に指示して燭台や食膳を運び入れて、おっとりとした口調で

「真田様、般若湯でも召し上がりながら、どうぞごゆるりと積もる話をなされませ」

「晃運、これは？」

「こなた様から、多分の御布施を頂戴いたしました。広い書院へ席を移そうかとも思いましたが、こちらの方が、話が洩れる心配もありますまいから……」

心得顔に言い、勘助に会釈して部屋から出ていきかけてから、ふと気づいたように、

「お供の方は、庫裡でわれらと一緒に夕食をとられますゆえ、御心配あられますな」

と言い残した。

「思わぬ散財をさせ申したな」

「何の、なんの、お気遣えあるな」

勘助が、あたりを確かめた上で、自分は今、武田晴信公に仕える身であり、その密使として、真田殿の仕官の意志を打診に訪れた旨を打ち明けた。

「山本殿、それは真か？」

「もとより！」

「晴信公も、思いもよらぬ事を……いや、これは御貴殿の発案でありますな」

明るく笑った幸隆は、酒壺を摑むと勘助の杯になみなみと注いで、

「よしなに頼み入ります」

と頭を下げた。この頭脳の鋭く、回転の異常に速い漢は、瞬時にして、かつて真田家を敗亡させた、仇敵武田家に随身する決断をしたのである。

恐らく、彼が武田家に仕官したと知ったなら、滋野一族の誰もが、敵に膝を屈するのかと憤激するに違いない。が、おれは真田家再興のため、おのれの思うよう行動するばかりだと覚悟を定めたのだ。

なお幸隆は、

「拙者は、なるべく早い日に、この地から脱出するつもりですが、山本殿、もし帰路を鳥居峠越えをなさるなら、ぜひにお願いしたきことがあります。四阿山の花童子なる修験者の籠り屋に、われらの旧臣どもが身を潜めており、また信濃佐久の津金寺にも、報せを待ちうけている者共が数多おりますゆえ、道順よろしければ、今夜のことをお伝え願いたい」

「心得申した。どうせのこと、少しは足をのばしてみましょう」

「忝い。これで長年の鬱気がさっと晴れましたわい」

「それは重畳、拙者もこなたへ参じたかいがありました。良き土産を晴信公へ持って帰れます」

二人の異能の漢は、心地よく酒に酔い、歓つきざる風情であった。その明るい談笑に、僧晃運もにこと微笑をこぼしていた。

真田残党

勘助の呪んだ通り、真田幸隆は武田家への仕官を承服した。

（幸い選択であろうが、これが戦国乱世を生きぬくための現実なのだ……そしてあの人物の才覚と器量ならば、必ずや家名を回復するに違いない……必ずだ、必ず……）

勘助は、深い智謀を秘めた、幸隆のらんと輝く眸、意志的な逞しい相貌を思い浮かべながら、胸中にひとり二度三度と頷いた。

「丈太郎、これからは急な鳥居峠に差しかかる。馬から振り落とされぬよう気をつけよ」

「はい、お師匠様」

勘助と丈太郎は、真田幸隆の決断を伝えるため、その遺臣が潜むという四阿山の花童子へと向っているのである。

四阿山は真田の里の奥にあたり、標高二三五四メートルの神秘的な山容をもつ。烏帽子岳との鞍部にあるのが鳥居で、四阿山頂の白山大権現社への参拝口として一の鳥居が立てられていた。峠の名もそれに由来しており、峠から離れて中社と称するお宮があり、ここに花童子と呼ばれる修験者の道場である籠り屋があるのだ。

真田氏によって勧請された、白山大権現の山岳信仰に、山伏・行者・修験者らの天台・真言密教が結合し、独特な荒行による超人的な能力を身につけるにいたった。真田一族が戦国の世に、

「不思議の弓取り」

と称され、なぜか人を畏怖させる、小暗い影の揺曳を感じさせるのは、呪術・妖術的な能力を秘めていると思われるからである。

四阿山頂の白山大権現の参拝口として、一の鳥居の立つ鳥居峠は、また日本武尊が弟橘媛をしのんで、

「吾嬬はや」

と詠嘆したという故事でも知られるが、峠の東が上州で、西が信濃であった。

花童子にいたった瞬間、丈太郎が、

「おう、これは凄い！」

と無邪気な嘆声を放った。視界が大きくひらけ、前方に雄大な浅間山が望まれたのだ。

「うむ、かような山上に、真田の者共は世を忍んでいたのか……しかし、旧地に戻れる日もそう遠くはあるまい」

勘助は、幸隆の忍従の日々に思いを馳せて、さすが感慨深いものがあった。自身、庵原忠胤の食客として、九年近くも不安定な歳月を送ったのだから。

勘助は、花童子の籠り屋を訪れ、幸隆の名指した鷲尾左近を呼び出した。山伏姿の左近は、最初警戒の色を隠さなかったが、山躑躅の群生する丘陵の陰で、真田幸隆の言葉を伝えると、

「お屋形が、武田家に随身ですと……?!」

一瞬、戸惑った表情を見せたが、

「分かりました。呼び出しがあれば、直ちに馳せ参じます」

きっぱり答えた彼は、「暫時、お待ち下され」と言いおいて姿を消したが、待つほどもなく十五、六名ほども、山伏、行者、修験者姿の面々を連れて来た。

「これまでの敵、武田に随身とあって、いささか面喰らいましたが、お屋形には深いお考えがあってのことでありましょう。真田家が再興なるならば、われらにも異存はありませぬ。一同、御指図のままに働くと申しております。これより早速、在所在所に忍び帰り、隠れ住む者にも伝えてやると申しておりますゆえ、どうぞ御安心下さい」

「それは真田殿も、さぞかし心強く思われるでござろう」

勘助は、彼らの機敏な反応ぶりから、真田一族の結束の固さを感じた。

(敵に廻せば恐るべき一族だが、味方にすれば、これほど頼もしい集団もない。これも武田晴信という若き武将の運強さということか……)

「では、これにて」

用件が済むや、さっと四散する彼らに、勘助は真田幸隆という武将に見る小気味良さを覚えながら、花童子を後にした。

問道伝いに南下した勘助は、津金寺(長野県北佐久郡立科町)に望月源左衛門を訪ねた。

山門の前で見かけた寺僧に尋ねると、

「望月、源左衛門殿……さあ、存知あげぬお名でありまするな。なにしろ、これだけの大寺ですから……」

と寺内の方をかえり見た。

確かに、この寺、草深い田舎の単なる古寺と見なすと誤る。文武天皇の大宝二年(七〇二)、大和薬師寺の僧行基の開基になり、のち伝教大師最澄、更には慈覚大師円仁が関わったと伝える由緒ある古刹なのだ。

古くからの学問寺として、法相・天台・真言・禅の四宗を兼学する道場として広く知られ、古来「修学院」と称された。寺中三十六の子院、二十四坊を数える大寺院だから、望月源左衛門などと、世俗の名を告げても、ただ首をかしげられても無理はないのである。また、身を潜めているというからには、姓名を変えていることも考えられ、いささか勘助も当惑したことであった。

もっとも、勘助は当地を訪れて聞き知ったのだが、津金寺境内の裏山には、滋野一族

の宝塔があるというからには、望月源左衛門なる人物は、必ず潜伏していると見た。すなわち真田氏は、滋野一族なのだから、幸隆の遺臣が拠っていて不思議はないのである。

勘助と丈太郎は、手分けして尋ねまわったが、いずれも首を横にふるばかりであった。いかにも迷惑げであり、こちらを警戒しているようなのだ。

「どうもけんもほろろ、といった按配だな」

勘助が苦笑した時、左方の宿坊の陰から納所坊主らしい姿があらわれた。丈太郎が走り寄って尋ねると、

「望月源左衛門？」

坊主は、眉をひそめ、

「ハテ、存ぜぬ名前だが、お前様方、いかな用があって、その、望月なる人物をお捜しかな」

「突然のお尋ねで、御不審も当然だが、実は真田弾正忠なるお方からの伝言があって、お目にかかりたきものと、先程から尋ねまわっている次第です」

「真田弾正忠様……」

男の眼がぱっと明るんだと見て、勘助が丈太郎に代わって、誠意をこめた物言いで、

「大事な伝言を預っているゆえ、もし、望月殿の居場所を存知てあられるなら、ぜひに御教示願いたい」

と言った。

すると、坊主はそれには答えず、

「わしに従いて来なされ」

と低声に言い、スタスタと今来た宿坊の方へ歩き出した。

いくつかの子院の前を通り過ぎて、青蓮定院と読める玄関に入った坊主は、目顔で勘助主従にも従いて来るよう示した。勘助と丈太郎は、軒先の柳の幹に馬を繋いでから、草鞋を脱いだ。

「……」

勘助は、坊主の後につづいて廊下を奥へ渡りながら、幾人かの鋭い眼を感じていた。

（どうやら、望月源左衛門は、この坊に潜んでいるようだな……）

と、奥の一室に入った途端、案内に立っていた坊主が、着座するようすすめながら、

「大変失礼つかまつった。拙者がお捜しの望月源左衛門でござる」

と名乗ってから、奥に声をかけた。

「皆も集ってくれ。真田弾正忠様からの伝言をお持ちの方が見えなされた」

「おお」

戸襖の陰から、五、六人の荒僧があらわれた。いずれも一癖も二癖もありそうな面貌の面々で、明らかに真田の残党と見てとれた。

勘助が、幸隆の伝言をのべると、四阿山花童子の残党と同じく、一瞬、鳴りをひそめたが、望月源左衛門の、

「真田の旧領回復が成るならば」

の一語で、

「幸隆様のお出でを待つ」

と決定した。

その時である。青頭の雛僧が血相を変えて駆け込んで来、黄色い声を上げた。

「皆さま、大変です。早う逃げなされ！」

「どうした小杉坊？」

「十五、六人ほどもの津金衆がやって来て、聞けば真田残党の望月源左衛門を訪ねて参った者がいるそうではないか。どうやら当寺に潜伏しているらしいから、徹底的に捜索してあぶり出せといって、本堂はじめ講堂、宿坊と片っ端から捜し出し、やがてこちらへも押しかけて参りまするぞ」

「報せてくれて有難う。津金衆に怪しまれぬように早く行けい」

雛僧に礼をのべた源左衛門、

「はて、いずれへ身を隠したものか……」

と思案した時、勘助が、

「望月氏、なにも逃げ隠れするにはおよばぬ。拙者から話せば済むことだ」

と言った。

津金衆は、小池の一党である。

甲斐と信濃の間に聳える、八ケ岳の南の裾野が小池郷と呼ばれるが、この小池、津金、折居、小尾の里に結成された郷士の集団は、山岳戦に強い剽悍無比の侍たちとして知られ、甲斐国の北方からの侵攻口である佐久、諏訪地方の守護にあたっていた。

すなわち、津金衆にとって、真田の残党は武田家に敵対する危険分子であったのだ。

彼らはまだ、真田幸隆が武田晴信に随身を決断したことを知らずにいる。

勘助が、望月らを落ち着かせたところに、どやどやと津金衆が雪崩込んで来た。いずれも武装した屈強の壮漢ぞろいである。はやくも抜刀し、手槍を構えて、戸口戸口に油断なく押さえるなど、いかにも戦い馴れのした面々であることを示していた。

五十年嵩の首領らしい、角顔に目の大きな人物が、さびのある声で、

「拙者は津金衆の村越兵庫だ。貴公らが、真田の残党望月源左衛門と、その配下であるとは、すでに露見しているのである。言い逃れようとしても無駄だ。抵抗すれば斬ることになるゆえ、穏しくわれらの言う通りにして貰いたい」

「村越殿、ちょっとお待ち願いたい」

「何っ？」

村越兵庫は、突然言葉をはさんだ勘助の異相を見て、眉をひそめ、
「誰だ、貴公は？」
兵庫は、勘助と丈太郎の旅の行装から、望月の一族とは見てなかったから、改めて気づいたように勘助の身許を質そうとした。
「これらの仲間ではあるまいな」
「いや、拙者は、武田晴信公のお側近くに仕える、山本勘助と申す者で、これなる若者は供の桜庭丈太郎……晴信公の直命にて、上州に流浪中の真田弾正忠殿に会い、その伝言を持ってこれなる望月氏を訪れたところである」
「えっ、晴信公の……山本勘助殿……さすれば真田残党の望月源左衛門は？」
「これからは、津金衆にとっても頼りになる味方になる筈」
「ふうむ、まことに驚き入った次第で……あの真田党が、われらの味方になるとは、どうも頭が混乱しますわい」
と、頭を拳でごつんと叩いたが、そこでふっと思い出したように、
「そうそう、山本勘助殿と申されれば、たしか喜多嶋小源太という若者は？」
「拙者の家来でござる」
「や、それは、何と、なんと！」
村越兵庫が驚きの声を上げると、すでに白刃や手槍をおさめた配下の者たちも、いかにも興味津々といった面持で、勘助の異相を凝視した。
勘助は、意外な人物の口から、小源太の名が飛び出たので驚いて、
「村越氏は、どうして小源太を御存知か？」

「そう、三年前の秋口でありましたろうか、この近辺をうろついている怪しい侍がいるというので、捕まえたのが喜多嶋小源太氏でありました。聞けば山本勘助殿の御家来で、晴信公の御秘命により、陰で働ける機敏な娘を捜しもとめているとのこと。出来るなら身寄りなく、困窮しているほどの娘なら、本人のためにもよろしいかと思うという条件ゆえ、先年の海野との合戦で討死した、わが配下の者の若後家と佐久の娘を推薦した」
「おう、津金のお政と佐久のおりょうの二人ですな」
「そうそう、お政とおりょうです。変わりなく暮らしておりまするか」
「共に優れた娘たちで、お陰で晴信公よりお褒めの言葉を戴くなど、小源太も大いに面目をほどこしました」
「それは良かった」
村越兵庫は、心から不運な女たちのために、良き運を摑めと祈る風であった。津金衆は剽悍にして朴訥なのである。
彼らは強敵真田党が、一転して味方となると知るや、たちまち、真田残党の望月源左衛門とその配下を囲んでの祝宴を開くという喜びようであった。

「山本殿、小源太氏は、いい喉をしておりましたなあ。かつて、われらの聞いたことも
ない、珍しい西国の歌の数々、すっかり聴き惚れたものでした。しかし今宵は、一つの
馳走にわれらの歌を！」
という兵庫の音頭とりで、酒気で顔を染めた津金衆が声を揃えて歌いだした。
山での合戦　山での合戦
おらん党は　強ええぞ
小池の一党
小池のおらん党は
山の武士エイエイエイエイ、オウ……
野太い男たちの声は、古刹津金寺の上房下房の宿坊一帯に、低い旋律となって流れ、
人々は、
「なんぞ良きことがあったようじゃな。津金衆が般若湯に酔ったようだ」
と噂した。
甲府に戻った勘助が、真田幸隆が武田家への随身を約束したことを晴信に報告すると、
飯富兵部や甘利備前は、奇怪な手品を見たような眼で勘助を見守っていた。

秘命二つ

真田幸隆の武田家随従に成功した勘助は、久しぶりに浄古寺へと馬を駆った。
「丈太郎、だいぶ上手になったな」
「いえ、まだまだです。早駈けすると、尻が泳ぎます」
雲の影の走り去る街道を、主従はぱっぱっと砂塵を上げて軽やかなのであった。
「小源太さんは元気でいるでしょうか？」
「外出はしてない筈だ」
勘助も、小源太に会わねばならぬ用件を持っているのである。
浄古寺城主大村右京亮が、勘助の作図に従って築造した忍びの者養成所は、六尺（約一・八メートル）幅の深い濠がめぐらされてあり、樫の木造りの大門の扉には、がっしりと鉄鋲が打ってあるという風に、ほとんど「砦」と呼ぶほうがふさわしいほど重厚にして威圧的なのであった。
村人たちも一様に、
「浄古寺城の詰めの砦かのう。しかし若い女たちが出入りしているようじゃが、近くに寄らんほうが無難ぞや」

などと囁き合い、柴刈りや山菜採りにも近づかぬようであった。

確かに、櫟・楢・楓などの雑木林に包まれたこの一面は、人を寄せつけぬ、異様な雰囲気を漂わせているのである。が、その養成所としての出来映えは、勘助ですら、最初に見分した際、

「これは、よう出来ている。大村殿もさぞかしお骨折りでござったろう」

と嘆声を放ったほどであった。

「満足して戴けるか」

大村右京亮も、勘助に褒められて、思わず胸を張り、

「おぬしの作図に従い、諸設備万端、遺漏なきを期したつもりだが、欠けている点に気づいたなら、どしどし申し出て欲しい」

と鷹揚に言ったものである。

それにしても驚嘆すべきは、喜多嶋小源太が狩り集めた二十余名にもおよぶ一群の少女たちであった。勘助の睨んだ通り、堺の町の傭兵くずれとはいえ、納屋衆天王寺屋の内所へ組み入れられ、そこで磨いた人間を見る眼識はさすがに確かなものであった。

「体力、智力、共に衆にすぐれた者を」

という基準によって、小源太の選択した少女の多くは、戦火で肉親縁者を失った十四、五歳の未通女ばかりであった。中には津金のお政のような若後家も混っていたが、後家

とはいえ、彼女はまだ十六歳だったのだ。

彼女らは、将来、相模・駿河・三河・尾張および上野・下野・越後・越中・越前などの諸国に派遣され、時々はその土地土地に身を潜めて、謀略・諜報から暗殺にもおよぶ特殊工作に従事する運命にあった。

当然、想像を絶する厳しい鍛練に耐える、強靱にして、しなやかな肉体と精神力が要求されたが、早駈け、跳躍、宙返りなどの体術や、短剣・手裏剣・含み針術などの武術、更には、ありとあらゆる職種の専門知識や語彙の修得という厳しい訓練に、彼女らは最後まで耐えて一人の落伍者も出なかったのである。

勘助は、しばしば訪れて、行流の秘術を教授して来たが、常時、実地の指導監督にあたったのは、伊賀忍びの統領藤林一族の多佳女なる女人であった。彼女は、当年三十六歳。色白面長の一見、穏和そうに見られるが、幼時より、伊賀の里でも評判になった敏捷な体術、手裏剣の技に長じ、殊にも、その含み針の難を躱すには、勘助ですら二工夫も、三工夫もせねばならぬと嘆じたほどのものであった。

多佳女の訓練は厳しく、信じられぬほどの成果を上げた。

勘助は、少女らの特技を検分した際、とりわけ黒駒の阿久里、岩殿のおきょう、津金のお政、佐久のおりょう、御坂のお仙、笹子のお紺らの秘技披露には、

「ふうむ、多佳女どの、ようこれまで仕込まれたものじゃ。彼女らと比べると、こう申

しては、差し障りがあるやも知れないが、武田家自慢の諸国御使者衆も顔色なしといわんか、小童ほどのお役にしか立てまいと思えてならぬわい」

と、つい口走ってしまったほどだ。

そして、すでに黒駒の阿久里は、越後の春日山城下へ、津金のお政は相模の小田原城下へ、佐久のおりょうは上州の関東管領上杉憲政の平井城へ、といった風に潜行し、それぞれに活動を開始しているのである。

この頃には、浄古寺村のこの「砦」の存在も、武田家中の一部でも薄々は知られていたが、人々はこの屋敷について語る時、無意識のうちに声をひそめ、なにか禁忌に触れるような口吻と表情になるのは、外部に秘するべき晴信直属の特殊機関と心得ているからであった。

そして今――久しぶりに「砦」を訪れた勘助と丈太郎は、馬から滑り降りると、

「開門！」

と声をかけた。

ほとんど同時に、すでに馬の気配で勘助と察知した番士が、大門の閂をはずして押し開いた。

「お出でなされませ」

この日の当番士は、御坂のお仙という体術と手裏剣を得意とする娘であった。年齢十八歳。信濃海ノ口合戦で討死した者の遺子とかで、鼻筋の通った美貌が、時に非情冷酷に冴えて、典型的な女忍びの者「くの一」の才華を発揮した。

そのお仙が神秒な面持で、

「喜多嶋小源太様なら、浄古寺城のほうに在られますが……」

「うむ、小源太のもとには、帰途に立ち寄るつもりだ。取締どのに所用があるが、何処においでじゃ」

「取締でしたら、手裏剣打ちの道場にて、稽古をつけておいでの筈でございます」

「わかった。案内は無用、道場へ参ってみることにする」

言い捨てた勘助は、丈太郎をうながして歩き出したが、お仙の片頬に影のように掠めた薄い嗤いに、ふっと眉をひそめていた。

（この娘は、同僚の手裏剣打ちの拙さを冷笑したのだろうか、それとも……いずれにしても、慢心は身をほろぼす元だ。折りを見て注意せずばなるまいな）

と――道場前の椎の樹の梢あたりから、羽音を立てて山鳩が翔びたったのと、「えい」と女人の気合が発せられたのが同時であり、次の瞬間、宙に静止した山鳩がすうっと落下した。

「手裏剣は、掌から小鳥が翔び立つように打つのですよ」

四、五人の娘たちに説明した多佳女が、地上の山鳩の羽根から手裏剣を抜きとると、

生きものは、ふたたび羽音も高く翔びたった。多佳女の手裏剣は、羽根の合い間を縫っただけだったのだ。

「お見事！」

「あ、山本様……！」

多佳女は、勘助の眼前での秘技の披露を恥じて、かすかに頬を染めた。

「実は、そなたに、晴信公からの直命があった」

稽古を解散し、多佳女の居室に入って勘助は切り出した。

「お屋形様が、このわたしに？」

「うむ」

「どのような御用向きでありましょうか？」

「相州小田原城下には、すでに津金のお政が潜入しているが、近頃、武州河越城に関東管領上杉氏を破るなど、一段と勢威活発なる北条氏康の動向が気になる。むろん、お多佳の配下には、手塩にかけて育て上げた、若く優れたおなごも多かろうが、何分にも大事のことゆえ、余人にはまかせられぬ。お多佳自身の眼にて、小田原の様子を委細詳しく、見届けて来て欲しいとの仰せであった」

小田原北条三代目の氏康率いる八千の兵が、関東管領上杉憲政軍八万五千余兵を撃破した「河越夜戦」の噂は、たちまち甲斐国にもつたわった当夜、青年武将氏康が素紙子をひき裂いて肩衣をつくり、それを鎧にかけて自ら馬を駈り、管領憲政の陣営に斬り込んだと聞いた晴信は、ぱっと頬を紅潮させ、

「氏康め、やりおる！」

と唸ったが、板垣信方や飯富兵部らも、

「恐るべき三代目があらわれおったわ！」

「小田原、油断ならじ！」

と激語したものである。晴信が小田原の情報をもとめたのも無理はない。

「お屋形様の仰せ、分かりましてございます。これより直ちに、出立の仕度にかかりまする。留守居役は、おゆらさんに頼みましょう」

多佳女は、低声に、きっぱりと答えた。おゆらは、多佳女を補佐する年長の老女である。

この日を境に、彼女の姿は浄古寺の里から消えている。

多佳女と別れた勘助は、忍び屋敷から浄古寺城へ廻り、二つ目の用を果たすために、喜多島小源太を訪ねた。小源太は、女だけの忍び屋敷での寝泊りを避け、この頃では、まるで浄古寺城主大村右京亮の側近者のような顔をしていたのであった。

そして、この城にも、北条氏康の「河越夜戦」の余波は、厳しい緊張感をもたらしていた。右京亮の姿が見当たらないので尋ねると、

「秩父往還の関所を固めるため、兵五十ほどを引き具して参られた」
とのことであった。
「武蔵国の接点ですからな。河越夜戦の噂を耳にするなり、さっと国境警備に繰り出すなど、日頃は頼りないほど好人物であられるが、どうしてどうして、なかなかのさむらいですよ大村様は」
そう語る当の喜多島小源太も、顔がひき締まって精悍な若侍に変貌しているのである。丈太郎も直ぐにそれを感じたらしく、
「小源太さん、以前よりも一段と男ぶりが上ったね」
「冷やかしちゃいけない」
小源太は照れて、髪を撫で上げたが、
「これでも何かと苦労つづきで、少し痩せたかなと気にしているくらいだ」
「うん、小源太さんのことは、津金衆の親玉村越兵庫さんから聞いているよ」
「おう、村越殿に会うて来たか、お変わりなかったかえ?」
「うん、津金のお政や佐久のおりょうを選ぶなど、なかなかもって眼識は確かなものだと、小源太さんを褒めていたよ」
「御自慢の山岳党の歌を聞かされたろう」
「ええ、津金衆の連中、夜の明けるまで歌っていましたが、それでも小源太さんの喉にはかなわない。あれでは堺の町に帰ったら、またまた臙脂屋の娘と一悶着が起きるね、といって皆が心配していました」
「つまらぬことを……どうも津金衆の奴らはお喋りでいかん」
小源太は苦笑した。彼は、未知の人々と接触する時、自分もすべてをさらけ出し、相手の警戒心を和らげるという手法を、堺の納屋衆天王寺屋時代に身につけたのだ。
「せっかく忘れかけたというのに、堺の町を思い出してしまうじゃないか……津金衆の奴ら、実に怪しからん」
「小源太」
それまで、丈太郎と小源太の久しぶりの会話を、微笑をたたえて聞いていた勘助が、ふっと言葉を挟んだのはその時であった。
「思い出したついでに、その堺の町に飛んで貰いたいのだ」
「えっ、何と仰せられた?」
「堺に行って欲しいのだ」
「堺の町にですか……実は、忍び屋敷の仕事も一段落しましたゆえ、そろそろ甲府に戻して戴こうかと、お願いするつもりでした」
「うむ、わしもそう思うていたのだが、晴信公から特命があった。わしの元に戻るのは、特命を果たしてからにして欲しい」

「どのような事でありましょうか?」

怪しむ小源太に、勘助はちょっと間をおいてから、低声に畳み込むような物言いで、

「鉄砲じゃ」

「えっ、鉄砲?!」

「うむ、鉄砲の買い付けである。そなたが天王寺屋にあった当時の人脈を生かして、二挺でも三挺でもよい、金に糸目をつけずに、買い付けの手配をしてくれ、との仰せなのである。このことは板垣殿や飯富殿、甘利殿ら重職の方々も御承知だ。まだ噂に聞くだけの貴重品である。なかなかもって入手は困難だろうが、それが可能か不可能かは、そなた自身でなければ分からぬ。どうじゃ小源太、やってみる気があるか?」

「……?」

一瞬、宙の一点を見据えた小源太は、深く息をのんだ。鉄砲は天文十二年、ポルトガル人によって、九州の南端、種子島に伝えられたが、小源太自身、まだ実際に見たこともなく、ただ噂に聞くのみである。そのような珍しい兵器が、果たして入手できるかどうか、まったく自信がなかった。が、彼は、いつになく慎重に思案を凝らす風であったが、直ぐいつもの明るい物言いで、

「やってみましょう。当たってみる価値がありそうです。喜んで堺へ行かせて戴きます」

「よし、そうと決まったら、代金の支払い、搬送の方法など、あらかじめ取り決めておかねばならぬ。これより直ちに、躑躅ヶ崎の館に戻ろう……何、大村殿には、晴信公の御用でそなたを甲府へ連れ帰る旨、わしから書き置くゆえ心配すな」

「はいっ、では……」

やがて——小源太を先頭に、勘助を中に挟んで丈太郎とつらなり、三騎の騎馬が雲の影の走る街道を、ぱっぱっと砂塵を舞わして城下へ向かった。

奇才の人々

真田幸隆は、山本勘助の期待を裏切らなかった。上州箕輪城主長野業正の庇護下を脱出し、武田晴信に随身してからの活躍は、まことに目覚ましいものがあった。

「真田幸隆が、よう働いてくれる」

わざわざ晴信が、そう勘助に言葉をかけてくれたほどである。

とにかく、身辺に小暗い翳りを漂わせた一人の漢が、信濃路を影のように往く。そ奴の河獺にも似た顔には、深い智謀を秘めた茶色の瞳がきらきらしており、見る者に尋常ならざる感を覚えさせるが、事実、信濃守護小笠原長時や奥信濃の雄村上義清らにとっては、まことに危険極まる人物なのであった。

何故なら、家中からそ奴と接触者を出した城は、必ずといってよいほど裏切り者があらわれ、自壊作用を起して敗亡するからである。この不気味にして危険な漢が、真田弾正忠幸隆なのである。

彼は、武田晴信の信濃先方衆、すなわち、信濃攻略先遣隊長として、謀略という特異にして優れた才能を駆使して、敵陣営内に内応者を作り、攪乱、落城せしめていたのだ。

幸隆は、金銭や処遇の餌に釣られた裏切りによって、一城が内部崩壊をきたす姿を見ても、いささかも心に痛みを覚えることはなかった。いつも冷然たる面持で、

（わが真田家を再興させるためには、いかなる手段を用いてでも、必ず落城させずにはおかぬ！）

と、胸中に呪文のように呟くのである。

幸隆は、あの上州の長源寺での一夜、武田家への随身を説く山本勘助に対して、

「承知致した。拙者、これより鬼になり申す」

と誓った通り、まこと真田家再興の鬼に化身したのだ。だから彼は、真田の宗家たる滋野一族の人々が、仇敵武田家への随身を、一族への裏切りとして指弾しても、眉毛一つ動かさなかった。

（誰が何と言おうと、俺は俺の道を往く！）

かくて、武田晴信から信濃先方衆に任ぜられた幸隆は、その特異な謀略の才能をもって、水をえた魚のように活動を開始した。

もともと、信濃は幸隆の生まれ故郷だ。滋野一族敗亡以来、そこかしこに身を潜めている親戚・知友をたどってコネをつけ、これに多額の金銭と、望むほどの処遇をチラつかせれば、ほとんど百発百中に内応者を作り出せた。彼は、人間の持つ弱点を、徹底的に利用した。幸いにしてといおうか、晴信は金を惜しむなといい、買収資金は望むほどに与えた。

（いかに誹られようが、嘲られようが、地獄に堕ちてもいい。必ず真田の家を再興させずにおくものか……！）

真実、幸隆は、もはや武田晴信と心中するほどの覚悟でいた。彼は、四人の息子たち、嫡男信綱、次男昌輝、三男昌幸、四男信尹のうち、三男は晴信の小姓、四男も晴信に仕えさせるなど、厳しく武田家への忠誠を誓っており、後日、信綱・昌輝兄弟は、長篠合戦に出陣して討死しているのだ。

このように、真田幸隆が必死に裏工作に熟中している頃、山本勘助もまた、多忙な毎日を送っていた。晴信がしきりに堺に赴いた喜多嶋小源太と、小田原へ潜行した忍び屋敷取締の多佳女の消息を訊ねるのである。

「いずれも、なかなかに困難なる御用でございます。どうぞ、もう少々お待ち下さい」

「どうやら、性急に過ぎるようだな」

「御意」

いくたびか、晴信との間に、このような会話がなされたが、思いがけず勘助が晴信の生母大井夫人に呼び出されたのは、天文十五年五月、晴信が信濃南佐久郡の内山城攻略に出陣した直後のことであった。

「北の曲輪様が拙者をお呼びであると?……かような時に、いかなる御用であろうか」

勘助は眉をひそめた。板垣信方や飯富兵部ら武田家譜代の重臣らと異なり、新参の勘助は晴信の生母大井夫人とは、まったく接触がなかったこともあるが、今の勘助は晴信から命ぜられた所用を果たした上で、急ぎ信濃佐久の陣営へ馳せ参じることになっているのだ。

勘助は、小首をかしげながらも、直ちに躑躅ヶ崎館の北曲輪に向かった。大井夫人は、夫の信虎が駿河へ追放された後は、剃髪して北曲輪にひっそりと日を送っており、家臣たちは、そんな彼女を「北の曲輪様」と呼びならわしていた。

大井夫人は、南北朝より甲斐国の西部一帯を領していた豪族大井信達の娘だが、永正十四年（一五一七）に信虎と戦って敗れた際、当時二十歳の信虎に嫁いだのである。彼女は、なかなかの賢夫人で、嫡男晴信のため、わざわざ尾張の瑞泉寺から、岐秀元伯禅師を大井庄の長禅寺に招じて、参禅、学問の修得にあたらせるなど、将来の武田家統領の教育に心を砕いた。

そんな気性の勝った「北の曲輪様」は、勘助のような者にとっては、いささか肩の凝る相手であったといってよい。

勘助は、青葉の匂いのする北曲輪の隠居所に、不自由な足を引きずりながら彼女を訪ねた。すると尼姿の彼女は、物静かに勘助を茶室に招じ、茶を淹れて、奨めた上で、思いもよらぬことを口にした。

「そなたに来て貰うたのは、ほかでもない、諏訪姫を信濃の上原城へ連れていって欲しいのです」

「えっ、何と仰せられました?!」

あまり物事に動じない勘助も、意外な夫人の言葉に、一瞬耳を疑った。が、夫人は物静かに、

「諏訪の姫を、上原城に移して欲しいと申しました」

「しかし……それは……お屋形様の御指示がなければ、いかに貴女様のお言葉でも、私めなどの勝手に出来ることではありませぬ」

「そのことなら、わたしも、よく存知ております。たとえお気に入りのそなたでも、私意をもっていたせば、きっと厳罰に処せられましょう。しかし、このことは、晴信も承知致しておることで、山本勘助に命ぜられるようにと、申し置いて出陣したのですよ」

「はあ、まことにもって、驚き入った次第でございます。思えば、余人にては出来ぬよ

うな御用命があり、遅れて参陣してもよろしと申しつかりましたので、不審に思っていたところでございました」

勘助は、素知らぬ顔で出陣していった、若い晴信の一筋縄ではいかぬしたたかさに、胸中いささかげんなりした。

「しかし、どうして姫を上原城へ……？」

「姫が身籠ったのです」

「あ……」

「すると、それと知った三条殿の嫉妬が激しく、姫の身に危険がおよびかねない事態となって、ここ四、五日来、夜も安じて眼れぬようになりました」

「なるほど、さほどに険しゅうなっておりましたか……三条の方様が、諏訪姫の美貌を嫉妬されているようだとは、噂を耳にしておりましたが、それほどとは露知らずにおりました」

「山本勘助」

「はっ」

「お屋形殿に姫を側室にと薦めたのは、そなたであろうが。姫の最後まで見届ける義務がそなたにはあるのです」

「迂闊でございました」

「では、上原城へ参ってくれますね」

「はい、勘助、確かに承りました」

「頼みまするぞ」

「はい、わが身に替えましても、必ず無事に姫を上原城へお移し申します」

勘助はきっぱりと答えた。

それにしても、これまで勘助は、多忙にかまけて忘れるともなく忘れていたが、自分が側室にと薦めた一言が、諏訪姫の運命を変えてしまったという思いは、いつも頭の隅、心の奥底から消え去ることはなかったのだ。

あの薄く青味をおびた、悲哀と諦観をたたえた瞳を思うたびに勘助は、

（あなたは、晴信公の側室などには、なってはならぬお人なのだ！）

と、われにもなく叫びそうになった思いを、今でも忘れえずにいるのである。

その点、正室三条夫人に対する勘助の印象は香しくない。勘助を見る夫人の眸子に、「駿府の尼御台」と呼ばれた寿桂尼――今川氏親の未亡人で、義元の生母であり、三条夫人と同じ公家の出で、権大納言中御門宣胤の娘という誇り高き女人と同質の、人を見下すような光を認めた途端に、心が冷えたのである。

寿桂尼は、勘助の醜体を嫌悪し、老臣庵原阿波守忠胤ほどの者が熱意をこめて推挙したにもかかわらず、ついに今川家に用いることはなかった。

「風雅を第一にするとは、今川家は武門たることを忘れたようだ」

勘助は、武田家に仕えてからも、その思いは濃く、今川家の前途を暗いものと断じている。

三条夫人に、今川寿桂尼と同質のものを感じた勘助は、反射的に静謐な諏訪姫を守ってみせると決意した。

同夜、亥ノ下刻（午後十一時頃）、北曲輪の諏訪姫寝所近くで、曲者三名が斬殺されている。いずれも屈強の壮漢だったが、一人は頭部から鼻筋にかけて斬り下げられ、一人は薙がれた首が、二間（約三・六メートル）ほども離れた爽竹桃の樹の下にころがっており、一人は右肩から左脇の下へかけて、ざっくりと斬り割られ、鮮血であたり一面が血の海に化しているという凄まじさであった。

「曲者たちが、北の曲輪様の御寝所に押し入ろうとしたゆえ、拙者山本勘助が成敗致した。なお、不審の点があらば、お方様のもとまで、伺い出るがよろしかろう」

これが、役方に申し述べた勘助の口上であり、諏訪姫の名はわざと省いて届けたが、役方も心得顔に了承、曲者たちは斬られ損に終わった。北の曲輪様から、特に、

「山本勘助に、御苦労であったと申し伝えておくれ」

という犒いの言葉があったとのことで、勘助の口上がそのまま通るとともに、彼の怪物的剣技の凄まじさが家中の評判になった。

なお、三人の曲者は、いずれも三条夫人の側臣だったことは伏せられ、一件は究明されることなく闇の中に葬られた。

「これで三条の方も、少しは穏しゅうならられるであろう」

勘助は、それでも屈強の武装兵五十名をもって、諏訪姫の輿を厳しく警固し、翌早朝に北へ向かって出立した。

「よいか、急がずともよい。姫のお体のさわりとならぬよう、お輿をゆっくりと進めてくれい」

時折り、勘助の下知する声が聞かれるほかは、北曲輪での惨劇など、まるで嘘のように思えるほど、郭公の啼きわたる声が、遙かにこだまするのどやかな旅路であった。

（どうやら、三条の方も懲りたようだ）

勘助は、輿の中の諏訪姫の体を気づかって、時折り、

「姫、もうそっと足どりをゆるめましょうか」

「いえ、それにはおよびませぬ」

澄んだ声の答えに、勘助は、彼女が一刻も早く生まれ故郷の上原城に帰りたい、という思いを感じとっていた。

「丈太郎、一足先に上原城に行って、姫お迎えの用意をととのえるよう告げてくれ」

「はいっ」

丈太郎は答えるや否や、馬腹を蹴って奔り去った。彼の乗馬も、尻が泳がぬまでに上達しているのである。雲の影と競うように、見るみる丈太郎の乗馬は遠ざかった。

「ふむ、少しは乗り馴れたようじゃ」

勘助は、微笑して独りごちた。

記録人高白斎

諏訪姫を擁した勘助率いる武装隊を、城門口まで出迎えたのは、丈太郎の先触れをうけた板垣駿河守信方であった。諏訪郡代とされた彼は、時折りの重臣会議出席のため、甲府の躑躅ヶ崎館に出仕する以外は、この上原城に常駐しているのである。

勘助が意外だったのは、板垣の傍に駒井高白斎がいたことだ。晴信の侍臣高白斎が記すところの日誌は、『高白斎記』として武田家の貴重な記録となっている。その文章の簡勁、簡潔なように、喋る言葉も、簡略に過ぎるほど簡略だが、その人柄を勘助は好もしいものに感じていた。

ともあれ、慌ただしく、姫や侍女らを居館に案内し、護送兵らを休息させた後、板垣は勘助に言った。

「突然の姫のお越しとは、まことに驚き入ったことだ。これは殿のお申しつけか？」

「いや」

「いや、と言うて、よもやおぬしが……?!」

板垣は、思わず声を高くして、

「よもや、おぬしが、勝手に姫をお移し申したのではあるまいな」

「まさか、いかな拙者とて、それほどの無茶は致しませぬ」

「ふふふ、せぬとは思うが、やりかねないとも思う、おぬしのことだからな」

「ははは、確かに、お言葉の通りかも知れませぬが」

勘助は、珍しく低く笑って、

「実は、北の曲輪様から、突然お呼び出しがあってのことなのです」

「御母堂様から……」

意外な顔をする板垣に、勘助が甲府出立前夜、諏訪姫の館に侵入しようとした曲者を成敗した事件のあった旨を明かすと、気難しい顔をして聞いていた板垣は、

「なるほど、これで謎が解けた……どうもおかしいと思うていた」

「何事でしょうか？」

「実は、佐久の陣中から、高白斎氏がわざわざ当城を訪ねて見えて、急ぎ新館を築造するようにとの、殿の申しつけを伝えられたばかりだったのだ。われら二人、今の今まで、凱旋の帰途に殿が御休息なさるための新館、と思うていたが、これで謎は解けたという

ことよ」

「わるい」

と高白斎が呟いた。殿も人が悪い、と言ったつもりだろうが、言葉の簡潔に過ぎるのがこの人物の癖なのである。

だから高白斎が、諏訪姫が入った館の方に目をやりながら、

「美しい……殿も過ぎなさる！」

と言ったのは、あのような美しい姫がいなさるのに、晴信公も女道楽が過ぎる、と言っているのである。実際、晴信は天文十年には、北信の豪族禰津宮内大輔元直の娘を、御丁寧にも祝言して側室にしており、さらに翌十一年には、武田の一族である石和の里の油川刑部信守の娘を側室に加えているのである。

「そもそも、われらにまで、諏訪姫をこの上原城へお移し申し上げることを隠されるなど、あまりにも水臭いいたされかたであるまいか」

「まっこと！」

高白斎も簡潔に同意した。勘助は笑って、

「それは恐らく、諏訪姫側室については、御異議のあった御両方に、いささか殿も面映ゆかったのでありましょう」

と言ってから、

「さて、拙者は、これより佐久の陣へ参らねばなりませぬ。姫にお別れの御挨拶を致して来ましょう」

「姫は、この板垣が確かにお預りした。御住居いの新館も、急ぎお作り申すと殿にお伝えして欲しい」

「かしこまりました。お二方には、これにて失礼致します」

「うむ、大儀でござった」

「さらば」

板垣につづいて、高白斎も簡潔に別辞をのべた。

勘助は、広場を横切って、諏訪姫のもとへ向かった。夏めいた強い日射しが、片足を引きずる勘助の影を、白く乾いた地面に黒々と落としていた。

彼は最前から、かつて自分の生まれ育った城に帰った諏訪姫の心情を考えていた。父諏訪頼重を死にいたらしめた仇敵晴信に、身をまかせた彼女の心情を思うと、さすがの勘助にも複雑な感懐があった。自分の一言が彼女の運命を変えたとの思いがあるだけに、ひとしお感懐には重く痛みがあるのである。

書院での諏訪姫の白い顔は、庭の緑に映えて、透き通るように見えた。山鳩がしきりにのどを鳴らしており、涼風が爽やかに吹き抜けていた。

勘助は、目を伏せたまま、

「お別れの御挨拶に参じました」
「佐久へ去ぬるのか？」
「はい、姫をこなたにお届け申したら、佐久の陣へ参るようにと、北の曲輪様より申しつかっております……どうぞ姫君には、すこやかなる良きお子をお産みなされませ。諏訪の人々とともに、この勘助も心から祈りおります」
「……」
瞬時、沈黙があって、
「勘助、聞きたいことがあります」
「はい、どのような事でありましょうか」
「殿は、ただ今、佐久の内山城を攻めておいでと伺っておりますが、あと、どれほどの城をお取りになれば、満足なされるのでしょうか、城をいくつ奪れば……」
「……！」
勘助は、あと返答に詰まった。改めて「城をいくつ」と問われ、心中にどきりとした。
（日本全土の城……）
という途方もない言葉が、脳裏に鋭く点滅するとともに、おのれの生まれ育った城を失った彼女の哀しみが胸を搏った。
（この姫だけは、これ以上、不幸にさせてはならぬ！）

そう勘助は思わずにはいられなかった。
「姫、では、これにてお暇つかまつります」
「もう去やるか」
「はい」
一礼した勘助が、諏訪姫の前を退がろうとした時、透明な声がした。
「御苦労でした。勘助も達者でお過ごし」
「はッ」
勘助は、思わず平伏した。自分は恨まれて不思議はないという思いがあっただけに、諏訪姫の別れの一語は衝撃的であった。
勘助は、護送兵たちに、甲府へ戻るよう指示した後、丈太郎とともに上原城から佐久の戦場へと向かった。が、勘助が到着した時、すでに内山城は落城していた。
晴信は、諸将と好機嫌に談笑していたが、勘助の顔を見ると、諸将を散らした上で、
「勘助、無事に済んだようだな」
「はい、諏訪姫は、確かに上原城にお移し致し、板垣殿にお渡しして来ました。が、殿もお人が悪い」
「憤っているのか？」
「はい、憤っています。北の曲輪様からお呼び出しがあった時、一体何事が起きたかと

驚きました」

「おなごの嫉妬は恐ろしい。身籠った諏訪姫に難儀がおよばぬうちにと、ひそかに母上にお願いしたのだ。それに姫に関わることなれば、そなたの他に頼める者がおるものか。また勘助、そなたには、姫を守ってやる責任が無いでもあるまい」

「なかなかもって、強引でございますな」

「ははは、勘助、これくらいで勘弁せい」

戦勝とあって、晴信は快活である。もう諏訪の問題は、これで解決したとばかりに、声高らかに、

「一同、祝宴の用意を！」

と命じた。

（意気高揚しておいでだ！）

勘助には、全身に若々しさを漲らせた、こういう青年武将武田晴信の姿が好もしく、つい今しがた感じていた、晴信の好色への不満も消し飛んでしまうのであった。

「戦勝祝賀の宴を！」

という晴信の下知が伝えられるや、陽に灼け、戦塵にまみれ、疲労の色の濃い兵士たちの顔に、たちまち生気がよみがえった。

「酒だ、酒が飲めるぞ！」

「有難い、飲みはぐるな」

「飲みはぐれたら、よその隊へまぎれ込むわい」

明るい笑い声がどっとあがり、戦火で荒廃した城内も、息を吹き返した感があった。

部将の指示によって、物見や巡察、城門守備等の勤務につく者をのぞき、各部隊の将兵は、荒蓙をのべた広場のそこかしこに、思い思いに輪をつくって腰をおろすと、急遽、任命された係の者が、篝火の用意をする一方、部隊ごとにスルメと柄杓のついた酒甕を配った。

戦勝の祝宴は、いつ昏れるともない青い夕景の中に始められ、やがて、そこかしこから談笑が湧きだし、心地よげな歌声すら聞かれだした。

勘助は、各部将らとともに晴信の身辺にあったが、飯富兵部が一差し舞い出したのをしおに座を立った。いつしか日も暮れ落ち、焚かれた篝火の明りに、桜の青葉が美しく浮き出されていた。

勘助は、青い闇の奥の方へ目をやりながら、酒甕を補充して廻っている兵の一人に聞いた。

「おい、信濃先方衆は、どのあたりで飲んでいるか？」

「信濃先方衆……あ、真田の連中なら、あの石垣の角あたりに、ひと塊りになって飲んでいるようでした」

兵は広場の隅の方を指さした。

「あい分かった」

勘助は、いくどか人の体に蹴躓きながら、進んだ。躓かれた奴は、酔い痴れた怒声を飛ばしかけるが、勘助と知ると慌てて声をのんだ。

案の定、勘助の探す相手は、兵らの輪の中にいた。

「真田殿！」

「おお、山本殿、来て下すったか！」

真田幸隆は、すっくと立ち上り、勘助の方へ太い腕を差しのべた。人の輪が割れ、勘助のため道を明けた。

「あの折りは、お世話になり申した」

「なんの、なんの……それにしても、真田殿ともあろうお人が、かような広場の隅にあられるとは！」

「なあに、男子三日見ざれば刮目して待つべしでござる。そのうち、そのうちに……」

幸隆は、勘助の手を引いて。人の輪の中に誘い入れ、杯を摑ませて酒を注ぎながら、

「おい、貴様らも御挨拶を申せ」

「はいっ」

異口同音に答えたのは、例の四阿山花童子の籠り屋に、修験者となって潜んでいた鷲

尾左近、佐久の津金寺で、納所坊主に化身していた望月源左衛門などの真田残党だった。

彼らは、こもごもに過日の礼をのべた後に、言い合わせたように、

「丈太郎さんの姿が見当たりませぬな」

「小源太殿はいかがなされましたか？」

などと尋ね、

「小源太殿はいい喉をしてなすった」

と言って懐かしみ、中には突然声を張って、

歌へや歌へ泡沫の
あはれ昔の恋しさを
今も遊女の舟遊び……

などと、小源太から教わったという、例の「室津」の歌をうたい出す者があるかと思うと、歌に浮かれて踊りだす剽軽者、他の部隊から知人をたずね来る者もあって、篝火は人影を浮き出し、ゆらめかして、勝利の祝宴は広場に異様な熱気をかもしだしていた。

「真田殿は、よき御家来衆をお持ちである」

勘助は、にこやかに杯を傾ける幸隆に、心からなる感懐をのべた。今、声高に談笑し、歌ったり踊っている真田衆が、ひとたび戦場に赴くや、幸隆の命令一下、たちまち剽悍無比の強兵に一変するのである。緩める時は完全に緩める、真田幸隆の統率力は見事な

ものと勘助は見届けた思いであった。

と、ふいに誰かが叫んだ。

「や、丈太郎さんだ！」

「丈太さん、ここだ、こちらだ！」

篝火の火明りの中に、丈太郎の若々しい姿が浮き出た。武装した丈太郎は、別人のように凛々しいのであった。

「あ、やはりこちらでしたか、御師匠様」

丈太郎は、人の体に躓かぬよう、注意しいしい勘助の方へ近づいた。

信濃佐久平の夜は、更けるにつれて大気は澄み、酒宴のどよめきも高くなるのである。

女人多佳女

山本勘助と丈太郎が、信濃佐久、内山城陥落の戦勝祝宴に出会わしていた頃、女忍びの多佳女は、相模路を流れ歩いていた。

多佳女は、浄古寺村から秩父往還をたどって武蔵国へと出たのだが、顔見知りの筈の関所役人ですら、彼女と気づかなかったというから、その変装はよほど巧みなものであったに違いない。

彼女は慎重であった。駿河路から小田原に入る順路を避け、秩父盆地から武蔵野へ出、小田原の青年武将北条氏康の八千余兵が、おのれに十倍する関東管領上杉憲政率いる八万五千弱もの大兵団を撃破した「河越夜戦」の跡を、つぶさに見聞した後、おもむろに東海道を上った。

河越城下での多佳女は、秩父の山奥訛りを話す熊の胆売りの行商姿だったが、相州酒匂川を渡った時には、言葉も丹沢山塊の奥地のものに完全に変わっていた。

それでも彼女は、しばしば身の危険に遭遇した。酒匂川畔りの茶店で、茶をすすりながら、氏康の評判をいささかしつこく老婆に尋ねたのが、どうやら川番所の役人に怪しまれたようだ。

（迂闊だった。まさか障子の陰に、地役人が休息していようとは思わなかった……）

多佳女は、後をつけて来る役人に困惑し、どう仕末するか胸に思案した。ただ一点活路があるとすれば、その場で役人が不審をただささなかったことである。

（止むを得ぬ）

即座に決断した彼女は、葦の群生する川原に誘い込むと同時に、なびくと見せて相手の刀を奪いとり、一撃のもとに刺殺した。

「あ」

男は、眼をいっぱいに見開き、彼女の日焼けしてこそおれ、整った面立ちを凝視し、

おのれがこうした結果になったことが、どうしても信ぜられぬといった表情で絶命した。

葦むらにはヨシキリが鳴き、流れには白銀色の巨大な積乱雲がゆったりと影を映していた。

（あたしなどと、関わりをもったのが、あなたの不運というものよ）

心中に言い捨てた彼女は、小用でも済ましたように、なに食わぬ顔でその場を離れて街道に出た。

やがて、小田原城下に入ると、漲る活気にはじき飛ばされんばかりであった。わずか八千余兵で、八万五千もの大軍を撃破した「河越夜戦」の大勝で、北条家中の者たちは、意気軒昂として当たるべからざる勢いだ。城下のあらゆる店家の亭主も客も、声高に談笑して潑剌としているのである。

（話には聞いていたが……）

彼女は、小田原城の規模の巨大さに、ただただ息をのむ思いであった。濠をめぐらせただけの甲府の武田氏の居城――躑躅ヶ崎館とは雲泥の違いを思い知らされたことである。

事実、小田原城は、東西五十町（約五・五キロ）、南北七十町（約七・六キロ）、周囲五里（約二〇キロ）という城下町を城郭内におさめ、東海道筋に並びなき繁栄を誇っているのだ。

「町の小路は数歩の間、地に一塵なし。南南は海なり。海水は小田原の麓をめぐらす。太守の墨は、喬木森々として高館巨麗なり……」

見聞記のしるす城下繁栄の状は、早雲・氏綱・氏康の三代にわたる北条氏の治政の、いかに安定しているかを無言のうちに物語っているといってよいのである。

（攻勢の時なら、濠一重の躑躅ヶ崎の館でもよいかも知れぬ。しかし、ひとたび守勢にまわったなら、果たして、あれでよろしいだろうか？）

多佳女は、甲府へ戻ったなら、一度、この点を山本勘助に質してみようと思った。そしてまた、巷の誰に聞いても、

「北条家の侍たちは、節用の清きを望み、道理を重んじるさまは他家に類例を見ぬほどである」

というのだ。

（その点、晴信公が、北信濃の豪族禰津元直の姫御や、諏訪姫を強引に側室になされるなどは、果たして家中の侍たちに、節用の清きを求めることが出来るであろうか。もし武田家が北条家の繁栄を超えんと欲するならば、このあたりのことも、勘助殿の存念をシカと聞いておく必要がありそうだ。もっとも、わたしのような立場の者が、かような心配をするのは余計なことと、一笑に付されるやも知れないが……）

多佳女は寂しく笑った。他郷を独り旅していると、甲斐国のあれこれが、おのれにも

意外なほど鮮明に見えてくるのである。

（早く浄古寺へ帰って、山鳩の声でも聞くとするか。わたしも年齢のせいか、そろそろ山里の穏やかな暮らしが似合うようになったようだ）

とにかく、小田原城下の繁栄のさまは、目を見張るばかりであった。東海道を上下する旅人で通りは雑踏をきわめ、物売りや旅宿の呼び声は甲高く飛び交い、いちだんと繁昌の感を深くするのである。

多佳女が、富士浅間社の御札売りに声をかけられたのは、城下はずれの一膳飯屋を出て間もなくだ。木鼠のような顔をしたそ奴は、先程の飯屋の小暗い土間の隅から、からみつくような眇でこちらを見ていたが、彼女が店を出ると、つづいて跟いて来たと思うと、急に肩を並べて、

「おい、お前さん」

と囁くほどの声で言った。

「酒匂川の川原で、番所の役人を殺ったのは、お前さんだね」

「えっ、何ですって？」

多佳女は、さあらぬ態で、

「何を仰ることやら、あたしには、さっぱり分かりませんわ。そんな言いがかりをつけて、どうしようっていうのですか？」

「俺は、お前さんが、川役人と一緒のところを、この眼でちゃんと見てるんだ」

「人違いでございましょう」

「人違いか……なるほど、それならそれでいいさ。それじゃ、一声、大声を立ててみるとするか。この女は、酒匂川の番所役人を誑らし込んで、ぶすりと殺った曲者だってね。小田原の御家中じゃ、犯人探しに血眼になっていなさる最中だ。その辻、その横町から、面白いほど役人が駈けつけて来るぜ」

「分かったわ。では、どうすればよいのよ」

「そうそう、穏しく言うことを聞けば、俺だって野暮なことはしたかねえさ。このまま一緒に来て貰おうか」

御札売りは、笑顔で言った。人が見れば、行商の者同士が、仲良く雑談しながら歩いていると受けとるに違いない。

賑わう町通りを抜けたそ奴は、やがて勝手知ったる態度で、無人の観音堂らしい境内へ入り込んでいく。青味をおびた夕靄がうっすらと湧き出した時刻で、人影も絶えているのである。

（どうやら拙いことになりそうだわ）

多佳女が立ちどまり、背中の荷物をゆすり上げようとした途端、御札売りはさっと身構えて、

「何をしようってんだ?!」
と鋭く叫んだ。
「つまらぬことを考えるな。ちょっとの間、俺の言うままになっていさえすれば、これから先も、無事に旅がつづけられるというものよ」
「分かったわ。もう逃げないわ。お前の言うようにします」
「それが利巧というものよ」
多佳女が、抵抗の態度を捨てたので、そ奴もつられて、つい、ふっと気をゆるめた。
瞬間、彼女の唇から、細い銀線がキラリと宙を走った。
「あっ、や、やりやがったな!」
両眼を含み針で刺されたそ奴は、厄除けの御札を撒き散らし、悲鳴を上げながら地面を転げまわった。
「変な気を起した罰よ」
彼女は、冷然と呟いて、その場を離れた。
同じ頃——やはり山本勘助から、鉄砲調達の特命をうけた喜多嶋小源太は、泉州堺の町で苦闘していた。
当時の堺については、宣教師ガスパル・ビレラの記録が、よく全容をつたえているようだ。

「日本全国、当堺の町より安全なる所なく、他の諸国に於て動乱するも、その町にはかつて無く、敗者も勝者も、この町に来住すれば皆平和に生活し、諸人相和し、他人に害を加ふる者なし。市街に於ては、かつて紛擾起ることなく、敵味方の差別なく、皆大なる愛情と礼儀を以て応待せり。市街にはことごとく門、木戸ありて番人を附し、紛擾あれば直にこれを閉づることも一の理由なるべし。紛擾を起すときは、犯人その他ことごとく捕えて処罰す……町は甚だ堅固にして、西方は海を以て、また他の側は深き堀を以て囲まれ、常に水充満せり……」
更にビレラは、印度駐在の修道士たちへの書状に、
「堺の町は甚だ広大にして、大なる商人多数あり。この町はベニス市の如く執政官により治めらる……この町は前にのべた如く、甚だ大きく、かつ富み、住民は善く事理を解せり……この町は住民多数にして富み、かつ好地位を占有せるため、常に平和にして侵すべからず。我等この地に留るに至らば、戦争のときは此地に退き、その止むに至りて此処より出づることを得べければなり」
とも書き送っている。
右の「ベニス市の如き執政官」とは、堺の町の会合衆を指し、堺の町は豪商日比屋了慶、天王寺屋宗達はじめ能登屋、臙脂屋、油屋等によって自治された誇り高き自由都市なのであった。

今、会合衆こと町の顔役天王寺屋宗達の前に、喜多嶋小源太は神妙にかしこまっていた。堺の町に入ったものの、誰に鉄砲調達の話を持ち込むのが安全か、小源太にもなかなか判断がつかなかった。天王寺屋宗達は、畿内の一大権勢家三好長慶、実休兄弟とは茶の湯を通じて交流が深い。もし鉄砲調達の件が洩れ聞かれでもしたら、小源太など三好氏の手の者によって、たちまち抹殺されてしまうに違いないからである。

（どうする、どうする……）

小源太は、かつて天王寺屋の内所に働いていた頃の仲間のもとに転がり込み、なんとか鉄砲調達のきっかけを摑もうとしている中、天王寺屋の知るところとなり、ついに宗達の前に引き出されたのだ。

小源太は、捕えられた時、そう驚きもせずに、当然といった面持で、

「やはりな」

と独りごちたのは、彼自身、かつてこの町に住み、不審の者は直ちに通報される仕組みになっていると知っているからである。

大小路北町にある天王寺屋の広壮な屋敷、その数寄を凝らした書院の一室で、主人の宗達はゆったりとした物言いで問う。

「折角、わが内所での働き、武家出とは思われぬほど熟練の手並みを見せてくれ、これは将来が楽しみと思うていたに、突然、姿を消してしもうたのは残念であった」

「申しわけないと思うております」

「そして、二、三年ほども消息を断った揚句、ふいに姿をあらわした時には、またまた侍姿に逆戻り……しかも、まっすぐ当家を訪ねて来るならまだしも、昔仲間のもとに身を潜めているとは、まことにもって解せぬ話である」

「面目のうて、お店の敷居が高うございました」

「最初から、お前さんに面目などのあろう筈があるまい」

「……！」

しゅんとなった小源太に、宗達は語気鋭く、追い討ちをかけるように言った。

「何を企んでいる?!」

「え?」

「何を企んでいる、と申したのです。お前さん、まさか臙脂屋さんの娘御と繕りを戻さんがため、わざわざ堺の町に戻って来たわけではありますまい」

宗達の言葉遣いは穏やかだが、眼光は厳しく鋭い。小源太の胸の奥まで見透かすかのようだ。

「お言葉を返すようですが、これだけは、はっきりさせておきます」

小源太は、態度を改め、きっぱりとした語気で言った。

「私は、最初から、臙脂屋さんの瑠璃どのにはまったく関心がありませんでした。とこ

ろが、こちら様の取引上の御用で臙脂屋さんに伺った際、たまたま居合わせなされた瑠璃どのから、好意を寄せて戴くようになりました。しかし私は、あなた様のお陰で、性の合わぬお雇い牢人から、内所の仕事をさせて戴くようになり、交易の面白さを覚えることが出来ました。その矢先に起きた瑠璃どののお情け、こう申しては何ですが、困ったことになったと思いはするものの、下手をすると、こなた様の御迷惑になると思い……」

「堺の町から行方をくらました……」

「はい、それが、その時、私の出来た最良の思案でした。折角、お目をかけて下された、あなた様に申しわけないとは思いながら、当てもない旅に出ました」

「臙脂屋といえば、堺でも十指には入る大店であり、瑠璃どのは美しい娘御だ、並みの者なら有頂天にもなるところである。それを袖にするなど、わたしの睨んだ眼に狂いはなかったと、実は褒めたいほどに思いもし、惜しい若者を失うたとも思うていた。そのお前さんが舞い戻って来、この天王寺屋を訪ねても来ない。わたしが、何を企んでいるというのは、そのことだ」

宗達は、言葉を切って、凝と小源太をみつめる。

そもそも、この天王寺屋宗達は、商人とはいえ、すでに述べたごとく、三好長慶はじめ三好方の武将、たとえば三好下野守政康、同山城守康長、十川三河入道、瓦林中務などとの交友厚く、同じ大小路町内の豪商今井宗久、高石屋卜斎、および油屋紹可、常祐、常悦、紹佐、常琢などの、いわゆる「油屋一族」をも、その傘下に擁するほどの人物だ。

宗達の前の小源太など、巷のちんぴらに等しいのである。その宗達の貫禄におされたように、

「実は……」

と小源太は、駿府で川人足の仕事で食いつないでいた時、ふとしたことから今川家の家老庵原阿波守忠胤の食客山本勘助に拾われ、さらに勘助ともども甲斐国守護武田晴信に仕える身になった、わが身の変転を物語った。

「甲斐の武田晴信といえば、実の父親を駿河に追放したという親不幸者ですね」

「それは」

と小源太が、信虎追放にいたる実情を話すと、宗達は慎重な面持で耳を傾けていたが、ふいに語気鋭く、

「で、今は武田家に仕えるお前さんが、いかな用をもって堺へ来なされたというのか」

「鉄砲買付けのためです」

「なに、鉄砲?!」

宗達は、小源太の口から「鉄砲」という言葉が出たのが、よほど意外であったらしく、まじまじと小源太の顔を見守りながら、しばし思案する風であったが、小源太が、

「鉄砲買付けの用命があった時、直ぐにこなた様のお顔が思い出されたのですが、先に不義理を働いておりますので、ついつい……」

「もうその事は分かりました」

宗達は、切り捨てるように言い、

「晴信公とやら、若いのに、しぶとくて面白そうだ。鉄砲どれほど欲しいか言うてみなされ」

凄味のある商人の眼になっていた。

宗達らは、時の権力者を万代不動のものとは考えていない。極端にいうならば、堺の町を保護し、利してくれる武将ならば誰でもよいのである。それは今親交している三好一族の場合とて同様だ。堺の会合衆は、しばしば茶会を催しては、時勢の流れを的確に読んでは行動した。

小源太の話から、若い甲斐国守護武田晴信に興味を抱いた天王寺屋宗達は、

（鉄砲の件、話に乗って面白いかも知れぬ）

と心を動かしたのである。

火の章

運命の子

山本勘助と丈太郎が、信濃南佐久郡の内山城で戦勝祝いをした年の暮、上原城の諏訪姫に男の子が無事誕生した。

このことを『甲陽軍鑑』品十六は、

「信玄公の四番目の御子伊奈四郎の御事也。信州諏訪頼茂（頼重）の跡目なるゆえに、武田相伝の〝信〟の字を去り給う」

と記している。

右の『軍鑑』の記す「伊奈四郎」こそ、のちの「武田勝頼」である。紛れもない晴信の子でありながら、武田家相伝の「信」の字は与えられず、諏訪氏を表徴する「伊奈四郎」と呼ばれるなど、すでにして波瀾の運命を暗示していたといってよい。

この運命の幼児が、「武田菱」の家紋縫いとりのある産衣に包まれていたか、それとも諏訪家の「鶴丸」の家紋縫いとりだったかは、いかなる史書も記してはいない。が、

とにかく晴信は、諏訪姫の男子出生を心から喜んでいる。勘助が祝辞をのべると、
「姫が男子を産んでくれるとは……これで諏訪の領民も、わが甲斐の領民と一体となる筈じゃ。これも勘助、そなたの手柄ぞ」
とまで言い、満面に笑みを浮かべ、自信に満ちあふれていた。
（諏訪・甲斐領民の一体化……）
確かに勘助もそれを言い、諏訪姫の側室を主張し、実現した。が、今では、
（果たして、諏訪の領民は、晴信公が思うほど、諏訪姫が武田の血をうけた男子の出生を、心から喜んでいるであろうか……？）
という疑心にとらわれているのである。
甲斐の武田氏が、清和源氏の名門をいうならば、諏訪氏は、神代以来の信濃の名族の誇りがあり、その領民とのつながりは、同じ神の裔という一体感が強く、その結束の堅さは甲斐の国には見られぬものであったのだ。
晴信は、勘助の胸中の思いも知らず、
「勘助、四郎に会うて来たか？」
「いえ、まだでございます」
「何だ、まだか、いつものそなたらしくないな」
「お目にかかるのが怖いのです」

「怖い？」
晴信は、訝しげに勘助を見返って、
「なにが怖いと申すのだ」
「分かりませぬ。分かりませぬが、なんとなく怖いのです」
「おかしな奴だ、嬰児が怖いなどと……」
「なにしろ、拙者のこの顔ですから、万一にも、四郎さまに引き付けでも起されでもしたら、諏訪御料人に申しわけがございませぬ」
「ははは、それで怖いのか……なるほど、引き付けを起しかねないな」
晴信は、勘助の「怖い」という言葉の意味を納得したか、声を立てて笑ったが、ふっと生真面目な表情になって、
「勘助、そなたは今、諏訪姫を御料人と言うたな」
「はい」
「諏訪御料人か……うむ、姫よりも、彼女にはこの方が似つかわしいかも知れぬな」
「はい、勘助はそう思うております」
勘助は、静かに答えた。「御料人」とは貴人の子女の意であり、諏訪姫こそこの呼び名にふさわしい、と彼は心底から思うようになっていたのである。
「勘助、では、その諏訪御料人と四郎母子を見舞うて参れ」

「はい、これより参りまする」
「こんどは素直だな」
「四郎さまのお目には、この顔映らぬように致しまする」
「勝手にせい」
晴信は、「早(は)よ行けい」という風に、笑いながら手をふった。
勘助は、晴信の側を離れ、諏訪御料人母子のために建てられた、新館の方へ不自由な足を引きずりながら歩き出した。
宙天に風花がちらほらと舞い出して、諏訪御料人の住まう新館の方から、嬰児の力強い泣き声がかすかに聞かれた。
「……！」
勘助は一瞬、立ち停まって、泣き声に耳を傾ける風情であったが、ふたたび一歩一歩、足元をたしかめるようにして新館に向かった。そして新館の玄関に立って、顔馴染みの侍女頭(じじょがしら)に、
「山本勘助、御祝いに参じましたが、万が一にも風邪などお引かせしては恐れ多いので、この場にて失礼したと、後刻にてもよろしいから、御料人様に申し上げて下され」
「あ、ちょっとお待ちなされたい。このままお帰し致しては、あたしがお叱りを受けまする」

侍女頭は、慌てて勘助を制し、奥の方へと身をひるがえしたが、待つほどもなく、直ぐ立ち戻って来た。
「やはり、遠慮のう通り、若君のお顔を見て帰るようにとの仰せでございました」
「ハテ……」
勘助は、一瞬、考える眼差しをしたが、「では」と履物を脱ぎ、侍女頭の後について廊下を奥へ進んだ。
「山本様、参じられてございます」
「お通し申せ」
例の透き通るような声がした。
襖を開けると、暖い室内に乳の匂いがして、純白の産衣の嬰児を抱いた諏訪御料人が坐していた。勘助は平伏して、
「こたびは……」
「勘助、挨拶は内に入って……四郎が風邪を引きまする」
「あ……！」
勘助は、襖を閉めてから改めて、
「こたびは、若君の御誕生、まことに祝着至極(しゅうちゃくしごく)に存知まする」
「勘助、考え抜いてきた挨拶がそれかえ」

「え?!」

一瞬、虚をつかれた思いの勘助の眼が、彼女の寂しげな、謎のような表情をとらえたと思った時には、もう穏やかな、いつもの諏訪御料人の顔に戻っていた。

「勘助、この子は殿に似ていますか、それともあたしに似ておりまするか?」

「むろん、あなた様に、目鼻立ちがよう似ておられまする」

「そのようですね。殿もそう仰せでした」

勘助は、「すこやかなる御成長を、心より念じておりまする」という言葉をのべ、静かに廊下へ退いた。「有り来たりの言葉」という彼女の冷笑を聞いたような気がして、勘助は冷汗を掻く思いがした。勘助が諏訪御料人に会って感じたのは、神の裔たる身が、仇敵の子を産んだという彼女の自責の思いと、明らかに自分の血を分けた男子を産んだという誇りのからみ合った複雑な感情の揺れうごきであった。

(わしが、お目にかかるのが怖いと言うたのは、このようなことがあるためなのだ。もしかしたら、わしは、とんでもない道を、強引に彼女に歩ませてしもうたのかも知れぬ……)

勘助は、侍女頭の挨拶を背に聞き、戸外に出ると空を仰いだ。

こうした山本勘助の、諏訪御料人に対する複雑な感懐にかかわりなく、姫に男子誕生、という報が諸方に伝わるや、各部将はもとより庄屋など領民のおもだった者たちも、祝

辞をのべにぞくぞくと上原城に詰めかけて来た。風花が本格的な雪に変わっても、人の影は絶えないのである。

勘助は、晴信には会わず、ひどく疲れたような表情と足どりで望楼に出た。冬の日暮れは早い。つい先程まで、城下の家々もくっきりと望まれたのに、ひとたび日が陰ったと思うと、たちまち夜に変わった。眼下はるかに望む諏訪湖も、もう夕闇を吸い寄せたように黒々と静まり、その黒い湖面に細雪が音もなく降りそそぐのを、勘助は時を忘れたように黙って眺めていた。

新年を勘助は甲府で迎えた。恒例の年賀の日には、板垣信方、飯富兵部、甘利備前らも躑躅ヶ崎館に出仕し、いずれも久しぶりに顔合わせをした。

晴信も暮に諏訪御料人の出産もあって、終始、頬を綻ばせて好機嫌であったが、勘助には、声を落として、

「三条の顔が険しい」

と洩らしている。事実、正室三条の方は、例の刺客事件以来、勘助を露骨に嫌悪し、

「あの者は、諏訪の廻し者じゃ」

と言い触らしているとのことであった。

晴信も、それは耳にしていて、

「困ったことよ。まこと女の妬心は恐ろしい。勘助、心を致せ」

「心を致さねばならぬのは、殿でございます」
「ははは、そうムクレるな」
寛闊に笑い、晴信の女人遍歴は改まりそうにないと勘助は見た。
珍しく合戦のない、閑雅な正月が過ぎた。二月も末近くなって、寒冷な甲斐国にも春の気配が感じられるようになった一日、山本勘助は塩屋宗右衛門から、「春ヲ迎エル小宴」というのに誘われ、しばし喜多嶋小源太の噂などに時を消した。宗右衛門は、室津の舟歌を聴いて以来、小源太が気に入っているようであった。
「ねえ、山本様、小源太さんは、今頃どうしてなさいますかなあ」
と、この場にいない小源太の身を案じ、果ては酔余に、小膝で拍子をとりながら、
歌へや歌へ泡沫の
あはれ昔の恋しさを
今も遊女の舟遊び……
と歌いだすのであった。よほど若い時の思い出が濃密なのであろう。
その宗右衛門邸から、自宅に戻って間もなくして、勘助の屋敷の門を忍びやかに叩く者があった。
にわかに、屋敷内の空気が慌ただしく動いた。夜の訪問者は、意外にも小田原へ潜行している筈の多佳女だったのである。

「何っ、多佳女が参ったと?」
丈太郎から、それと告げられた勘助は、咄嗟に異変を感じて、自ら玄関へ急ぎ出ている。予感は的中し、丈太郎の掲げる手燭の明りの輪に浮かんだ彼女は、見るかげもなく憔悴し、まっ青な顔をしていた。しかも意外だったのは、彼女の体を支えるようにして、勘助や丈太郎の見知らぬ娘が寄りそっていたことであった。
とにかく、多佳女が傷ついていると見た勘助は、家人を督励して寝具をのべさせ、彼女を横たえさせた。
「申しわけありませぬ」
「話は後でよろし。今はただ、何も考えずに体を休められよ」
勘助は、多佳女ほどの女が、これほどに傷つくには、通常の者には想像もつかぬ死闘があったものと読んでいた。
多佳女は、安全圏に入った安堵感からか、ほとんど昏睡状態のまま三、四日が過ぎた。その間、彼女に付き添って来た娘は、年は十七歳で、名はしずか。養母とともに乾物の行商に相模路を流れ歩いていたが、養母が病に斃れたため、途方に暮れていたところを多佳女に助けられたという。
面白いのは、娘は名を名乗った時、
「義経の静御前のしずかです」

と、わざわざ断わったことだ。

（面白い娘だ）

と勘助は微笑し、丈大郎は、いかにも感じ入った顔で、

「静御前のしずかとは、いかにもしずかさんにふさわしい名だ」

と言ったため、ふっと娘は含羞だ。

多佳女にすれば、養母に死別し、孤独の身となったしずかを道づれにしたのは、人の目をくらますに好都合と読んでの行動であったに違いない。が、透破――忍びの集団「風魔党」を擁する、北条氏の厳しい監視網を無事に通過することは、やはりかなわなんだ。

スバルの残映

古来、相州（神奈川県）大磯附近の海浜は、小余綾の磯というが、「小余綾」は「こよろぎ」また「こゆるぎ」とも読まれ、「磯」にかかって歌枕ともなる。

多佳女としずかが、そのこゆるぎの浜ちかい漁村の家に立ち寄り、「熊の胆」の薬効を説きながらも、しだいに世間話に移っていた。すなわち、先ごろの「河越夜戦」で、一躍盛名を馳せた若き小田原城主北条氏康の評価から、それとなく城中の評判よろしき

人物や剛勇の士、果ては北条氏治政への感想など、ついつい細やかな事にまで、立ち入って質ねたのが不審をよんだようだ。

多佳女が老漁師夫婦に、無駄話に時をつかったお礼にと、商売物の「熊の胆」を一包み与えて村を離れて間もなく、急ぎ追跡して来たらしい、二人の屈強な壮漢に呼び止められた。

「なんぞ御用でしょうか？」

と多佳女が問うと、

「そなた、いずれの忍びじゃ」

「えっ、何と仰しゃられました？」

「とぼけても無駄だ。その身のこなしは、忍びのものだ。番所まで一緒に来い」

「あっ、御無体をなされるな」

男の一人が、多佳女の腕を摑もうとした瞬間、くるりと反転した彼女の口元から、キラリと銀線が走った。

「わあっ、や、やりおったな」

絶叫した男の両眼から鮮血が流れた。が、次なる長身の男は、機敏にも咄嗟に左腕の着物の袖で含み針を防ぐと同時に、右手で抜き放った白刃で多佳女の肩を薙いだ。

「あ」

避ける暇もない転瞬の出来事で、彼女の体はゆらと前にゆれたと見るや、その右掌から投じられた手裏剣が男の喉元を縫っていた。

「げえっ」

絶叫した男は、長身をくの字に折って跪いたが、そのまま前のめりに顔を地面に伏せた。

「お多佳さん……」

思わぬ惨劇に、しずかはしばし声も出ぬようであったが、容易ならぬ事態にはっとわれに返ると、男たちの遺体を路傍の草むらの中に隠す一方、多佳女の体を支えてその場を離れたのは、なかなか年に似合わぬ心きいた致し方であった。

しかも、しずかは、いかなる思案によったか、つい先程、「熊の胆」を与えた老漁師の家に戻ったのだ。驚く老夫婦に、多佳女は右肩を白刃で一颯された苦痛をこらえ、

「酒匂川河口の向こう岸あたりまで、舟で運んで欲しい」

と願った。

「さ、それは……」

老漁師は、事情は分からぬながら、多佳女の深手を負うた姿にただならぬものを覚えたものであろう、眉根を寄せて返辞をためらった。が、多佳女が多額の礼金を見せると、女房の目くばせにこたえて、

「その体では、街道を歩けまい。分かった、舟で運んで進ぜよう」

と、直ちに舟の用意をしてくれた。

舟の胴間に身を横たえ、小余綾の浜から脱出、危うく一命を繋いだとは、三日目ようやく昏睡からさめた多佳女の述懐であった。

勘助から報告をうけた晴信は、

「労ってつかわせ」

と言い、特に従軍医師の瀬川妙庵を差し向けてくれたが、その妙庵ですら、彼女の創ぐちを一瞥するや、呆れたように、

「これで、よくぞ小田原から此処まで、生きて還れたものよ」

と唸ったものである。

確かに、瀬川妙庵が驚嘆したように、世の常ならぬ強靱なる精神力と肉体と、そして今度の場合、しずかという介護人が存在したことが幸いしたというべきであろう。

戦陣に馴れた妙庵の施術と、多佳女の生命力が、驚くほどの速度で彼女を快方へ向かわせた。

日も、一雨ごとに春色をおび、庭前の梅花の蕾も綻びを見せだしているのである。そして薬場の匂いと、多佳女としずか女二人の醸す体臭が、勘助の屋敷内の空気を華やいだものとするのであった。

ある日、丈太郎が不思議そうに、
「お師匠様、奇妙ですね」
「何が奇妙なのだ」
「あの二人、旅先の小田原で初めて知り合ったのでしょう。それがまるで本当の母子のようなので、不思議でならないのです」
「なるほど、面白いところに目をつけたな。丈太郎、そなたも随分と大人になったものよ」
勘助は、初めて見るような目差しで、気づかぬ間にすっかりおとなびた丈太郎の顔をつくづくと見守った。確かに、しずかは、実の母親に対するように、献身的に多佳女を看病しており、医師瀬川妙庵などは、
「患者が助かったのは、あの娘の看病のせいである」
と言っているほどである。
やがて——多佳女は、障子を明け放って縁先に座し、春の気配を賞でるまでになった。それでこれまで、女人の身への遠慮から部屋に近づかなかった勘助も、多佳女に言葉をかけるようになった。
「だいぶ、気分がよろしいようじゃな」
「すっかり御世話様になって、申しわけありませぬ」

「つまらぬ気遣いは無用、男世帯ゆえ、いろいろと不自由な点もあろうが、欲しい物があったら、何なりと申し出るがよろしい。晴信公も案じておいでだ。報告のことなど心配せずと、まずは体力を回復することである。何ぞ食したいものがあったら、遠慮せずに言うてみよ」
「はい、では、お言葉に甘えさせて頂いてよろしゅうございますか」
「申してみよ」
「じつは、蕎麦掻きが食べとうなりました」
「何、ソバガキ？」
「はい」
多佳女は、羞いを見せて、
「わたし自身にも理由が分かりませぬが、病が癒えだしたら、無精に蕎麦掻きが食べとうなりまして、夢にまで見るようでございます。お笑いになって下さいましな」
「ふうむ、ソ、バ、ガ、キをな……」
意外な多佳女の申し出に、さすがの勘助も面喰らったが、
「蕎麦掻きなど、たやすい御用だ。丈太郎、蕎麦粉を購めてくるよう、台所の婆さんに頼んでくるがよい。そして湯を沸かし……」
と言いかけると、

「あたしが……」

と、しずかが座を立った。

その時、台所から出て来た、おしげという名の通いの婆さんが、

「蕎麦粉なら、わざわざ買いに行かずとも、先日、購めおいた旨い、挽き立ての粉がござるわ。この粉ならば、熱い湯を注いで、手早く箸で掻きますと、もうと蕎麦の香りが匂いたちまするぞ」

「ははは、お婆の話を聞いたら、わしまで食したくなったぞ」

「どうぞ、如何です、山本様も御一緒に？」

多佳女の言葉に、勘助や丈太郎も縁側に腰を下した時には、しずかはひっそりと台所へ姿を消していた。

思いがけず、明るい春先の光の中で、蕎麦掻きを賞味することとなった。多佳女の気分がよろしいので、誰もの表情も明るいのである。自然、話題も弾んで、お婆が、一同の椀に蕎麦掻きを分けながら、

「信濃の国では〝すばる、まん時、粉八合〟というてな、二百十日前後の夜明け時、ソバの種を蒔くと、種一升で粉八合が採れると言うとるそうじゃよ」

と言った。

「すばる」は「昴星」。「昴星をすばる星というは統星なり。一所に統あつまりたる故にかく云ふなり」と言われ、清少納言も『枕草子』に、「星は、すばる、ひこぼし、明星、ゆうつづ……」と書いている。

「この甲斐や信濃では」

とお婆の話はつづく。

「だからすばる星を一升星と言いますのさ」

「さすがはお婆、なかなかに物識りだね」

丈太郎が、お世辞でなく、感嘆の声を放つと、それまで、黙って蕎麦掻きを食していたしずかが、どこか遠くを望む面持で、

「あたし、それと似たようなことわざを、むかし、聞いたような気がします。何と申しましたかしら、つい喉元まで……」

と言い、しばし考える風情だったが、

「そうそう……スマルまんろく粉八合……それから何と申したかしら。あ、思い出しましたわ。頭巾落としの粉一升……スマルまんろく粉八合、頭巾落としの粉一升でしたわ。あたし意味は分かりませぬが、お婆どのと似ておりましょう？」

「スマルはすばるだ。すばる星が頭の真上に来た時に蒔いたソバは、種一升で粉八合が採れるが、頭巾落としの時刻に蒔けば、粉一升が採れると言う。つまりすばるが真上に過ぎて、仰ぐと頭巾が落ちるほどの時に種子を蒔けと言うとるのだ」

勘助は、「頭巾落とし」の解説をしてから、さりげない物言いで、
「しずか、今のことわざ、いずれにて覚えたのか？」
「さあ……どこで聞き覚えましたやら、ただ唄のように口誦さんでおりましたことで……もっとも、十二、三歳頃までは、備前（岡山県）の国の六条院という所におりましたゆえ、その頃に耳にしたのではありますまいか」
「ふうむ、備前国六条院の里の生まれであったか……養母は小田原路で亡くなったというが、実母は如何なされた？」
「はい、父は武士でしたが討死し、その後、ずっと独り身でいた母が、旅の御牢人に騙され、御牢人が立ち去った後に、あたしが生まれたということでした。しかし、母がその御牢人をいかに愛していたかは、義経を慕う静御前になぞらえて、娘のあたしにしずかと名づけたことでも察しられましょう」
しずかは微に笑って、
「しかも、あたしが、いかに父なる御牢人の名を質しても、御出世の妨げになっては申しわけないというて、決して明かそうとしませんでした。まこと馬鹿な母でございます。そして明かさぬままに他界したため、あたしは養母に引き取られた果て、諸国を行商し、流浪する身となったわけでございます」
「何たることぞ！」

なぜか勘助は、一瞬激したかに見うけられたが、すぐ冷静ないつもの彼に戻り、
「しずかは、若い身で苦労したのだね。多佳女どのの命の恩人でもあるし、向後はこの甲斐の国にて穏やかに暮らすがよい」
「山本様、わたしも、そう考えております。体が元のように回復しましたら、浄古寺村の御支配屋敷へ伴い帰ろうか、それとも御当家にてお預り願おうかなどと、いろいろ思いをめぐらしている次第です」
多佳女は、言葉静かに答えた。
三月に入って、一夜、音もなく細雨が濡れ渡ったと思ったら、春遅い甲府盆地も、さくら色に煙る季節に一変した。多佳女がしずかとともに勘助の屋敷を出、浄古寺村の御支配屋敷へと去ったのは、そうした日の午後のことであった。
「お師匠様、急に屋敷の内が空屋のようになりました……まるで灯が消えたようです」
「うむ、馴れるまでは、仕方があるまい」
勘助も、放心したようなのである。

戦国の鬼

武田晴信は、前年にひきつづき、ふたたび信濃に出陣することになった。

事の起りは、晴信が二日に一度、高熱を発する奇病に罹ったことに始まる。容態を診た医師は、眉を曇らせて、

「オコリでございますな」

と診断を下した。「オコリ」は「瘧」の字を当て、隔日または毎日、一定の時間に寒、熱を発するというから、今日のマラリヤのようなものであろうか。

「晴信病む」

の噂は、甲斐から信濃へ、さらに上野国へと異常な速さで伝染し、たちまち、その入手した情報によって、さまざまな反応を呼び起した。すなわち、病状「重シ」と聞けば、これを好機に晴信打倒をと色めき立つかと思うと、「軽シ」と伝え聞けば、なお慎重に次なる情報を待つという具合いにである。

信濃北佐久の志賀城主・笠原新三郎清繁の摑んだ情報は、晴信の病状「重シ」というものであったか。志賀峠一つ彼方の上野国甘楽郡から、縁類の高田憲頼が兵二百を引き具して来援したかと思えば、これに前年、開城降伏した内山城主大井貞晴の遺臣らも参加し、さらに北信濃の豪雄村上義清からも兵を送ってくるなど、志賀城は一気に反武田の姿勢を鮮明にした。

これらの情勢は、内山城将に据えおいた上原昌辰から、伝騎によって甲府の躑躅ヶ崎館に報告された。晴信は唸った。

「捨ておけぬ！」

この六月、晴信は『甲州法度之次第』二十六ヶ条を制定したが、「オコリ」の高熱に苦しんでおり、「悪い時に、悪い事態になりおった」との感が強かった。

しかし、宿願たる信濃制覇を目前にした今、志賀城の動向は、下手をすると、晴信の抱く構想をも一挙に崩壊させかねない危険なものを予感させた。

晴信は、高熱にふるえる体で、

「捨ておけぬ。出陣の用意をせい」

と命じ、重臣らが口を揃えて、

「そのお体での出陣は、命にもかかわりましょう」

「まずは、しばらく、志賀城の動きを見守り、殿の御快癒を待ってから……」

などと諫めたが、晴信は凄まじい形相でこれを退け、語気決然と、

「たとえ死ぬとも往かねばならぬ！」

「わかりました。出陣致しましょう」

と答えたのは勘助であった。彼は、いっせいに自分に向けられた、重臣宿将の刺すような批難の目もかまわず、

「殿に、それほどの意欲、御覚悟がなければ、とてものこと、信濃のような大国を伐りとるなど、出来るものではありませぬ」

「しかし、山本……」

言葉を挟んだのは、宿将長閑斎長坂左衛門丞であった。この人物、かねてから晴信が勘助を側近くに召すのを快く思わず、かねてより排除を画策していると聞く。

「長坂殿、なんぞ御異議がおありか？」

勘助がじろりと睨むと、長閑斎は勘助の言外の迫力に搏たれたようにどぎまぎして、

「いや、格別のことは無い。殿の思い召されるよう、事を進めるがよろしかろう」

「御異議は無いのですな」

「無い、まったく無い」

長閑斎は、蚊の鳴くような声で答え、ひどくバツの悪そうな顔をした。

ここに、出陣の準備は、直ちにととのえられた。武器、馬匹、兵粮などなど、万全を期して奔走された。例の筆マメな『高白斎記』によると、左記のようになる。

閏七月九日、御先衆出陣

十三日、御出馬

二十日、桜井山（南佐久郡）マデ御着

二十四日、卯刻ヨリ午刻マデ志賀ノ城へ取詰ナサレ候

晴信は、「オコリ」に苦しみながらも、さすがに戦場に立つや、病中であることも忘れたかと思えるほど、容姿凛然として、

「勘助、水の手は、まだ探り当たらぬか。少々、時がかかるようだが、ぐずぐずしとると、上州から関東管領家が乗り出して来ようぞ」

「問もなく見つかりましょう」

「急ぐよう催促させよ」

「いえ、慌てると、かえって時がかかりますゆえ、暫時、このまま待つ方がよろしゅうございます」

「うむ」

晴信の顔は、波状的に襲う高熱と寒気のため、眼窩は窪み、頬も削げて土気色と化しており、まさに信濃全土制覇の熱意のみが、その体を支えているかに見うけられた。

「あれで大丈夫であろうか？」

板垣信方が、案じ顔で勘助に囁いたのは、出陣に当たっての長坂長閑斎と勘助の、険しい確執を聞いていたからに違いない。万が一にも、晴信の身に異変があったりすると、責任は勘助の一身にかかるからだ。

「殿には、幔幕をめぐらせて休息して貰おうか？」

「いや、気が張っておられるゆえ、心配ありますまい。今のままの方が、かえってよろしゅうございましょう」

勘助は、板垣の提案すら退け、厳しい独眼で山上の志賀城を仰いでいた。——と、突

然どっと歓声があがったと思うと、伝令が馳せつけて来、鉱夫が城の水の手を探り当て、ついに断ち切った旨を報告した。

「そうか、切ったか！」

晴信の土気色の顔に、さっと生気がよみがえって、

「勘助、いつもながら、鉱夫一同、見事なる働きぞ」

「御意」

山城攻略戦には、鉱夫隊を従軍させるのが晴信得意の戦法なのであった。水脈を断ち切られた山城ほど脆いものはない。後は包囲しておれば、放っておいても、熟柿のように城は陥ちる。

（これで、殿もオコリの療養に専念できなさるであろう……）

さすがに勘助も、心中にほっとした。板垣信方が心配するように、もしも晴信が陣中に仆れたりすれば、出陣をすすめた勘助が全責任を問われる筈だからだ。

現に、真田幸隆も、ひそかに勘助を訪ねて来て、

「山本殿、だいぶ晴信公の御容態が悪しいようだ。貴殿についてとやかく申す者もある。十分に注意されよ」

と忠告してくれたほどである。もっとも真田幸隆の場合、万一にも晴信に不慮の事が起きれば、せっかく同族に背を向けてまで、武田家に随身したのに、すべてが水泡に帰すことになるのだから、勘助の身を案じてのみの忠告でもない。幸隆という漢、それほど単純ではない、と勘助も承知しているのである。

（真田弾正忠よ、なかなかに旧領回復にまで至らぬため、心も苛立つであろうが、武田家譜代の者どもとて、おのれの思うようには参らぬのだ。もう少し気持を寛げて、好機の訪れを待っておられよ）

勘助は、真田幸隆の鬱々と晴れやらぬ表情と、寂寥をきざんだ背中に向けて、思わず心で語りかけていた。事実、戦場で功名を立てる以外に、真田旧領の復活を実現する道はないのである。

すなわち、戦乱の中にのみ、真田幸隆の活路は存在するといってよいのだ。

その真田の望む戦乱が、水の手を断たれた志賀城が陥落する前に訪れた。志賀城主笠原新三郎清繁から向けられた、救援をもとめる密使にこたえて、ついに関東管領上杉憲政が起ったのだ。

管領上杉憲政は、「河越夜戦」で小田原の北条氏康に敗戦して以来、上野国平井城にくすぶっていたが、武田晴信の「病重し」の情報を信じ、晴信打倒の出陣意欲をそそられたのであった。彼には、

「武田を討って、氏康めを見返してやる」

という思いがあるのである。

そんな彼に、宿老箕輪城主の長野信濃守業正は、

「格別の遺恨もない武田家に、今は兵を向けるべきではありませぬ」

と諫めたが、管領憲政はきかず、部将倉賀野六郎秀高に兵二万を附けて碓氷峠を進撃させた。

峠を越えた上杉軍は、浅間山麓の小田井原に布陣した。小田井原は、信濃の北佐久郡であり、碓氷峠から軽井沢・沓掛・追分と過ぎて小田井原に入るが、今、晴信が攻撃中の志賀城からは、およそ七キロばかりだ。

すでに秋色深い浅間山麓は、芒の穂が白銀色に波打っていたが、高原の穏やかな大気も、上杉軍の進撃によってたちまち緊迫した。

「上杉軍来襲！」

物見の兵から報告をうけた晴信は、

「勘助、いかほど残す？」

「七、八百ほども留めれば、もはや、こちらは心配ありますまい」

勘助は、晴信の問いに、間髪を入れず答えた。志賀城包囲陣の兵力である。

「分かった」

簡略に答えた晴信は、高熱に苦しみながらも、自ら志賀城包囲軍一万余兵の大半を率いて、小田井原へと急行した。

その幽鬼めいた形相を見て、何か言葉を発しかけた板垣信方や甘利備前もはっと固唾をのみ、勘助とともに馬首を揃えて晴信を追った。

晴信は、馬に鞭打ち、芒野を駈ける。戦国武将の宿業ともいうべき、版図拡大にかける執念の迫力の前には、歴戦のつわものたる板垣や甘利ですら、弾き飛ばされんばかりなのである。

（今の殿には）

と勘助は、板垣、甘利ら武田家譜代の宿将の横顔を見ながら、胸中に呟く。

（誰が何と言おうとも、通じはせぬのだ）

執念の鬼と化した晴信の迫力は、武田・上杉両軍の合戦に、勝者と敗者という決定的な違いとなってあらわれる。『妙法寺記』によると、この日、八月六日午後――両軍は白銀色にゆれる芒野に激突、死闘は原野に夕色が漂いそめる時刻までつづけられたとある。

「こなくそ！」

若い騎馬武者が、真額に白刃をかざし、馬腹を蹴って敵陣に突入したのをきっかけに、大乱戦となった。ぎらっと白刃がきらめき、雑兵が動物的なおめき声とともに槍を突き出すと、

「八幡……！」

馬上から武者がどうと転落するかと思えば、首を薙がれた雑兵が血しぶきを上げ、悲鳴を放って地面を転げまわるなど、凄絶な光景がそこかしこに展開されたが、急に上杉軍の陣形が崩れたと見るや、いっせいに敗走を開始した。

この小田井原の合戦について、『妙法寺記』は、晴信の軍勢は、上杉軍の大将首十五、雑兵の首三千を討ち取ったと記し、またその首を槍の穂先に突き刺し、志賀城のまわりに並べ立てて城兵の気をくじいたと記録している。

すなわち、小田井原に上杉軍を撃破した武田軍は、直ちに反転して、ふたたび志賀城攻略戦を続行したのだ。

哀れをみたのは、管領上杉軍の来援を待っていた志賀城であった。攻防二十日間におよぶ死闘のすえに落城した。城主笠原新三郎清繁は自刃。捕虜の男たちは甲斐の金山に送り込まれて鉱夫にされたが、生き残った笠原清繁の妻女は小山田信有に与えられて妾にされ、女子供たちは二貫以上、十貫までの値段で売りとばされた。

山本勘助は、不機嫌であった。甲府へ帰還する際も、誰とも口をきかず、声をかけられても、じろりと独眼を向けるだけである。その苦虫を噛みつぶしたような顔に、声をかけた者は言葉をのんで後じさった。

(笠原新三郎は、なぜに妻子を城から落ちのびさせなかったのか……年齢三十二歳。気骨ある武人であったというが、落城後への配慮は、未熟千万と断ぜざるを得ぬ)

勘助は、片手綱で馬をあやつりながら、右手でばしっと小膝を搏ち、いよいよ不機嫌になるのであった。

(殿もオコリで体調よろしからぬため、手強く抵抗した者たちへも、ついつい仮借ない扱いにおよばれるのであろうが、それにしても、こたびは度が過ぎる。これでは先の殿、信虎公の行状と少しも違わぬではないか。かつて晴信公が諏訪姫を側室にと望まれた際、やがて大成なさる武将の瑕瑾になるといって、厳しく反対した重臣らは、こたびの御処置をどのように見ているのだ……)

勘助は、笠原清繁の妻女を賜わり、頬を綻ばせている小山田信有を見るや、侮蔑の色を露骨にして、ぷいと横に目をそらして、

「丈太郎!」

「はい、何でしょうか御師匠様」

丈太郎は、今なお、勘助を「御師匠様」と呼んで改めようとしないのである。長身の、いかにも凛々しい青年武士となったが、これまた見かけより強情らしい。勘助も心中にふと「どうやら、似た者主従らしい」と苦笑して、声を張って怒鳴った。

「甲府へ還ったら、清めの酒を飲もうぞ」

信濃では、もう赤蜻蛉が舞っているのだ。

青白磁

甲府の躑躅ヶ崎館に凱旋した晴信は、直ちに寝所に入って、医師瀬川妙庵の手当てをうけた。むろん、いつもなら催される凱旋の祝宴も中止された。

解隊、武具、馬匹、兵粮の収庫などなど、すべての処理を終えて、勘助が屋敷へ帰った時には、すでに夕景になっていた。

すると、勘助の帰邸を待ちうけていたように、塩屋宗右衛門から使いの者があらわれ、「あるじから預かって参じました」という口上とともに、一通の書状を差し出した。それには、凱旋への慰労の辞のあと、

「お疲れの折り、失礼とは存知ますが、ぜひに拙宅までの御来駕を願いまする」

と達筆にしたためてあった。

塩屋宗右衛門は、世故にたけた苦労人である。凱旋直後の武人を呼び寄せるなどの、非礼を何の理由もなくして犯す筈はない。

（何事であろうか？）

勘助は、小首をひねったが、ともかく丈太郎を供にして塩屋宅を訪ねることにした。秋の日暮れは早い。城下の小暗い町すじを、小さな勘助と長身の丈太郎という、奇妙な

主従は黙々とたどった。中空に一つ、また一つと、星の誕生する時刻なのである。

「丈太郎……」

ぽつりと、勘助が思い出したように話しかけた。

「落着いたら、また浄古寺村へ参ってみようぞ」

「はいっ」

それなり、二人の会話は絶えた。

その勘助、丈太郎主従は、塩屋の家人にみちびかれて、奥の座敷へ通された途端、異口同音に驚きの声を発した。

「おお、そなたは……?!」

「びっくりするじゃありませんか！」

塩屋宗右衛門と対座していたのは、なんと堺にいる筈の喜多嶋小源太だったのだ。

小源太は、さっと下座に席を移して、

「本日、立ち戻りました。直ちに参上し、御報告をと思いましたが、たまたま御凱旋直後とかで城中がごった返しておりましたゆえ、その間に用を済まそうと、こなた様に参じました」

と、自分が塩屋宗右衛門宅にいる理由を明かした。

「うむ、相分かった」

勘助は、頷いて、

「挨拶はよろし。どうやら、塩屋殿にも、一肌脱いで貰おうという魂胆らしいな」

「はい、この話、一肌脱いで貰わねば、まとまらぬと思われまする」

「ならば、拝み倒すよりあるまい」

この主従、話のやりとりが、小気味良いのである。

宗右衛門も、微笑して、

「すでに倒れてございます。とにかく、小源太さんの御才覚、宗右衛門、恐れ入ってございます。こう申しては何ですが、お武家にしておくのは勿体ないほどで……」

「とんでもありませぬ。わたしは、ただただ夢中でやったことです」

小源太は、成功か不成功かは、まだ分からぬと言い、これまでの経緯を物語った。

天王寺屋宗達は、最初、小源太の話にとり合わなかった。晴信の実父駿河追放が知られていて、日本一の親不孝者と嫌悪されたからだ。が、小源太の解説によって、若き武将武田晴信に興味を抱いた天王寺屋は、心許せる茶会仲間の高石屋宗陽に相談した。鉄砲のような武器の売買には、近畿地方の権力者三好長慶の一族が神経を尖らせており、容喙する恐れがあったからである。

それと知りながらも、なお天王寺屋や高石屋らが、隠密裡に事をすすめようとしたのは、堺の町の会合衆としての鋭い触覚が、武田晴信を将来の成長株ととらえたからであった。

しかも、彼ら茶会仲間には、強い同志意識があって、塩屋宗悦と高三隆世が協力を申し出た。塩屋は持船が商用で小田原へ行く、これに鉄砲を搭載し、途中、駿河の清水か興津の港で上陸させては如何と提案した。

すると、薬種商で、流行の「隆達節」で知られる高三隆達一族の隆世が、わが商船も東海地方へ赴くのがある。日時が合うようならば、利用なさるがよいと申し出てくれた。という風に、一種の連携プレーの形がととのった。その上で、天王寺屋宗達は言った。

「ただし、この堺でも、まだ鉄砲は入手が難しい。初回は五挺のみ」

恐らく彼は、この取引に、甲斐国の武田晴信という若き統領が、どのように応ずるかによって、その器量のほどを見極めようという魂胆と見てとれた。

「かように鉄砲購入と、駿河興津まで輸送のメドはつきました」

と小源太は言った。

「問題は、興津からこの甲府まで、どのようにして搬ぶかです。御存知のごとく、興津宿は、今川家の重臣興津氏の支配下にあり、東海道の要衝とあって、関所の監視もことのほかに厳しゅうございます」

「うむ、興津氏は、元は入江氏を称した鎌倉御家人の家柄で、代々興津宿の経営にあたってきたが、なかなかに煩い取締りで知られている。いかに今川の当主義元公夫人が、

わが武田家の御出身であられ、また、先殿信虎公が身を寄せておられるとはいえ、事、鉄砲ごとき武器の関門通過ともなると話は別である。恐らく無事の通過は難しかろう」

「はい、わたしも、そう見ました。折角、興津までのメドがついたのに、ここで頓座しては困ります。ハテ、どうしたものかと頭を痛めている中、ふと思い出したのが、こちらの塩屋殿の言葉でした」

「ほう、どのような事かな」

勘助は、塩屋宗右衛門が、微笑して深く頷くのを見やりながら、話の先をうながした。

「それは、いつぞやこちらに参じた際、甲府と駿府の出店との間には、月の朔日（ついたち）と十五日の二回、商荷の通行があるということです。しかも、長年の慣行で、荷改めなど一切行なわぬとあっては、途中の興津宿で、堺から陸揚げされた荷物を紛れ込ませることが出来れば、輸送の問題は一挙に片づきます」

「まことに、驚き入った次第です」

と塩屋宗右衛門が言葉を挟んだ。

「正直いって、小源太さんから相談をうけた瞬間、その着想にあっと唸りました。わたしども根っからの商人ですら、そうまでは頭が回りませぬ。まことに、まことに恐れ入りました。もっとも、表立って、わたしが鉄砲の混入など認めるわけには参りません。が、こたびだけは、小源太さんの働きと、才覚に敬意を表して、見なんだ、知らなんだということに致しましょう。駿府の出店を預かる、信頼できる者に、さっそく話を通しておきますゆえ、御心配いりませぬ」

心強い宗右衛門の言葉に、さすがに小源太もほっと安堵したようだが、思いは勘助として同様である。また、丈太郎が小源太の横顔をまじまじと見守っているのは、兄貴分の目覚ましい活躍に、よほど感じ入ったからに違いない。

それからは、勘助の凱旋祝いと小源太の活躍を祝して、という塩屋宗右衛門の酒宴となったが、ふと宗右衛門が声を落として、

「お屋形様が御不快と聞きおよびましたが、如何な御様子でございましょうか？」

と勘助に問うたのは、天王寺屋との取引きに支障が起きては、小源太の立場が困ったことになる、という商人としての配慮というものであった。

「心配いらぬ」

「お言葉を伺って、安心しました」

宗右衛門は、にこやかにして、勘助の杯に酒を満たしながら、

「それにしても、堺の町の会合衆にも、わたしどもと同じ屋号の御仁があって、こたびの仕事に関わっておいでとは、不思議な御縁と申すものでございます。良きことのあったついでに、久しぶりに小源太さんの喉を聞かして欲しいが、お屋形様御不快とあっては、御遠慮申すよりありませぬな」

いささか落胆の面持であった。その時、早くも杯を伏せ、菓子を頬張っていた丈太郎が、何を見つけたか、

「あれっ、いつもの壺と違いまするな」

と独りごちた。

「あ、これですか？」

宗右衛門は、たちまち相好を崩し、床の間に飾ってある白磁の水注しを返り見て、

「丈太郎さん、よう気がつきなされた。これは青白磁丸形水注と称される宋磁で、近ごろ購めた自慢の品です。淡い水色を帯びた白磁なところから、俗に影青とも呼ばれておりますが、宋磁のうちでも、とりわけ清純無垢な感じがするもので、清冽な山水のようなその釉色をながめておりまするると、心のすみずみまで、洗い清められるような気がします。わたしどものような、日々勘算に明け暮れておりますと、知らず知らずの中に、気分も乾いたぱさぱさしたものになりがちですから、時折りこの前に坐して、心に水を与えるようにしているのです」

「宗右殿、それは、われらとて同様……ことにも、凄惨なる戦場から生還したばかりの自分にとって、それなる影青には、心身ともに救われる思いが致しますわい」

「や、これは」

宗右衛門は、ぽっと顔をあからめて、

「影青と御存知の山本様には、釈迦に説法したようで、宗右、恥じ入ってございます」

「いやいや、拙者のは耳学問というもので、言わでものことを口にしたこと、赦して下され」

勘助は、宗右衛門の杯に酒を注ぎながら、真実、恥じた面持であった。この白磁は、釉下に施した線刻文の部分だけ、とくに釉薬が厚くかかって青味が強いため、「影青・陰青・隠青・空青」などと書かれるものであること、勘助は流浪漂泊の修業時代に習い覚えたのであった。

それにしても、思わぬことから、話題が清澄なものへと発展したのは、「青白磁丸形水注」に目をとめた、若い丈太郎の水々しい好奇心の手柄といってよい。さもなければ、今宵の話題は、鉄砲の購入と戦勝の凱旋という殺伐たるものに終始したと思われるからである。

北の曲輪様

武田晴信の生命力は、驚くほど強靱であった。オコリの熱・寒の発作の間隔が間遠になったと思うと、蒼白な顔に急速に生気がよみがえり、暗い病的な光を宿した眸も、日いちにちと明るさをとり戻すかに見うけられたことである。

側医瀬川妙庵などは、躑躅ヶ崎館の大廊下で、わざわざ勘助の袖をとらえ、

「まことに、驚き入った回復力でして、とても常人では考えられませぬ」

と訴えたほどである。

もっとも彼は、「しかし」と言葉を継いで言った。

「しかし、健康を回復されても、向後は厳しく女色を慎んでいただかねば、お命を縮めることにもなりかねませぬ」

当の晴信も、こたびの「オコリ」はさすがにこたえたらしく、

「勘助、わたしも、どうやら九死に一生を得た思いがしてならぬ」

と、しみじみ述懐したが、その言葉につづけて、

「お多佳の相州探索書を読むと、小田原北条三代の氏康めは、年は若いが評判のごとくなかなかなる漢らしいな。行状よろしく、治政また、よろしきを得て、家中の士はもとより、領民ことごとく慕うとある。あのお多佳ほどの女が、かの地を隈なく探索しての所感だ、恐らく狂いは無きものと思う。当分は、小田原への仕懸けは慎重にせねばなるまいな」

と思索を洩らすかと思えば、また、

「そなたの配下、喜多嶋小源太の働きにより、泉州堺の天王寺屋らが、とりあえず試しに、鉄砲五挺の周旋を約束してくれたとのこと、まことに重畳であった。小源太を厚く褒めてとらせよ。ともかく、これでどうやら、鉄砲獲得の道は、細いながらも開けたわけである。村上義清らを討滅して、北信濃を平定するためにも、ぜひに、この道は広いものにしていかねばならぬ」

などと、早くも北進作戦に激しく闘志を燃やしているのであった。

（この闘志があれば、病患など吹き飛ぶであろうし、家中の心配も自然におさまるに違いない）

さすがに勘助も、心中にほっとする思いがあった。実は、志賀攻城戦や小田井原合戦において、晴信が「オコリ」の重症をおして出撃し、それに賛意を表した勘助に対し、「もし、お屋形様のお身に万一の事でもあったら、一体どうする気だ」という批難がなされていることは、勘助自身、よく承知しているのである。

むろん、勘助にも言い分はある。

（では、あの時、宿願たる信濃制覇を眼前にして病に負け、心気衰弱し、尻っぽを巻いて逃げ帰るような晴信公で良いというのか……人間、一生の間には、命を賭してでも、敢然と戦わねばならぬ時があるのだ。そのとき怯み、難を避け、安易の道を選んだ者は、終世、悔いを胸に抱いて生きねばならぬのだ。さ、われら家臣なる者、いずれの人物を、おのが主君にと望む。前者か、それとも後者か……?!）

勘助が、挑戦的な独眼を批判者に向けると、申し合わせたように人々は目を外らすの

であった。

もっとも、批判者と一口にいっても、小山田出羽守信有の場合は、いささか特殊であった。二、三日、秋雨が降りつづいた後、朝から、大気澄み切った小春日和の日、晴信の御機嫌伺いに参上すると、

「勘助、母上からそなたが見えたら、帰途に立ち寄って欲しいと仰せられていた。恐らくは、母上、御ひいきの、諏訪姫母子の消息にでも関わることであろうが、足労でも立ち寄って欲しい」

「承知致しました。北の曲輪様には、しばらく御ぶさたしておりましたゆえ、これより参じることに致しましょう」

勘助が辞去しかけた途端、晴信はふと思い出したといった面持で、

「そうそう、小山田羽州めが、先日、見舞いにあらわれた際、近頃城中で出会うても、山本勘助め、そっぽを向いて通りおると、ひどく気に病んでいおったぞ」

「さあ」

勘助は、わざと小首をかしげて、

「拙者は、とんと気づきませなんだ。御覧のごとく、拙者は片目ゆえ、左様に見えましたのかなあ。それにしても、小山田出羽守殿ともあろうお方が、拙者ごとき者の目をお気にかけなさるとは、なんぞ、お気に病まれるようなことがおありなのでござろうか」

「勘助、もう勘忍してやれい」

晴信は苦笑した。

「羽州も気にはしているのだ」

「はい」

勘助は平伏し、するすると晴信の前を退った。晴信も、勘助の不機嫌の原因を承知しているのだ。

実は、勘助の心境も、複雑なのであった。われながら、矛盾しているという思いが強いのである。志賀城攻略戦以来、ずっとその思いが心の芯にわだかまっているのだ。

小山田出羽守信有が、落城自刃した志賀城主笠原新三郎清繁の夫人を賜わり、頬を綻ばせて妾にしたことに、勘助はなんとない不快感を覚えているが、よくよく考えるならば、おのれが自刃せしめた諏訪頼重の遺子諏訪姫を、側室に欲しいと望んだ晴信に対し、奇説をひねって賛成したのは、他ならぬ勘助自身だったのだから。

（つまりは、小山田羽州を責めることは、武田晴信を批判することであり、また勘助自身を難じることであるのだ。しょせん、人間、身勝手なものということか……）

ついには勘助も、自嘲の苦笑を洩らして、おのが真額をぴしりと搏ったことである。

それから、晴信の指示に従って北曲輪へまわり、「北の曲輪様」大井夫人の前に伺候した。長廊下を渡ると、尼姿の彼女は、日当たりの良い明るい縁先で、水盤に菊の花を

活けていたが、案内の小女に、
「退ってよろし」
と言ってから、勘助に坐るようにすすめ、ふと気づいて、
「遠慮せずともよい。脚を出しなされ」
と言葉をつけ加えた。
「はい、失礼致しまする」
「……」
言葉は絶え、庭前の臥竜梅の枝先にとまる小鳥の囀りと、花の茎を断つ鋏の音のみが、しばらくその場の世界を支配する。
余談ながら、彼女の尼姿については、三男の武田逍遥軒信廉の描いた、「絹本着色大井夫人像」が残されていて、才色兼備の人と評された余韻を今につたえているが、長男晴信、次男典厩信繁、そして三男逍遥軒信廉と、この兄弟いずれも文芸の才華に恵まれているのは、母なる大井夫人よりうけた血のなせるわざか。
やがて——尼姿なる彼女が花鋏を置き、裁ち捨てた花の茎をひろい集めながら、言葉静かに、
「信濃の合戦場では、重い病のお屋形殿に、存分の働きをなさるよう加勢し、反対の声をおさえたそうですね」

「はい、殿は武将であられますから……まさに乾坤一擲の時、終世、悔いの残るような真似を、おさせ申すことは出来ませぬ。たとえ、命あっての物だね、とのお叱りをこうむろうとも、殿の信濃に賭けられたお志を、中途にヘシ折るような真似は出来ませぬ」
「それでよいのです」
「え？」
「人間は、弱いものです。いちど怯みますと、次にもまた、安易に怯むもの……気力にて病にも敵にも打ち勝ったお屋形殿は、次には自信をもって、さらに強うなられましょう」
「はい、そのように拙者も思うております」
「勘助、わたしからも、礼を申しまするぞ」
「恐れ入りましてございます」
思いがけぬ「北曲輪様」の言葉に、勘助は慌てて居住いを正したが、その頭上に、
「いつぞや、そなたの手にかかった、三人の曲者の仲間が、われらが殿を損なう奸物山本勘助を斬る、などと言うているそうである。充分に心しなされ」
という静かな言葉が降った。
「はい、注意致しまする」
「難しいではあろうが、出来ますれば、命は断たれぬがよろしいでしょう」

やがて、晴信は政務をとれるまでに体調が回復し、勘助の上にも平穏な日々がつづき、北曲輪様の警告も杞憂に終わるかと思われた。

そのような一日、勘助は丈太郎を伴い、久しぶりに浄古寺村へと馬を奔らせた。

「御師匠様、取締の多佳女どの、もう傷の方はすっかり癒えられましたでしょうか？」

「心配すな。彼女の体は、常人には想像もつかぬほど、鍛えに鍛えてあるのだ。それに……彼女が伴のうて来た娘……」

「しずかさんですか」

「うむ、あの娘が側にあって、よう看護していようから、われらの気遣いなど、恐らく無用であろう」

「それにしても、しずかさん、早くお父御にめぐり会えるといいですね。旅先にて養母にも死に別れるなど、可哀いそうでなりませぬ」

「……」

「御師匠様」

「何だ？」

「柿の実がよう熟れているようです」

丈太郎は、道端の柿の木を仰いで、

「少し捥いでいきましょう」

「どうする気だ？」

「お多佳どのやしずかさんへの土産に致しまする」

「ばか、あれは渋柿じゃ」

勘助は、珍しく、ふと笑い、急に馬の速度を速めた。

高く晴れ上った秋空には、白い雲がゆったりと流れ、信濃小田井原での苛烈な合戦も、遠い昔のことのような錯覚すら覚えるのであった。

勘助の予測通り、忍び屋敷での多佳女は、見違えるほど元気になっていた。あの出血多量のため、紙の色ほどに白かった頬にも血の色がさし、虚ろだった瞳にも強過ぎるほどの光が宿されているのである。

「うむ、殆ど、元に戻ったようであるな」

勘助は、しげしげと彼女を見守って、

「な、丈太郎、わしが言うた通りであろう」

「何でございましょうか？」

過日の礼をのべた多佳女は、怪訝な顔をして、勘助と丈太郎を等分に見た。

「多佳どのの体を、丈太郎が案じるゆえ、心配せずとも、元気をとり戻しておろうというたのだ」

「それはどうも、丈太郎さん有難う」

多佳女は、丈太郎に会釈してから、傍にひっそりと控えているしずかを返り見て、
「この子のお陰で助かりましたわ」
「うむ、わが屋敷での看病の状、この勘助も丈太郎もよっく見届けているが、なかなかに通常には出来かねる手厚い心の籠った看病であった。多佳どのよ、不思議な縁で、共に暮らすようなったそこもとたちだ。しずかよ、わしからも浄古寺城主の大村右京亮殿によう頼んでおくゆえ、少しも気遣いはいらぬ。以前にも申したように、多佳どののもとで穏やかに暮らすがよい」
「はい」
意外な勘助の優しい言葉に、しずかは思わず泪ぐみそうになった。と見て勘助は、
「そうそう、ここへ参る途中でな、これなる丈太郎が、そこもとたちに土産というて……」
「あ、お師匠様……！」
ぱっと顔を赤くした丈太郎が、慌てて勘助の言葉を遮ろうとしたが、勘助はかまわず、珍しく笑いを含みながら、
「道端の柿を捥いで来ようとした」
「それはどうも……」
「多佳どの、礼を言うのは早い。その柿というのが渋柿じゃったのよ」

「まあ」
多佳女が笑うと、泪ぐんでいたしずかもつられて口元を手で覆って笑った。
「ひどいよ、お師匠様」
丈太郎は、口を尖らせながらも、この時のような穏やかで仕合せそうな勘助の姿は、これまで見たことがない、と胸中に思っていた。
勘助、丈太郎主従が帰路、浄古寺城に立ち寄り、酒肴の饗応をうけたため、ふたたび馬上の人となった時には、すでに夕靄のたちこめる時分になっていた。
秋の日の暮れるのは早い。野づらのそこかしこに、野焼きの煙が眺められたが、急速に火明りだけが鮮明になっていくのである。
やがて——甲府城下の人家の灯が見られ、郊外の目印ともいえる茶店のしだれ柳近くまで差しかかった時、ふいに五、六人の壮漢が前方を遮った。
「丈太郎、気をつけよ！」
言うと同時に、すでに勘助は、手にした鞭で一人を搏っており、次の瞬間には地上にはね降りて二人目を、抜き討ちに薙ぎ倒していた。まさに一呼吸、二呼吸する間の出来事であった。
しかも、他の者が「あっ」「げえっ」と悲鳴を上げたのは、丈太郎の放った石飛礫が的中したらしい。

「こたびは、北の曲輪様のお言葉により」
勘助の凛とした声が響いた。
「命までは断たぬ。早よう立ち去れい！」
「……！」
一瞬、無声のまま、曲者たちの動きが止まったと思うと、倒れた仲間を庇いながら闇の中へ姿を消した。
「丈太郎、怪我はないか」
「はい」
「重畳。では、帰るぞ」
ふたたび、勘助と丈太郎は馬上の人となった。

氷雪・大門峠越え

山本勘助は、この年天文十七年（一五四八）の年頭から、なんとない不安な予感を覚えて眉を曇らせた。新春恒例の年賀のため、久しぶりに躑躅ヶ崎館に姿をあらわした板垣信方の態度や言辞が、妙にいつもの彼と違うのだ。
（一体、どうしたというのだ。新年早々、なにを独りで興奮しているのだろう。日頃、冷静、沈着な彼らしくないではないか……）
というのが、大広間で賀詞を交わした際の勘助の感想であった。
もっとも、その直後、諏訪郡代たる板垣信方が、主君晴信に対し、例の小田井原合戦や志賀城陥落の戦勝後、信濃における群小の豪族が、北信濃の強豪村上義清を主軸に結集、反武田の容易ならぬ動きを見せていると報告したので、板垣の興奮はそのためかと納得したものである。が、板垣は、妙に執拗であった。
「このまま、村上らの動きを放置すれば、折角に手に入れた佐久地方も、奪取されてしまいましょうし、信濃の経略も困難になるばかりでありましょう」
「うむ、しかし……」
珍しく晴信がためらうのにも、それだけの理由があった。例の『妙法寺記』も、前年の世相を、
「此年モ信州甲州取合イ止マズ。一年二度ヲ働キナサレ候。ハヤ奉公ノ人々ハ信州御陣ニ迷惑致シテ候テ言語ニ及バズ。……世間ツマルコト無限」
と記録しているが、将兵は疲れ果てて厭戦気分が漲り、甲斐の領国内にも、いつ叛乱が起きても不思議がないほど、険しい空気が感じられたのだ。
しかし、板垣は、おのれの発言に固執し、いちだんと感情を高ぶらせて、
「今、村上を討たずば、必ずや後悔することになりまする。必ずなりまするぞ」

と主張し譲らないのである。

確かに、村上義清は、信濃守護家の小笠原長時とともに、諸豪族中の白眉であった。武田晴信が甲斐源氏を誇るならば、義清もまた信濃源氏を称して一歩も退かず、「甲斐の若僧の首を刎ねてやる！」と言い放つ豪勇の武人なのである。

埴科郡坂城の葛尾城を本拠に、北信濃一円に強大な勢威を張り、その同族も諸郡にあってあなどりがたい軍事力を蓄えている。このまま村上氏を放置すれば、やがて信濃全土の諸豪族は村上義清の下に結集し、もはや晴信の割り込む余地など無くなるに違いない。それも、日が経てば経つほど、困難となるのは目に見えているのだ。

（板垣殿、確かにあんたの申し条に間違いはない、と思う。だが将兵は出陣を迷惑とし、領民は困窮しているという現実をどうすればよいのだ。これらを無視して、なお出陣し、果たして戦いに勝ち抜けるだろうか……？）

勘助は、板垣の吐く正論には、なぜか一抹の不安を覚えさせられた。どこが妙だとはっきり指摘できないが、

（どうしたと言うのだ板垣殿……）

という思いが、つき纏ってはなれないのである。いつになく板垣が熱弁をふるい、自説に固執するだけに、その思いにはひとしおのものがあった。

飯富兵部や甘利備前が、こもごもに、

「今は時機が悪い。もうしばし、北信濃の動向を見極めてから、出陣ということでは如何じゃ？」

「そもそも、国中、上下の気風が沈滞せる中で、出陣など可能であろうか」

と疑念を挟んだが、

「いや、それゆえにこそ出陣し、宿敵村上義清を討滅して、われらが武田家のゆるがざる武容を示すことが肝要なのである」

板垣は、頑として譲らず、口をへの字に引き結ぶのである。彼の熱情が一座を圧倒し、もはや晴信の断を待つよりなかった。

「分かった」

と、ついに晴信は、苦渋の色を顔に刻んで言った。

「信方の申すように致そう」

「かしこまりました。直ちに、出陣の準備にとりかかるよう触れましょう」

板垣駿河守信方は、肩を上げて、意気高揚たる面持であった。

その板垣が退出した後に、晴信はなにやら思念する風であったが、勘助を手近に招じて、

「出陣を触れるについては、なんぞ手立てを講ぜずばなるまいな」

「御意」

「勘助に、良き思案はないか？」
「ないこともありませぬが……」
「言うてみよ」
「果たして、効果あるかどうかは……失礼ながら……」
「構わぬ。つづけよ」
「諸将の殿への信頼が、どれほどのものかによって、分かれると愚考します」
「勘助、どうするというのだ」
「御出馬の前に、信濃平定の暁には、必ず領地を分け与える、と御約束なさることであります。さすれば、諸将も奮いたって出陣致しましょう」
「相分かった」
晴信は深く頷いた。
かくして、晴信は出陣を触れた。例の『高白斎記』は、
「（正月）十八日、御具足召始ル。信州本意ニ於テハ、相当ノ地アテガハレルベキノ由、御朱印下サレ候」
と記している。「御具足召始ル」とは、出陣の支度を始めたとの意。すなわち、村上義清を討滅して信濃を手に入れたら、それぞれの戦功に応じて、領地を分け与えるゆえ、出陣して欲しいという依頼状を発したというのだ。

晴信、時に二十八歳。この時点での彼は、すでに「甲州法度之次第」を制定し、甲斐の統領たる名目だけは手にしていたが、完全に甲斐全土を掌握したとは言われない。諸将に出陣命令を発する場合も、良き恩賞でも約束しなければ、誰も良い顔をせず、行動は鈍く、かつ戦闘意欲は燃え上らないのである。
こうした点からも、板垣信方の村上義清討滅計画は、『妙法寺記』の書く、
「ハヤ奉公ノ人々ハ、信州御陣ニ迷惑致候テ言語ニ及バズ」
口に出すのも嫌だ、という甲斐国上下の民意を完全に無視したものであったのだ。
しかし、出陣の準備は着々と進み、二月十一日、晴信率いる武田軍は、ついに甲府を進発した。むろん、先鋒の将は、板垣駿河守信方。
「勘助、実は」
と晴信が言った。
「幸隆めが、先陣を願い出おったのだが、まだチト早い」
晴信は慎重である。真田幸隆は、武田家に服属以来、数々の攻城戦に参加、戦功も立てているのだが、なお晴信は幸隆の忠誠度をはかっているのだ。いうなれば、幸隆はいまだ試験採用の身というところなのであった。もとより、その宿願とする真田の旧領は回復されていない。
勘助は、幸隆の鬱々と晴れやらぬ顔を思い浮かべながら、独りごちめいた物言いで、

「難しき合戦の際、お召し遣いあれば、必ずや感奮致し、目覚しい働きを見せてくれるでありましょう。あれほどの漢をくすぶらせおくのは、勿体のうござる」

「うむ、油断ならぬほど切れ過ぎる漢だ……もう少し、心底を見極めたら、そのように致そう」

晴信はそう言って、かすかに笑った。

その頃、先鋒大将の板垣信方は、進軍するにつれて表情を険しくしていた。物見の兵のもたらす情報が、彼の組み立てた作戦計画を、つぎつぎと突き崩してしまうのだ。

まず進路に狂いの生じたことが、その作戦挫折の第一歩であった。元来、甲斐から村上義清の本拠とする坂城にいたるには、佐久地方から千曲川沿いに進攻するのが順路である。ところが、佐久地方は、

「近年ニ無キ豪雪ニ候」

という報告が入ったのだ。

「失敗った……！」

板垣信方は青褪めたが、どうすることも出来ない。佐久口が閉ざされたとあれば、諏訪口より北上して大門峠を越え、望月をへて上田にいたる進路を選ぶしかない。

板垣信方は、伝騎をもって晴信に進路変更を伝えるとともに、自ら先頭に立って、

「遅るな、急げ、怯む者は斬って捨てる！」

と叱咤したが、その間にも冷雨は霙となり、霙は雪にと急変して、もはや督励の効果はなかった。

標高一四四二メートルの大門峠越えは、たちまち地獄の様相を呈した。山々の稜線を吹き渡ってくる寒風に、板垣の戦場声もちぎれ飛んで宙に消えた。氷雨の凍結した峠道は、まるで剃刀の刃の上を渡るような難路と化している。そこを作戦変更で平常心を喪失した板垣が叱咤し、急がせるのだから堪らない。氷雪に脚をとられて、谷間へ滑落する人馬が続出した。

「誰だ、こんな馬鹿な戦を仕組んだのは?!」

「この雪や氷の中で、戦えというのか！」

もともと戦意がないところ、無理に狩り出された兵なのだから、たちまち不平不満が噴出するが、あからさまに言えないから陰にこもり、暗い雪中の難行軍となった。

「勘助、信方め、困じておろうな」

「御意、さすがの板垣殿も、天候の変異までは意のままにならなんだと、歎いておられることでありましょう」

勘助は、晴信の問いに応じながらも、板垣信方の胸中を思うと胸が痛んだ。晴信は、一言も板垣信方を責める言葉は口にしていない。が、「村上義清討滅」を主張し、半ば強引に主君晴信を出馬させたのは、紛れもなく板垣信方である。その結果が、兵も馬を

もいためて、戦場に赴くという最悪の状態を招いてしまったのだから、恐らく、板垣たる者、かねてより「合戦巧者」と謳われているだけに、辛い思いを噛みしめているに違いないと勘助は思った。

事実、板垣信方は、誰よりも責任を痛感していた。馬上、横なぐりに吹きつける氷雪を頬にうけながら、心中ひそかに死を決意していた。晴信から一言の叱責もないだけに、余計におのれの失態が身にこたえるのだ。

（おれは、この大門峠越えで、これまで合戦のたびに、命をかけて築いてきた、武将板垣駿河守の名誉を一挙に失った。また、甲斐の武田家に、板垣ありと知られた家名をも、共に傷つけてしもうたのだ。もはや、村上義清討滅戦に命を賭して力闘し、味方に勝運をもたらすほかに、名誉を挽回する道は残されていないのである。死ね、駿河守信方よ！）

板垣信方は、おのれを心中に叱咤した。

そうした間にも、後方に悲鳴が上り、

「あっ、足を滑らすな！」

「危いっ、馬を暴れさすな！」

といった怒号が聞かれ、白雪はいちだんと激しさを増して降りつづけるのであった。

板垣信方死す

氷雪の大門峠を下り、佐久平に出た板垣信方の先鋒隊は、疲労困憊その極に達した感があった。しかし、

「皆の者、疲れておろうが、この信方のため、こらえてくれい」

沈痛な面持の板垣信方は、休む暇もなく、村上義清との対決をもとめて、更に塩田平へと向かった。

二月十三日、一万余の武田軍は、塩田平の東方に進出、晴信自身は、上田原を前にした倉升山に本陣をおいた。佐久地方は大雪だったのに、この上田原一帯に雪がないのは、盆地という地形のせいであろうか、全将兵をほっとさせたことであった。

（これが吉兆となってくれればよいが……）

勘助は、板垣信方のために祈った。駿府以来の交情を思うと、板垣がこの合戦で名誉を挽回することを祈らずにおれなかった。

晴信も、思わざる板垣信方の失策に、

「勘助、こたびの合戦、難戦を覚悟せずばなるまいが、いかなる陣立てにて臨むか」

「はい、板垣殿の先鋒は変えられませぬが、七備の陣立てを組立てておりまする。脇備

は馬場民部殿、後備には内藤修理殿……」

「うむ、峠越えにて、諸隊だいぶ意気阻喪しているようだから、その点を充分に考慮して欲しい」

そう言う間にも、晴信の眉は曇っているのだ。

戦局が動いたのは、翌二月十四日払暁であった。村上勢七千余兵が、塩尻口から千曲川を押し渡って攻め寄せたのだ。と見て、板垣信方率いる先鋒隊三千五百余兵も前進を開始した。

「押せ、押せ、怯むな！」

板垣信方が、声を嗄らして叱咤する。緒戦に敵を圧倒し、あとは息もつかずに押しまくるのが、彼得意の戦法なのである。しかも、このたびは死を覚悟しての出撃だから、

「臆すな、われにつづけい！」

と、怒号し、馬上、自ら白刃をかざし、敵中に突入する凄まじさであった。

にわかに、敵味方の旗指物が入り乱れ、刀槍がきらめき、人馬のどよめきや陣鼓のひびきが上田原を支配した。

「えいっ、怯むな。追え、休むな！」

板垣信方の戦場声も、白兵戦となっては掻き消されがちだったが、死を決意した彼の迫力が敵を圧倒した。息もつかせず押しまくる得意の戦法に、さすがの村上勢も、思わず一角が、わあっと崩れ立った。

「逃がすな、追え！」

激しい追撃戦となり、ついに村上勢は千曲川の岸辺まで退却した。

それと見た板垣信方は、

「勝ったぞ！」

と絶叫するとともに、鐙を踏んばって立ち上り、頭上高くに白刃をかかげると、ふたたび、

「勝ったぞ、勝ったぞ！」

と絶叫した。この瞬間ではなかったか、大門峠越え以来、彼の胸の奥深くに凝結していた感情が爆発したのは。

直後に彼は、歴戦の古豪板垣駿河守信方とも思えぬ、異常な行動をとっている。

敵前で、首実検を始めたのだ。

確かに板垣は、この一戦で『甲陽軍鑑』にも、

「板垣手勢ばかりをもって、敵を百五十討ちとる。くみ衆は板垣にこされ敵一人もうちとらず」

と記されているように、板垣隊に手柄を一人占めにされたと、他隊がコボすほどの目覚しい戦功をたてた。

しかし、村上勢は殲滅されたわけでなく、なお、千曲川の岸辺に集結して、反撃の機会を狙っているというのに、床几に腰をおろし首実検におよぶなど、まさに異常というほかはない。側近の者が、驚いて、

「この場にて、実検なさるのですか？」

と危ぶんでも、板垣信方は、いかにも心地よげに、

「見事に勝った証しよ」

と答えた。本来なら、首実検は主将たる武田晴信の行うべきものであり、宿将とはいえ板垣には分をこえた所業といってよく、この時すでに彼はそれすら気づかぬまでに、思慮がはじけ飛んでいたのだ。

当然、時ならぬ首実検を始めた板垣隊の所業を、村上勢が見逃す筈はない。千曲川の岸辺から一気に逆襲に出た。

「あ！」

敵の喚声に、板垣信方も一瞬、正気に返ったのであろうか、眼の焦点も定まり、太刀を摑んで馬に飛び乗ろうとしたが、時すでに遅く、身辺に群がり寄った五、六人の村上兵に槍をつけられ、突き倒されて首を討たれた。

「板垣駿河の首を討ち取ったぞ！」

という村上兵の絶叫に、いっぺんに板垣隊は浮き足立ち、戦況はこれを境に一変した。

先陣の異変に気づいた甘利備前が、急遽、救援に向かったが、それより早く敵もまた、板垣隊を砕いた余勢を駆って、

「休まず、討てい！」

と甘利隊に突撃し、乱戦のうちに甘利備前も討ち取られた。

「甘利備前も討ち取ったぞ！」

合戦場に響き渡るその声に、一層勢いづいた村上勢は、人馬一団となって武田軍の本営へと突進する。

地響きがし、けもの染みた喚声が聞かれ、一瞬、上田原の天も地も小暗く翳ったかと思われた。

「よしっ、来おったな」

晴信は、馬上、白刃をとり直し、おのれの気力を掻き立てるように、ばんと両の膝で馬腹を叩いて、

「参るぞ、勘助、死ぬるなよ」

言いざま、本陣から奔り出た。

「殿こそ、怪我召さるな！」

勘助も馬腹を蹴ってつづいたが、たちまち乱戦の中に呑み込まれ、晴信と離ればなれとなった。

驚くべきは、敵将村上義清であった。本営から奔り出た晴信の前方から、一直線に奔り寄って来たと思うと、

「晴信、勝負！」

と呼ばわったのだ。

すなわち、村上義清は、信濃連合軍の大将の身でありながら、手勢と一団となって武田軍の本陣に突入、晴信に一騎討ちを挑んだのである。その勇気、自信、恐るべきものがあるといってよい。

もとより、晴信とて怯みはしない。

「おおう！」

と受けて立った。馬腹を蹴り、白刃をかざして、村上義清めがけて直進する。

勇猛の村上義清も、片手綱で鐙を踏んばり、白刃を高々とふりかぶって突進する。

義清と晴信は、たがいに馬を駈け違わせながら、二度三度と馬上に斬り合い、共に手傷を負うという激闘となった。双方の白刃の切っ先から、切り結ぶたびに火花が散って、いつ結着がつくとも思われなかった。

ところが、晴信が渾身の力をこめて斬り込んだ途端、受け損じた義清が、突然、

「あっ」

と叫びざま、馬上から斜めに転落した。

「や、殿が危い！」

驚いた村上勢の十四、五騎、雑兵四、五十名ほどが、わっと馳せ寄ると、義清を丸く押し包んで退却したのが合図のように、両軍相引きのかたちで上田原を退いた。このわずか一日の合戦で、両軍ともに二、三千人もの死傷者があったというから、いかに凄絶な合戦だったかが検察されよう。

（何たることぞ……！）

晴信は深刻な衝撃をうけた。敗北というわけではないが、と『軍鑑』は記すが、明らかにこれは武田軍の敗北である。板垣信方、甘利備前はじめ才間河内、初鹿野伝右衛門ら宿将多くを討死させ、しかも、おのれも負傷した晴信のダメージは深く、大きい。

この上田原合戦の戦況を、諏訪の上原城に詰める駒井高白斎が知ったのは、翌十五日未ノ刻（午後二時頃）であった。伝騎によって、それと知った高白斎は、例のごとく、ただ一言、

「板・甘殿が……」

と言って絶句した。板垣と甘利の二人も、簡明を特色とする『高白斎記』の筆者は、「板・甘」の二字に凝縮させるとともに、この瞬間から彼の頭脳は、鋭く回転するのだ。

（この上田原の敗戦と、晴信公負傷の報が伝われば、恐らく、甲斐国内の不平豪族は、いっせいに叛乱を起すに違いない。しかるに甲府の躑躅ヶ崎館には、御生母北の曲輪様

や三条夫人もあられるのだ。もし叛乱の徒の手に捉えられでもしたら、それこそ取り返しのつかぬ重大事を招くことになる）

そう危惧した高白斎は、しばし、

（どうせばよいか……？）

と苦慮した後、甘利藤三（後の昌忠）を呼んで、父甘利備前の戦死を告げると同時に、

「急ぎ甲府へ帰って、躑躅ヶ崎館の守衛に当たるよう」

命じ、兵百五十を預けた。時に藤三、弱冠十五歳。甲斐本国の不穏な空気は知っても、高白斎自身は上原城にあって、後方の治安に当たらねばならぬし、これぞという者は、すべて上田原に出撃しているのである。

それでも少年甘利藤三は、父の死の悲しみをこらえ、眉を上げて、

「心得ました。直ちに出動準備にかかりまする」

と答えている。

このあたりを『高白斎記』は、例のごとく簡略に、しかし切迫した空気を伝える名文にて、

「十七日、甘利藤三ヲ呼、兵始テ仕始、申刻並ビテ門ヲ出、東方ニ向フ」

と書きとどめている。少年藤三は「兵始テ」すなわち武装して、「申刻」午後四時、城門を出て甲斐国へ向かったというのだ。悲壮極まる情景といってよい。

なお、この甘利藤三については、次のような奇談が伝えられている。これは後年、武州松山城攻めの際の咄だが、米倉丹後守の嫡男彦次郎が流れ玉が腹に命中し、腹中に血が溜まって死にそうになった。

そのとき藤三が、亡父甘利備前守虎泰から聞いた話として、腹中の血を下すには、葦毛の馬の糞を水に溶いて、その上澄みを呑ませるとよい、というのを思い出し、さっそく作って彦次郎に呑ませようとした。

ところが、彦次郎は、

「馬糞の水で命が助かったとあっては、武士の面目にかかわる」

と言って、何としても呑もうとしない。そこで藤三は、

「生き長らえて、晴信公に奉公することこそ、武士たる者の務めではないか」

と諭し、

「ほれ、俺も武士だが呑めるぞい」

と、まず自分がゴクリと呑んで見せ、しかる後、半ば強引に彦次郎に呑ませたところ、血が一桶ほども下って、一命をとり止めたという。

真疑は、分からぬ。が、少年甘利藤三は、こういう漢に成人していくのである。

それにしても、晴信のうけた上田原敗戦の衝撃、挫折感は深かった。父信虎を駿河に追放、甲斐国守護武田家の統領となって以来七年、負け知らずに過ごして来ただけに、

心にうけた傷手は深いのである。まして、板垣信方と甘利備前の討死に、晴信は打ちのめされたといってよい。

晴信は敗戦後も、甲府に引揚げることなく、信濃小県の地にとどまり傷の手当てをした。実は傷の手当てもさることながら、本国甲斐に不穏な動きのあることを警戒したのだ。敗戦で自信を喪失した彼は、次なる行動を起すことに消極的になっていた。

そんな晴信を見て、勘助は、マズイことになったと思った。ここが晴信の正念場と見た。挫折した途端に、とめどもなく転落するか、それとも挫折をバネにして大きく飛躍するかは、本人の心の持ちよう次第である。

「勝ち負けは、時の運。手傷の痛みで顔をおしかめなさるのは止むを得ませぬが、一軍の大将たる殿が、左様な暗いお顔をなさるのはよろしくありません。全軍が暗く沈みます」

勘助が諫めると、晴信もはっと我に返ったように、

「信方や甘利を死なしてしもうたのも、この晴信の愚かさゆえだ」

「いや、それはお考え違いであります。板垣殿は、おのれの失策を自身の手にて結着つけなされたのです。武人たる者、当然というべき身の処し方であり、恐らく、この勘助とても板垣殿の立場にあったなら、同じようにおのれを断罪したことでありましょう」

勘助はそう言いながらも、実は敵前において板垣信方が首実検をしたと聞いた時、

「板垣殿、狂したか?!」と呻いているのである。年頭以来の、板垣の奇怪な言動が脳裏をかすめ、恐れていたことが現実となった思いであった。

(いずれにしても、このまま晴信公が自信を喪失し、本当に挫折してしまったら、それこそ板垣殿や甘利殿の死が無駄になってしまうことになる……そして、この山本勘助が、武田晴信という若き武将に懸けた夢も、共に潰えてしまうのだ。ここは何としても、晴信公に奮起して貰わねばならぬ)

勘助は、何とか晴信の気を引き立てようと試みた。と、ふいに晴信が、初めて気づいて、驚きの声を放った。

「勘助、そなたも顔に、手傷を負うているではないか!」

「さしたることはありませぬ。敵と駈け違いましたる時、一颯された掠り傷です」

「しかし、頬ぞ」

「なあに、刀傷が一筋二筋増えたところで、これ以上は、人相も悪うはならんでしょう」

「勘助……」

晴信の青褪めた顔に、一瞬かすかに血の色が射した。

だが、なおも晴信は、甲斐本国へ引き揚げようとしなかった。その間、先に少年甘利藤三に兵を附けて甲府へ急派し、躑躅ヶ崎館の守衛を命じた駒井高白斎は、晴信の帰還

をうながす一計を案じていた。高白斎は、宿老今井相模と相談し、御生母「北の曲輪様」から帰還するよう呼びかけて貰うことにしたのだ。

その結果、野村筑前と春降出雲の二人が陣所にあらわれ、北の曲輪様の言葉を伝えた。が、それでも、晴信は動かなかった。無理もない。上田原敗戦の噂が流れたからには、これまで服従していた土豪らも、いつ、叛旗をひるがえして襲いかかるか分からないのだから。

その晴信が、三月五日、ようやく諏訪上原城まで帰還したのは、勘助の密命をうけた丈太郎が、ひそかに諏訪地方に潜行し、その安全を報告してからであった。春遅い信濃の山野にも、暖い陽光が射し始め、春色がはげしく息づいても、なお武田晴信という敗戦の若い武将の心は寒々としているのである。本国甲斐の不穏な気配を恐れ、上原城にとどまったなり腰を上げようとしない。

「殿、浄古寺の多佳女からも、甲斐全土から不穏の動きは去ったと申し来ております。もはや案ずることはありますまい」

勘助のこの一語に、晴信もようやく頷いた。

小源太の行方

三月二十六日、晴信はようやく甲府に帰還した。すでに甲斐の国も爛春の季節となっており、今更のごとく、上田原敗戦以来、信濃の地に滞陣した四十余日の長さを思い知らされたことである。氷雪の大門峠越えや上田原での死闘を思うと、この思いにはひとしおのものがあった。

むろん、祝宴もない敗戦の帰還は、各部隊ごとにひっそりと解散した。ことにも主将を失った板垣信方や甘利備前の部隊の将兵は、口数も少なく、小暗い影を背負っているかとさえ見うけられた。

「では、これにてお別れ申す。次にお目にかかる時までには、どうぞ手傷も癒えておりますように……」

「お気遣い、忝のうござる。下部の湯にでも参ろうかと思っております」

こうした別れの挨拶が、そこかしこで聞かれ、敗戦の思いを色濃くした。

晴信は、躑躅ヶ崎館に入ると、直ちに北曲輪に赴き、生母大井夫人に帰城の報告をした。すると、尼姿の彼女は穏やかな物言いで、敗戦には触れずに、

「信濃は寒うござりましたろう。手傷を負うておいでのようだが、まだ痛みまする

か？」

「いえ、もう大したことはありませぬ」

「それはよかった。しかし、軽う見てはなりません。大事をとって、温泉へでも参られたらよろしいですよ」

「はい、なるべく、そうしたいと思うておりまする」

「ぜひに、そうなされ」

彼女は、そう言ってから、

「そうそう、諏訪の上原城から、高白斎が差し向けてくれた子……何と申したか……」

「甘利藤三ですね。板垣信方とともに討死した甘利備前の嫡男であります」

「甘利藤三……あの子、いまだ十五歳とのことでしたが、弱年ながら、なかなかに気性のしっかりした子でありました。百五十余名もの兵を見事に指揮して、この館を厳しく守護してくれ、まことに心強う思うたものです。厚く褒めてやりなされ」

「はい、そのように思うておりまする」

「しかし……わたしなどより、乳呑みを抱えた諏訪の姫の方が、もっともっと心細うあられたことでしょうに……きちんと手当てはなされたのですか？」

「はい、板垣信方の弟室住玄蕃允（むろずみげんばのじょう）を城代に据えおきましたゆえ、心配は無いものと思うております」

「乳呑み子……四郎は健やかに育っておりますか」

「はい、お陰様にて、体も並みより大ぶりのようで、すこぶる健やかでありまする」

「それは結構です。姫を上原城へ移すに当たっては、勘助もよう働いてくれました。そのため勘助は命を狙われ、随分と危険な目にもおうたようでした。あの不自由な体で、よくぞ闇討ちを免がれたものと、不思議でなりませぬ。よくよく労（ねぎら）うてやることですね」

「御心配をおかけして申しわけありませぬ」

さすがに晴信は、面目無げであった。母は口にこそ出さないが、正室三条夫人の嫉妬の矢が、諏訪姫や勘助に危険をもたらしたと知るからである。

こうした母子の久しぶりなる対面にふさわしく、あの凄惨な上田原合戦場の光景など、まるで嘘のように思える、春日遅々（しゅんじつちち）たるひとときであった。

同じ頃――山本勘助は、自邸の書院で塩屋宗右衛門と対座していた。宗右衛門は、勘助が帰還したと聞いて馳せつけたのだ。

「こたびは、大変な合戦であったそうで、陰ながら御案じ申しておりましたが、ともあれ無事なる御帰還、祝着至極に存知まする。見ればお顔に刀傷が……大事ありませぬか」

宗右衛門は眉をひそめたが、勘助は、

「なに、さしたることはない。もう癒えている。心配あられるな。ホンの掠り傷だった。ま、そこもとの言うがごとく、とにかく生きて戻れたこと、祝さずばなるまい」
「左様でございますとも。しかし、そのように御酒を召し上ってもよろしいのですか……傷の痕が痛みましょうぞ」
「心配無用。丈太郎、宗右殿に注いで差し上げよ」
「はい」
神妙に控えていた丈太郎も、勘助の言葉にはっと気づいて、
「さ、遠慮のう、杯を空けられよ」
「では……」
と杯を呑みほした宗右衛門、丈太郎の酌をうけながら、今更のように部屋の内を見まわして、
「いつもながら、簡素なるお部屋でよろしゅうございますな。気持がさっぱりと致しまする」
「ははは、無理に褒めずともよろしい。わが部屋は、まことに愛想のないといおうか、素っ気ないといおうか、われながら呆れるほどである」
「いんや、茶の湯にかのうておりまする。これは殺風景とは異り、やはり簡素というべきでありましょう。いかにも武のお人の室らしく、きっぱりとして心地がようございます」

「部屋を飾ろうにも、わが家には、青白磁丸形水注のような名品の持ち合わせはないからな。止むを得ぬ茶の湯好みというところよ」
笑った勘助は、そこでふと表情、言葉を改めて、
「ところで宗右殿、おぬしが今日訪れたのは、帰還祝いや、書院を褒めるために参ったのではあるまい」
「はい」
居住いを正した宗右衛門は、しかし二、三拍手するほどの間、沈黙して、やや首をかしげて思案する風であった。と見て勘助は、
「そこもとと、わしの間だ、遠慮会釈はいるまいに……そうだ、信濃へ出陣していたため、危うく失念、というわけでもないが、多忙にとり紛れて時機を失するところであった。例の鉄砲の取引きの件ではないか、そこもとが案じているのは？」
「はい、そのことにございます。武田のお家大変の時、かようなことを申し上げるのは、如何なものかとも思いまするが、鉄砲を購入なさるか、それとも中止なさるか、一日も早くはっきりさせませぬと、天王寺屋に話を持ちかけた小源太さんが窮されます」
「む、確かに……」
「せっかく、当地まで搬んで来て、万一にも破談になったりしますと……一度、手前勝

手に破約しまするとと、武田家は信用ならぬとし、もう二度と取引きの場に上らせてくれないのが商人でございます。それでは、あんなに懸命になっておられた小源太さんが、あまりにもお気の毒です。で、もし、皆様の御帰還がなお遅れるようなら、商売違いではありますが、わたくしどもが買い取って、一時お預りしようかとも考えていた次第でございます」

「左様なことまで、心配させて済まなんだ。われらが武田家が、一度の敗戦でこれきり消え去るならともかく、今後いよいよ鉄砲は必要となる筈である。堺商人との道は絶やしたくない。宗右殿、この山本勘助が全責任を負うゆえ……直ちに勘定方に話を通すゆえ、取引きの件は話を進めて貰いたい」

「分かりました。早速、駿府のわが塩屋の出店にあられる小源太さんに連絡させましょう」

初めて宗右衛門は頬を綻ばせ、心地よさそうにゆったりと杯を傾けてから、

「やっと酒が旨うなりました。ところで、山本様にお願いがございます」

「何だ、急に改まって……小源太と違って、室津の舟歌などを所望されても、わしには歌えないぞい」

「ははは、失礼ながら、山本様の歌で聞けるのは、信濃の津金寺で覚えて来られたという、山岳党やらの戦唄ぐらいのものであります」

「ふふ、手厳しいことを言う……」

「わたしがお願いしたいのは、小源太さんのことです」

「小源太のこと？」

「はい。このたびの取引きが無事に済みましたら、ぜひに小源太さんをわたしどもにお譲り願いとう存知まする」

「譲ってくれとは、どういう事であろうか」

眉をひそめる勘助に、塩屋宗右衛門は熱誠をこめて、

「あの方の商才は天性のもの、とでも言うべきものです。わたしどもの店にて、存分に腕をふるって貰いとうなりました」

「ふうむ。なるほど、そう申されれば、時折り小源太は、とても武士とは思えぬような発想をする上、えもいわれぬ愛嬌と、巧まざる如才なさがあって、人の心を捉えて放さぬところがある……しかし、わしがそこもとへと譲って良いと言うても、小源太本人が、なんと答えるかは分からない」

「はい、その点ならば、いつか酒に酔うた時、小源太さん自身、自分は間違うて武士に生れついてしもうた人間のようだ。刀をとっても役立たずの臆病者で、最初、天王寺屋の警固牢人隊に入ったのも、ただただ飯にありつきたい一心からだった、と言って笑っておいでした。そして事実、泉州堺の商人の中でも、厳しさで聞えた天王寺屋宗達殿

の目にとまって、牢人隊から商用専一の内所へと引き抜かれ、取引きに携わっていたこともあるのですから……」

「うむ、そのことは、確かにわしも聞いている。まこと、世の中は広い。不思議な人物がいるものじゃ」

「はい、おのれの優れた才能にも気づかず、世に埋もれているのは勿体のうございます」

宗右衛門は力をこめて言い、勘助も深く頷いており、小源太の運命の、大きな変転が予感されたことだった。

その頃——当の喜多嶋小源太は、駿府城下の安倍川近い例の居酒屋で、ひとり茫然と夕景のひとときを過ごしていた。

彼がわれながら苦笑するのは、その占めている席が、かつて山本勘助が鬱々とした顔で独酌していた囲炉裏辺であり、無意識におのれが同じ姿をしていることであった。

泉州堺の町から流れ来て、安倍川の川人足で世を忍んでいた自分が、この居酒屋でたまたま声をかけられ、酒を薦められたのが縁となって、その後、武田家に随身した勘助と行を共にするようになったことを思うと、今更のように人の世の不思議さをしみじみと感じざるを得ないのである。

今、その小源太の心を悩ましているのは、信濃から来た旅人の伝えた、村上義清に武田晴信が上田原合戦に敗戦したという噂だった。

（何という間の悪さだ。選りによってこの時機に、武田軍敗戦の噂が入るとは……下手をすると天王寺屋宗達はじめ、連携する堺の商人たちは武田家の将来に見切りをつけ、今後いっさいの取引きを中止するやも知れぬではないか……）

小源太は、必死に情報の収集に努めたが、塩屋の駿府出店に入って来るのは、いまだに武田晴信が甲府に帰還せず、叛乱のつづく信濃から動けずにいるという悪い情報ばかりだった。

ただ一縷の救いは、泉州堺が遠隔の地であり、また天王寺屋の鉄砲持参人が船中にあることだ。彼らに噂が伝わる前に、好転した情報が入手できれば、という思いに小源太は望みを託しているのである。

（もしも、このたびの取引きが不調に終わったなら、俺の人生は、武士としても、商人としても不調だったことを意味するのだ……）

小源太は、思い出したように酒を口に含みながらも、あれこれと思案をめぐらせるのであった。時刻は申ノ下刻（午後五時頃）にもなろうか、いつ暮れるともない春の靄々たる夕景も今の小源太の目には入らないのである。——と突然、暖簾を撥ねて飛び込んで来たのが、

「あ、喜多嶋さん、やっぱりここに……！」

と声を張り上げたのは、塩屋の駿府出店の走り使いであった。変声期を迎えたばかりの少年は、無邪気に声も大きく、

「つい先程、堺からの荷船が港に入った、との報せが参りました」

「よし、分かった。御苦労であった。すぐ参るゆえ、先に戻っておれい」

「はいっ」

少年が走り去るのを見送った小源太、

「いよいよ、勝負だ」

ゆっくりと腰を上げ、ぐいと一息に杯をあおって、胸中に力を込めて、

(山本勘助殿も塩屋宗右衛門殿も、待っていて下されよ。この小源太、必ずや鉄砲を甲府へ届けて進ぜる!)

と誓った。

しかし、実は、関門の通過には、小源太が一瞬、顔を青褪めさせたほどの、危機が待ちうけていたのだ。

当日、たまたま、今川家でも「ねじれ松」と恐れられた、松田源兵衛(まつだげんべえ)が巡見に来合わせ、突然「荷改めをせよ」と命じたのだ。いつもなら素通りだが、「ねじれ松」にはそれがならぬ。

さすがの小源太も、「これは」と息をのんだ。彼は荷駄一行とは、つかず離れずの間

合いで歩いていたが、「はて、どうしたものか?」と思案を凝らした時、思いがけない事態が発生した。不意に、

「何を言うてんのさ!」

甲高い女の声が上ったと思うと、行商人らしい若い女が二人、あられもない姿で、組んずほぐれつの喧嘩を始め、女が一人おろおろして、救いを求めたのだ。明るい陽光の下に、白い内股が眩(まばゆ)いばかりであり、さすがの「ねじれ松」も苦笑して、

「もうよい、早よ行けい」

と荷駄の一行に言ったのだ。

「助かった」

小源太は、ほっと安堵したが、菅笠蔭の女たちの顔を見て、「あっ」と思った。

(多佳女が手配りをしてくれたのか……)

女たちは、お遊、おきょう、お紺という、浄古寺村の御支配屋敷の取締り藤林多佳女の配下だったのだ。しかも三人は、いずれも小源太が見い出した者たちなのである。

山の章

女忍の最期

信濃上田原合戦における武田軍敗戦に、横手を打って快哉を叫んだのは、筑摩・安曇両軍の守護として、深志城（松本城）を本拠とする小笠原長時であった。

小笠原長時は、武田氏と同族であり通婚した親族の間柄だが、信虎・晴信父子二代にわたる信濃侵攻に危機感を覚え、村上義清とともに反武田の同盟を結んでいたから、

「晴信めを叩き潰すのは、今だ！」

と勇み立った。

長時は、晴信が甲府へ引揚げるのを待っていたように、直ちに村上義清軍を主軸とした、信濃の諸豪とともに下諏訪へと侵攻し、諏訪下社に放火するなど荒れまわった。

「おのれ長時め、神をも怖れぬ所業を！」

下社焼失と聞いて、晴信は激怒したが、戦傷いまだ癒えぬ身では、気は焦るもののどうすることも出来ない。

「勘助、村上義清や小笠原長時らが、そこかしこで気勢を上げているようだ。諏訪下社の焼失で、かの地の者共もだいぶ動揺しているようだが、いつまでも放っておけぬな」

「御心配にはおよびませぬ。上原城には室住玄蕃允が頑張っており、諏訪姫と四郎若君をお守りしておりまする」

勘助が、ずばりと諏訪姫母子の名を出すと、晴信は胸の中を見透されたように、一瞬、面映ゆそうに眸を宙に迷わせてから、

「うむ、玄蕃允も、上田原に戦死した兄、板垣信方の仇を討つと言うていた武辺者ゆえ、義清や長時が襲うても、必ずや上原城を支えてくれるものと信じている。しかし、義清も長時もなかなかの強敵であることは、すでに上田原で証明済みだ。いつまでも安気に傷を養うているわけにはいかぬ」

確かに、晴信が焦るのも無理はない。四月初め諏訪下社に放火した小笠原長時は、六月にふたたび下諏訪に侵攻しているのだ。この時は、下社一統の必死の反撃によって撃退され、長時自身、戦傷を負うという苦戦を味わったが、それでも彼は晴信打倒の敵意を燃やしつづけた。

そうした村上、小笠原両強豪の戦意に煽られたように、信濃のそこかしこの小土豪が叛旗をひるがえす様相を見せ出したと思うと、ついに諏訪領にも波紋の広がりを見せた。七月、諏訪衆が叛乱したのである。

「もはや捨ておけぬ。長時めが背後で糸を引いているようだ。甘うは見てならぬ」
「御意」
「直ちに出陣し、長時と対決したいところだが、彼が本陣を据えたという塩尻峠からは、こちらの動きが丸見えの筈……ならば夜陰に紛れてとも考えたが、恐らく長時のことだ、物見の者を放って、こちらの動きを見張っているに違いない」
晴信が出撃をためらうのも無理はない。塩尻峠は諏訪郡と筑摩郡の境にあるが、武田氏が諏訪郡を領有して以来、小笠原領との国境になっていたのだ。出撃すれば、直ちに物見の者の知るところとなり、手痛い反撃をうけるものと覚悟せねばならない。上田原合戦で敗戦という苦い体験を味わった晴信としては、慎重の上にも慎重になって不思議のないところである。
「勘助、われらが敵の物見にも気づかれずに、上原城に入れる策は無いものか？」
「それについては、すでに手を打ってございます。直ちに出陣と決せられませ。早馬をもって諸将に触れた上で御出馬なされば、急ぎ参陣つかまつるでございましょう。その間に敵の物見の兵は排除されている筈であります」
「左様なことが」
言いかけて、晴信はあと気づいて、
「勘助、お多佳の配下どもを出動させたのか？」

「はい、今頃、女どもは虱つぶしに、物見の兵の抹殺に命を削っておりましょう」
「分かった。出陣を触れよ」
晴信は決然と言った。
たちまち、躑躅ヶ崎館は騒然となった。晴信出馬を報せる伝騎が四方へ奔り去るとともに、かねて準備の武器・馬匹・糧秣の点検がなされる中にも、ぞくぞくと武装兵が集まった。
これが諏訪衆叛乱の報がもたらされた、七月十一日同日、三、四時間ほどの間の動向であり、申ノ刻（午後四時頃）には、早くも甲府を発進していることが、『高白斎記』の、
「申刻御馬進メラレ」
十一日の記事によって知れる。
その頃――お多佳配下の女たちは、それぞれに樵夫、炭焼き、農夫の女房風に身をやつして、塩尻峠へといたる街道、間道、けもの道などを潜行、小笠原勢の放った物見の兵の発見に全力を尽くしていた。
最初に敵兵と接触したのは、短剣の手捌きに精妙の技を持つ甲武信岳のお遊であった。顔に炭の粉をなすりつけ、もんぺ姿の彼女が、中食の山椒味噌、焼き握飯で腹を満した後、沢の水で喉をうるおしていた時、渓流沿いに山を下ってきた二人の侍が近づいて、

「おい、女」
と声をかけたのは、若い方であった。
「この辺を軍勢が通らなかったかえ？」
「軍勢？」
「武田の軍勢だ」
「さあ」
お遊は、眉根をよせて、ちょっと考える仕草をしてから、
「気づかなかったな。ここらは御覧の通りの静かな山ン中だから、お侍が大勢通れば、気がつかぬ筈はねえ」
「そうじゃな……」
頷いた奴が、ちらと四辺に眼を走らせたと思う次の瞬間、突然お遊に飛びついたのと、それまで無言で佇んでいた髭づらが、矢庭に彼女を背後から羽交い締めにしたのが同時であった。恐らく彼らは、遠くからお遊の姿を見かけた時から、示し合わせていたに違いない。
しかし、彼らがお遊の体を捕えたと北叟笑みかけた表情が、次の瞬間にさっと凍りついた。もとよりお遊に油断はなく、得意の短剣がひらめいて、前から飛びついた奴が、
「ぎゃっ」

と絶叫してのけぞったため、羽交い締めにしかけた髭づらが、慌てて体勢を立て直そうとしたものの、すでに遅く、お遊の短剣がそ奴の喉を裂いていた。
「げえっ」
鮮血がびゅっと宙を奔った。
これが午ノ刻（昼頃）のことで、それから二時間ほど経った未ノ刻頃には、岩殿のおきょうと笹子のお紺の二人が、杖突峠で敵の物見三人と死闘をしている。峠から上原城を眺望できる近さであり、小笠原勢の物見はこんな所まで進出していたのだ。
実は、小笠原長時は、六月、二度目の諏訪乱入の際、前回に火を放った諏訪下社の地下人らに強烈な反撃を喰らい、自身も負傷の上、侍十七騎、兵百余を失うという手痛い憂き目を見ているのである。が、それでも晴信打倒に起ち上るのだから、この時点における彼は、信濃守護のプライドと、戦国武将の気骨をあわせ持った人物といってよいと思う。彼は、
「晴信などに、わが所領を奪われてなるものか」
と戦意をたかぶらせ、武田軍の諏訪地方における主要基地たる上原城を攻略し、あわよくば余勢を駆って甲府まで進攻せんものと企んでいたのであった。気力充実した三十六歳なのだ。
とにかく、その物見の兵三人の人影を認めた岩殿のおきょうと笹子のお紺は、かねて

定めおいた通り、瞬時にふた手に別れ、草いきれのする樹間を走った。わざと敵の間近まで潜行し、姿をあらわした時には、腰籠に山独活を入れ、左手にも二本ほど握った山里の娘と化していた。

敵兵たちは、木立陰から突然あらわれたおきょうに、一瞬ぎょっとしたが、直ぐに、

「おお、山菜採りか」

「山独活とは……味噌があれば、もう文句はないのだがね」

などと言い、まったく警戒心を示さなかったのは、おきょうを完全に山里の娘と見なしたに違いない。

しかし、敵物見の兵の抹殺は、彼女らに与えられた使命である。おきょうは、

「お侍さん、この独活、採りたてだから、とても柔らかだよ、少し分けて差上げましょうか」

言いながら、左手に握った独活を差出し、それにつられて、敵兵がつい手をのべかけた途端、おきょうの体が跳躍した。

「わあっ」

喉笛を掻き裂かれた奴が悲鳴を上げたのが合図のように、それまで音もなく背後に忍びよっていた笹子のお紺が、頭分の壮漢に体当たりした。短い白刃が光った。

「げえっ」

そ奴は、強靱な体力の持ち主であった。後首から鮮血を噴き出しながらも、お紺をはね飛ばすと、猛然と抜刀して斬りかかった。

「おのれは、武田の忍びか！」

「あ！」

剛刀に胸を薙がれたお紺が、それでも最後の気力をふり絞って跳躍したのは、さすがであった。

「……！」

喉を突かれた男は、声も無く崩れ落ち、折り重なるようにお紺も仆れかかった。

その間にも、おきょうは残る一人と死闘していた。彼女は、お紺が仆れるのを眼の隅で捉えながらも助勢する余裕はなかった。二人目が難敵だったのである。猪首で筋骨逞ましいそ奴は、同僚二人が斃されたのを見て、凄まじい形相で襲いかかり、彼女に体勢をととのえる暇を与えなかった。

「小娘が……許さぬ！」

単なる村娘とあなどって不覚をとったことが、よほど悔しかったらしく、「小娘が」という言葉を二度三度と呪咀するように浴びせるのであった。

ところが、ふいにそ奴が、「あっ」と短く叫んだ。木の根に躓いたのである。その一瞬の乱れをおきょうが見逃す筈はなかった。

「死ね！」

彼女は、そ奴の白刃の陰に、身を投じるように直進した。

「おおっ！」

本能的に、そ奴は白刃を薙ぎ上げた。

「あ！」

脇を薙がれた彼女は、そ奴の胸元へ仆れ込んだ。

鮮血が奔った。

「む……！」

喉に短刀を突き立てたそ奴は、自分がそうなったことが信ぜられぬといった面持で、大きく眼を見開いたまま絶息した。

「……」

おきようは、仰向けに仆れた姿で、しばらく凝と夏空をみつめていたが、やがて静かに目を閉じた。二十四歳の人生であった。

山本勘助が、右のようなおきようとお紺の最期を知ることになるのは、大井ヶ森郷に宿陣中であった。晴信率いる武田軍本隊は、七月十一日夕景、申ノ刻に甲府を発進、そのまま一気に諏訪上原城へと急行する手筈になっていた。

しかし、追いかけるように、上原城代の室住玄蕃允から、諏訪西方衆の叛乱鎮圧の報

がもたらされたので、この大井ヶ森郷に宿陣して、諸部将の参陣を待つことにしたのだ。甲府と諏訪間は、急行すれば、およそ一日の行程、しかし諏訪の叛乱が鎮定されたとあれば、格別急ぐ必要はない。小笠原・村上連合軍との対決にそなえて、こちらも充分なる戦力を蓄える必要があること、上田原敗戦の苦い経験が甦えるのであった。

「勘助、兵の集まりはどうだ？」

「なかなかに渋うございます」

晴信が懸念するように、諸将の参陣がはかばかしくないのだ。『妙法寺記』天文十六年の条に、

「此ノ年モ信州甲州取リ合イ止マズ、一年ニ二度ヲ働キナサレ候、ハヤ奉公ノ人々ハ信州御陣ニ迷惑致シ候テ言語ニ及バズ。此ノ年世中半々ナレドモ銭飢渇ニテ御座候間売買安シ。世間ツムマルコト無限……」

と見える。

そのように世情険しい折も折、年も十七年に変わって間もない二月に上田原出陣と敗戦があり、ようやく一息ついた矢先に、またもや信濃出陣の動員令だ、出足が鈍っても不思議ではない。

しかし、晴信は幸運に遭遇したようだ。同じく『妙法寺記』天文十七年の条は、

「此ノ年世中十分ニ超エタリ。惣ジテ地ヘ落ス程ノ物ハ一切吉。世間富貴ナルコト言フ

ニ及バズ……」

と記して、この年が近年にない豊饒に恵まれた旨を、明るくはずむ息づかいを行間に滲ませているように、七月の出陣時には、すでに豊年の徴候は確認された筈だから、再度の動員令にも渋々ながら応じたに違いない。

その参陣を待ちうける武田軍の陣所に、甲武信岳のお遊があらわれたのは、七月十七日の夕景であったといわれる。勘助がおきょうとお紺の死を知ったのは、このお遊の報告からであった。

「御苦労であった。浄古寺村へ帰って休息するがよい」

戸石崩れ

勘助には、かねてから気にかかっていることがあった。真田幸隆が笑顔を見せないことである。いつ出会っても、挨拶の言葉は普通に交わすのだが、鬱々として心の晴れやらぬ風なのだ。

もっとも、勘助にもその原因が分からぬわけではない。およその推測はつくのだが、勘助などにどうこう出来る事柄ではないのである。

すなわち、勘助の周旋により、幸隆が真田家を敗亡させた仇敵武田家に服属して数年

になるが、今なお、信濃小県郡の旧領を回復できずにいることであった。

勘助の眼に狂いはなく、武田家随身以来の幸隆の活躍には目覚ましいものがあり、信濃先方衆――つまり信濃攻略の先遣隊長たる彼は、その謀略という特異にして優れた才能を駆使して、敵陣営内に内応者を作り、攪乱・落滅せしめたのである。

信濃佐久地方の内山城・志賀城など諸城陥落の裏には、必ずといってよいほど真田幸隆の謀略工作があった。

なにしろ、信濃は幸隆の故郷である。その勝手知ったる故郷が活動の舞台だから、そこかしこに身を寄せて、不遇をかこっている親戚、知友をたどってコネをつけ、これに多額の報償金と、望むほどの処遇をチラつかせれば、ほとんど百発百中の確度で内応者を作り出すことが出来た。

幸隆は、金銭や処遇の餌による裏切りによって、一城が内部崩壊していく姿を見ても、いささかも心に痛みを覚えることはない。いつも冷然とした面持で、

（これが戦国の乱世なのだ。われらが真田家を再興させるためには、いかなる汚い手段を用いても、きっと落城させずにはおかぬ）

という例の信条を、胸中に呪文のように呟くのである。

武田軍完勝に終わった塩尻峠合戦の舞台裏でも、お遊ら影の女たちの活躍もさることながら、真田幸隆による謀略工作が大きく勝因をもたらしたといってよいのである。な

にしろ、小笠原長時が片腕とも頼りにした仁科道外はじめ筑摩郡洗馬郷の豪族三村長親らが、決戦直前、揃って戦場に背を向けたのも幸隆の工作によるのだから。

それと知った長時が、

「何たることぞ！」

と、額を叩いて口惜しがったというのも無理はない。

このような真田幸隆だが、それでも武田家譜代の部将たちとは、一種微妙な区別を感じさせられた。飽くまで幸隆は、中途採用の先遣隊たる先方衆隊長として、いつの合戦にも先頭切って敵陣に斬り込まねばならぬ者と見なされていたのだ。

その日頃は冷徹に過ぎるほど冷徹で、鬱々とした表情を崩さず、決して人に笑顔を見せることのない幸隆が、ある日、躑躅ヶ崎館の大廊下で勘助を呼び止めた。

「山本殿……」

その時の幸隆の声が弾み、顔が明るく綻んでいたのである。晴信の前から退出して来たらしく、胸元に何やら書状を大事そうに挟んでおり、「ちょっと」と言って、傍の座敷に勘助を引き入れると、

「お陰様にて、只今、殿よりかような御朱印状を頂戴致しましたゆえ、第一番に御報告せぬばならぬと思うていたところでした。かような場所で失礼とは存知るが、ともかく御貴殿にだけは、御覧願わずにはいられない」

冷徹な幸隆が、眼もとをうるませ、声を弾ませて披露した晴信状には、

「其ノ方、年来ノ忠信、祝着ニ候。然レバ、本意ノ上ニ於テ、諏訪方三百貫、並ビニ横田遺跡上条、都合千貫ノ所、コレヲ進ジ候」

とあり、日付は天文十九年七月二日と記されてあった。

「これはお目出度い。真田殿、ついに宿願が達せられましたね」

「いや、まだまだです。本意ノ上ニ於テでござるから、目的を達せなけば、単なる夢に終わりかねませぬ」

「なんの、なんの、御貴殿のことだ。必ずや御朱印通り、千貫の所領を実現なされましょう。御周旋申したわたしとしても、これほど嬉しいことはありません」

勘助は、心から祝意を述べた。実際、武田家への随身を進めた者として、晴れやらぬ幸隆の姿を見るのは辛いのである。

「日を改めて御礼を……」

と言う幸隆の謝辞を背に、その時は袂を分かったが、幸隆の祝宴は実現しなかった。七月三日、すなわち、幸隆が朱印状を賜った翌日、晴信が信濃の難敵・村上義清討滅の兵を催したからであり、幸隆に与えられた朱印状は、このためのものであったのだ。

（ようやく、貰えた朱印状を、夢に終わらせてなるものか！）

今、朱印状を手にした幸隆の脳裏に、一瞬、茫々と去来し、点滅したのは、上州の一

族諸家の間を、転々と流浪漂泊した苦渋に満ちた日々の記憶であった。寺僧衆にすら厄介者視された屈辱の思いである。

（もう二度と、あんな思いは味わいたくない。しかし、そのためには、何としても村上義清を討滅せねばならぬ……！）

幸隆は、改めて胸に言い聞かせる。人間、誰しも一生の間には、この関門を突破しなければ、前途に明るい飛躍は望めない、といった転機が一度や二度はあるもので、真田幸隆にとっては今がその時であった。今こそ全智全能をかたむけ、全気力をふりしぼって体当たりするに価する、生涯での一大関門であるといってよい。

甲府進発と同時に、幸隆は晴信の率いる武田軍本隊とは別に、黒い影のように裏街道の謀略工作を開始した。

幸隆は、必死に人脈、地縁をたどった。晴信の特命により、金銭は惜しみなくバラ撒いた。戦国武将といえども、金銭という人間的な世界から逃れることは出来ない。とりわけ、合戦に幾千幾万の将兵を動員する村上義清クラスの城主の場合、豊かな軍資金が無ければ、兵も食糧も集まらないのだ。

言うなれば、経済的基盤の強弱が、一城興亡の命運を握っているといってよく、それは村上義清や小笠原長時などには、遠くおよばぬ小領主たちとて変わりはないのである。

苦労人の幸隆は、その点を知り尽くしているから、小領主たちの泣き所に打ち込む矢に無駄はない。

「連年の合戦騒ぎで、さぞかしお疲れでござろう。まっこと浮世を渡るは難儀なものですな。ま、これにてしばし凌がれよ」

幸隆は、彼らに惜しまず甲州金を与え、武田方に寝返ってからの優遇を確約したため、村上義清の縁類たる清野道寿軒一族が寝返ったのを手始めに、清野とおなじ信濃埴科郡の城主寺尾一族、および高井郡の須田新左衛門など、村上陣営の有力部将が矢継ぎ早に誘いに応じた。

（よし、これにて、わが真田家の回復も、あと一歩の地点にまで近づいたようだ！）

さすがに幸隆は、胸を躍らせた。一家一族が団欒する光景が、あざやかに甦えるのである。

そのころ武田晴信は、七月三日に甲府を進発以来、まず塩尻峠合戦後、拠城深志城（松本城）に籠っていた小笠原長時を撃破、その支城を掃討し、いよいよ村上義清の拠る戸石（砥石）城攻略にとりかかろうとしていた。

義清の本拠は埴科郡葛尾城だが、彼は小県郡の支城戸石城に移って、武田軍を迎い討とうと戦備を厳しく固めていたのである。

深志城を逐われた小笠原長時も、義清を頼って合流しており、高井郡の古豪高梨政頼も顔を揃えていた。

この高梨政頼は、越後春日山城主長尾景虎、後の上杉謙信の縁類であり、村上義清ら同盟軍にとって心強い存在となっていた。

義清が典型的な戦国武将であることは、すでに上田原合戦で証明済みだ。なにしろ、自ら太刀をふるって、馬上、二度三度と激しく決戦を挑み、晴信に傷を負わせ、深い挫折感を味わわせた漢である。

しかも、年齢五十歳。対する晴信はといえば三十歳。

「武田の小わっぱ奴、こんどこそ息の根を止めてくれる！」

と意気込んで不思議はない。

一方、晴信としては、義清が難敵たることは胆にこたえているから、決戦に当たっては慎重である。真田幸隆に朱印状を与え、一層の謀略工作を命じ、わざわざ、

「金銭を惜しむな」

と言い、多量の甲州金を授けたのもそのためであった。

晴信も、武力にも優る甲州金の威力は知っているのだ。実は、この前年三月、幸隆は充分なる甲州金と、七百貫の旧領回復の朱印状を餌として、これまで絶対無理と思われていた望月源三郎ほどの者をも釣り上げているのである。

駒井高白斎も、

「（三月）十四日土用、七百貫文ノ御朱印望月源三郎方へ下サレ候。真田渡ス」

と記録しており、甲州金の威力の凄さをまざまざと示しているのだった。

武田家には、黒川山、御座山などから豊かに黄金が産出され、それら甲州金と称される黄金は、強大な軍事力を支えて余りあり、幸隆の謀略買収工作にも黒い威力を発揮するのである。

村上義清が、

「武田の小わっぱ奴！」

と言うならば、晴信もまた、

「義清め、あのままでは済まさぬ！」

と唇を固く噛みしめるのであった。

八月十九日、長窪（長門町）に着陣した晴信は、こんどこそ義清と雌雄を決し、上田原合戦での敗北の雪辱を果たすつもりでいた。が、敵状偵察に数日が過ぎ、二十五日を迎えたところ、このたびの合戦の吉凶を占うような光景が眺められた。

「何だ、あれは?!」

兵たちが騒いだのも無理はない。陣所の東南の上空にかかる黒雲の中に、赤い雲がむれ立つように見られたのだ。

しかも、本陣を戸石城に程近い屋降なる地に移した翌二十九日にも、夕景、西空に赤黄色の雲があらわれ、紅い虹のようにかかって消え失せた。

「嫌な空模様だ……」

勘助は眉をひそめた。一瞬、不吉な想念が脳裏をかすめたが、彼は頭をふって、払いのけ、思いを口外しなかった。

思えば、これら異様な空模様は、武田軍の運命をそれとなく暗示していたといってよい。晴信の意欲如何にかかわりなく、どうしても戸石城を陥すことが出来なかった。

「何たることぞ！」

晴信は呻いた。

戸石城は、稀代の堅城であったのだ。重畳なる山尾根を利用して、南から村上氏の米山城、戸石城、本城、桝形城と連立構築されており、切り立った断崖に守られて、登り口は南に一ヶ所のみという要害なのである。

むろん、武田軍得意の騎馬戦など出来る筈もなく、その細い山道を直進した武田軍の将兵は、山上から射かけられる弓矢の恰好の餌食とされ、おびただしい死傷者を出すばかりであった。

戸石城のあまりの堅城ぶりに、晴信は眉間に苛立ちを刻んだ面持で、

「義清め、城に立て籠ったなり、姿を見せぬわ。勘助、幸隆の工作は、どのようになっているのだろうか？」

と言ったのは、内応者による内部崩壊でしか、この城は陥せぬという思いからのようだ。

「あの御仁のことです。恐らく懸命に奔走してあられることでありましょうが、会うて様子を聞いて参りましょう」

答えた勘助は、晴信の前を退ると、直ちに丈太郎に供を命じ、馬を駈って幸隆の陣所を訪ねた。

山国の季節の移ろいは早い。緑したたるばかりであった景色も、八月に入っては山肌を白い芒の穂が埋め、九月には紅葉の気配を色濃くしているのである。

しかし、このとき幸隆は、埴科郡の寺尾城へ赴いたとかで留守であった。恐らく内応者を作る手蔓を求めているに違いない。

「参ってみるとするか……」

勘助は、幸隆の後を追って、さらに馬を奔らせた。とにかく、戸石城の攻略が成るか成らぬか、城の内部崩壊如何にかかっている現状では、何としても幸隆に会っておきたいのだ。

ところが、勘助が本営を離れた翌朝未明、思いもよらぬ大事が発生した。まこと恐るべきは、村上義清であった。これまで戸石城に籠っているとばかり思っていた義清が、何と信濃諸豪族の連合軍およそ四千の騎馬隊を率いて、武田軍本営の背後から襲いかかったのだ。

「何たることぞ！」

と、奇襲をうけて悲痛な声を放ったのは、老将横田備中守高松であった。

横田高松は、食禄三千貫、戦場に臨むこと三十四度、身に刀創槍疵三十一創という猛将だが、武田譜代の臣ではない。近江佐々木氏の流で、武田信虎の募集に応じて随身、以来、戦功をつんで武田譜代の将と並び称されるまでに出世した、という異色の経歴の持ち主である。

その高松が、悲痛な声を放ったのには、実は理由があるのだ。敵の動きをいち早く察知し、機先を制して奇襲を仕掛けるのは、彼のもっとも得意とするところである。それが村上義清にお株を奪われた形となったのだから、大いに自尊心を傷つけられて逆上したのも無理はない。

「おのれ義清め、許さぬ！」

憤激した横田備中守高松は、自ら白刃をふるって先頭に立ち、押し寄せる騎馬隊へ斬り込んでいった。果敢な反撃は、しかし次々と波状的に来襲する騎馬隊の中に、たちまち呑み込まれた。

「横田殿、討死！」

乱陣の中に、その絶叫が異様なまではっきりと聞えた。

必死の防戦により、武田軍は辛うじて本営を守った。そして急遽態勢を立てなおして

反撃をはかったが、ついには重い武具をかなぐり捨て、兵粮まで置き去りにして戦場を離脱するていたらくとなった。まさに上田原敗戦に次ぐ武田軍の完敗である。

例の『妙法寺記』も、

「横田備中守ヲ始メトシ。随分衆千人バカリ討死ナサレ候」

と記しており、世にこの敗戦を「戸石崩れ」という。なお、討死したる者として、小山田信義配下の小沢式部、渡辺雲州らの名を書き留めている。

この敗戦に、もっとも落胆したのは、やはり真田幸隆であった。

「またもや、振り出しに戻ってしもうたわい！」

幸隆は、額を叩いて痛嘆した。村上陣営が離反者で内部崩壊を起す直前、武田軍が惨敗するという意外な事態を迎えたからである。これで彼の必死の地下工作も、戸石城攻略には役立たずに終わったわけだ。が、彼は諦めなかった。武田軍の徹退後も、敵地を潜行、一段と力をこめて買収工作を続行した。胸の奥に、

「無駄な骨折りに終わらせてなるものか！」

と呪文のように呟きながら。

勘助の休日

寺尾城近くで、武田軍敗走と知った瞬間の、真田幸隆の顔の表情を、勘助は終世、忘れることは出来まいと思ったものである。

幸隆は、無念の形相凄まじく、

「あの武田の殿のこと、よもや、このまま挫けてしまわれるとは思わぬが、山本殿、殿をシカと頼みまするぞ」

「それは、もとより……で、真田殿はこの後どうなされる。ぐずぐずしていると……」

「わたしは、殿の再起を信じて、このままひそかに敵の切り崩しをつづけ申す。断じてつづけ申すゆえ、貴公は一刻も早くこの地を脱出し甲府へ戻って反撃の気運を作って下されい。お頼み申す」

「心得ました。では、お気をつけて……」

勘助は、幸隆の悲痛な言葉に、胸のふさがれる思いがした。真田家復興の鬼と化した幸隆にすれば、このまま晴信が信濃経営を断念するようなことになったら、それこそ泣くに泣けない無念の極みであるに違いない。

（この漢のためにも、殿にもう一度奮起して貰わずばなるまい）

勘助は、幸隆と別れると、間道伝いに戦場を脱出した。が、甲府に戻ってみると、命からがら逃げ帰った失意の晴信は、躑躅ヶ崎館の居室に籠ったなり、人に会わぬという。

「止むを得ぬ。丈太郎、浄古寺村へ参ろう」

勘助は、暗い眼をして言った。

大気澄み切った晩秋の夕景――野末に野焼きの火がちらちらと望まれた。勘助・丈太郎主従が、久しぶりに浄古寺村の御支配屋敷に姿をあらわしたのは、そのような時分であった。

勘助は、ひどく疲れを体に刻んでいた。顔の色もすぐれず、馬から降りた後の歩行も、不自由な足を引きずって、見るからに大儀そうである。

それでも、丈太郎が見かねて、

「お師匠様」

と体を支えてやろうとすると、

「構わずともよい……それより馬の仕末を」

と窘める勘助であった。

「如何なされました。どこぞお加減が悪いのではありませぬか」

出迎えた多佳女が、眉をひそめると、勘助は首をふって、

「いや、少々、草臥れただけじゃ。それほど深く心配せずともよろしい。甲武信岳のお

遊から、すでに報告をうけていようが、戸石攻めでは、思いもよらぬ大負け戦となった。残念ながら、おきょうやお紺の死も無駄死となってしもうたゆえ、せめて二人の供養をしてやらずばなるまい」

「山本様のお気遣い、さぞかしあの娘たちも草葉の陰で喜んでおりましょう」

冷厳気丈な多佳女も、勘助の言葉に心からなる謝意をのべたことであった。事実、非情になることが、おのれが使命を無事に果たし、また、おのれのいのち長らえる「鍵」であると、日頃、厳しく仕込まれた女たちにも、同僚おきょうとお紺の凄絶な最期には、強い衝撃をうけていたのである。

勘助の言葉をうけて、多佳女は直ちに、

「しずか、これよりおきょうとお紺の供養を営むゆえ、皆に集まるよう伝えて来なさい」

と命じた。

「はい」

答えたしずかは、小走りに女たちの溜り場へ走り去った。

「しずかも、ここでの暮らしに大分馴れたようだね。血色も良く、見違えるほどに元気になった」

「ええ、あの娘には賄方を預かって貰うておりますが、なかなか美味しいものを作ってくれ、皆の評判もよろしいようで、わたしも吻としておりまする」

「それは、良かった……」

「山本様、あの娘には、術は仕込みませぬ」

「……」

多佳女の意外な言葉に、勘助が搏たれたように息をのんだ時、当のしずかをはじめ、お遊ら女たちが集まって来た。

多佳女は、さっと取締の顔と言葉に戻って、広場に一同を整列させると、

「山本様のお言葉により、これよりおきょうとお紺の供養を営みますゆえ、直ちに用意を致すように……」

と命じた。

むろん、供養は簡素に行われた。広場の椎の樹の下に二月堂机を据え、芒の穂を飾り、故人らの好物だったという甘酒を二椀供えた前に頭を垂れたのである。

夕闇が這いだすと、篝火が焚かれ、一同に甘酒やドブロクが振る舞われた。最初はしめやかだった女たちの間にも、やがて笑い声が聞かれるようになった。

「山本様、これでおきょうやお紺も、心安らかに成仏できることでありましょう。お遊たちも、口にこそ出さねど、喜んでいるのが、わたしにはよう分かるのでございます。ほんに良きことを仰せになって下されました」

多佳女は、勘助の椀に濁り酒を注ぎ、頭をさげる仕草をしてから、
「しずか、あなたも山本様にお注ぎなされ」
「はい」
しずかは、何やら丈太郎と話していたが、慌てて酒壺を持って、勘助の側に寄る。篝火のこぼれ落ちる火明りに浮き出た彼女は、見違えるまでに表情も豊かなのであった。
「しずか、丈太郎と何を話していた？」
「丈太郎さんたら、後で蕎麦掻きを馳走して欲しいんですって。よっぽどお好きなんですね」
「ほう、蕎麦掻きか……それは良い。わしにも馳走してくれんかな」
「かしこまりました」
「しずか、そなたの蕎麦掻きの蕎麦は、やはり、スマルまんろく粉八合、頭巾落としの粉一升、の時刻に蒔かれたものやも知れぬな」
「あら、総取締様には、よう覚えていらっしゃいますこと」
しずかが驚くと、勘助は微笑して、
「丈太郎が強情るように、そなたの蕎麦掻きは美味じゃからな。蕎麦に関わる話も、脳裏に腰を据えてしまうようだ。ともあれ、一椀早う頼む」
「取締様も如何ですか？」

「もちろん、わたしを忘れては困ります」
多佳女は、笑いながら答えてから、女たちに向かって、
「しずかが、饂飩を作ってくれたそうだから、誰ぞ鍋を搬んで来なされ」
「はいっ」
酒気をおびた嬌声にも似た返事が聞かれ、二人の女が厨の方へ走った。薪を組んだ焚き火も、三ヶ所ほども焚かれ、その火明りに女の影が揺れる。薪のハゼる音がパチパチと聞えて、夜は更けていくのである。
「多佳どの注ごう。丈太郎も飲めい」
酒壺を手にする勘助は、いかにも心地よさげであり、それと気づいた丈太郎は、
（あんなに疲れておいでだったのに、すっかり元気を取り戻されたようだ……お師匠様には、この浄古寺村の屋敷が、よほど相性がよいのか、それとも別に理由があるのであろうか……？）
と胸中に呟いていた。
勘助・丈太郎主従の前に、思わぬ人物が姿をあらわしたのは、この翌日のことであった。かねて越後の春日山城下に潜入し、長尾景虎の動向を探索している筈の黒駒の阿久里である。
しかも、彼女は三歳になるという幼女を伴っており、勘助と多佳女に対し、これは柏

崎の漁師との間になした子であるといい、許して戴けるならば、忍びの身分から解き放っては貰えませぬかと愬えた。

「自分勝手な申し分だとは、わたしも存知ているつもりでございます。正直いって、一時は、このまま身を匿そうかとも迷いました。しかし、いずれは探し出されて、厳しいお仕置きを受けるものならば、いっそ思い切ってお頼みしてみよう、それで許されぬものならば諦めて、わが子ともども死ぬ覚悟で立ち戻りてございます」

神妙に述べる阿久里の顔には、すこしも化粧のあとが見られず、いかにも海辺に暮らす漁師の女房らしく、日焼けして健康なのであった。

「阿久里」

しばしの沈黙があって、多佳女が阿久里を真っ直ぐに見据えて言った。

「仕合せなようですね」

「はい、連れ合いもよくしてくれますし、わたしが忍びの者とは気づいておりませぬ。お許し願えるならば、春日山城主長尾景虎はもとより、まったく武家の世界とはかかわりなく、柏崎の浜辺で烏賊の一夜干しを作りながら、亭主やこの子とともにただただ穏やかに一生を終えたいものと願う次第でございます」

「……」

多佳女は、幼女が母親阿久里の胸元にすがりつき、その髪を阿久里がいとおしげに撫で擦ってやるのを見守りながら、どうしたものかと勘助を仰いだ。

勘助は、最前から眼を離さず阿久里をみつめていたが、低声に、

「阿久里、そなた武田家を忘れられるか？」

「え？」

意外な勘助の問いに、阿久里は質問の真意が摑めず、困惑した面持で、

「どのようなことでありましょうか、その武田家を忘れられるかとは？」

「それは……そなたが、これまでこの甲斐の国や浄古寺村の当屋敷に在った頃、その眼で見、その耳で聞き知ったる、武田家に関する一切を綺麗さっぱりと、忘れ去ることが出来るかと訊いているのじゃ」

「あ、そのことなれば、忘れ去ることが出来ます……絶対に忘れまする。必ず、連れ合いや、この子のためにも！」

阿久里にも、勘助の言葉の意味するところが読めたのであろう、ぱっと瞳に光を点じ、返辞を弾ませた。

「総取締様、きっと、きっと忘れますゆえ、どうぞ、どうぞ……！」

「よいか、阿久里」

勘助は、静かに念を押すように、

「よっく聞け。もしも、そなたが故意にせよ、迂闊にせよ、これまで知りえた武田家の

秘事を、他へ洩らしたと知れた時には、いかに身を潜め、逃げ隠れしたとて、草の根を掻き分けてでも探し出し、必ずや厳しく処断されるものと覚悟せよ」

「はい、胆に銘じておりまする」

「阿久里そなたも、もはや今生では、二度と当屋敷に参ることはあるまい。悔い無きよう昔の仲間と語らった上で、柏崎へ帰っていくがよい」

「では、では……お許しを……あ、有難うございます」

「阿久里、良かったわね。山本様の御温情、決して忘れるではありませぬぞ」

言葉を添える多佳女に、阿久里はヒシとわが子を抱き締めて、眸に涙をため、

「決して、決して……」

と言葉を詰まらせるのであった。

そして阿久里母子は、勘助がゆるりと過ごして帰れと勧めたにもかかわらず、「連れ合いが待っておりましょうから」と言い、この翌朝には立ち去っている。

多佳女はじめ、お遊ら仲間に見送られた母子は、秋色深い野の末に遠ざかっていった。すっかり落葉した雑木林に、朝の光が薄靄を切り裂いて射し込んでおり、しばしば振り返っては辞儀をし、また小鳥の囀りに足をとめて仰ぐ母子の姿に、多佳女らは遠くに忘れ去っていた温和な情感を甦らせるのであった。

勘助が、「わが休日は終わった」と言い、甲府に帰ったのはこの翌日のことである。

諏訪姫入水

天文二十年（一五五一）五月――「戸石崩れ」以来の武田晴信の憂悶を、一気に吹き飛ばすような快挙がつたえられた。

あの戸石城が陥ちたのだ。

無論、陥したのは、裏切り請負人真田弾正忠幸隆である。

すでに、真田家復興の鬼と化した彼に、諦めという文字は、無い。前年、村上義清の率いる信濃の土豪連合軍に奇襲されて惨敗した武田軍が、信濃から撤退後も一人残留した幸隆は、さらに力をこめて買収工作を続行したのだ。

（これまでの苦労、水の泡にさせてなるものか……いまに見ておれ！）

口に呪文のように唱い、身辺に小暗い翳りを漂わせながら、信濃のそこかしこの土豪を狙い撃ちにしていくのである。

そして、ついに「甲州金」が効力を発揮した。高井郡の高梨政頼の買収が成功、村上陣営からの離脱を承諾したのだ。すでに述べたように、高梨は越後の長尾景虎（上杉謙信）の縁類であり、村上陣営中での重鎮である。彼の寝返りによる精神的影響は大きい。

「どうやら、高梨政頼が武田晴信に屈したらしい」

という噂は波紋のごとく拡がり、信濃諸豪の動揺を呼んだ。

「勘助、聞いたか。真田弾正めが、大きな星を一つ、射落としてくれおったわ」

「御意」

晴信が、久しぶりに眉を開き、明るく言葉を弾ませるのに答え、勘助もまた、

「真田殿ならば、必ずやと思うておりました。まだまだ、先が楽しみでござる」

と親友の働きを称えた。

すると、側から、

「さ、それはどうかな。真田弾正の働きというのも、これ位で精一杯やも知れぬ。あまり期待せずいるほうが、あとで失望せずに済むというものよ」

と、えらく突き放すような物言いをしたのは、足軽隊将の長坂長閑斎であった。この人物、諏訪姫の側室問題の際も、賛成する勘助に対し、強く反対の意をのべたが、以来、ことあるごとに敵意を露わにするのである。とりわけ新規召し抱えの勘助が、おのれと同じ足軽隊将に列せられてからは、行き会っても顔を背けるほどになっていた。

（山本勘助などという奴は、法螺とおべんちゃらで世を渡って来た男だ。われらが殿に、危険極まる諏訪姫を取りもつなど、もってのほかなる所業である！）

と、仲間に息巻いたという噂は、勘助の耳にもつたわっている。が、勘助は、

（この狭い甲斐国しか知らぬ、料簡の小粒な長閑など喧嘩の相手にするも馬鹿らしい）

と笑って済ませている。

そして真田幸隆は、勘助の期待に答えるように、また、長坂長閑斎の冷笑を吹き飛ばすがごとく、五月二十六日、難攻不落と思われた戸石城の単独攻略を決行したのだ。

「よいか皆の者、脇見をするな。ただただ、前の一点を睨んで進め、怯まず進めい！」

幸隆の率いる真田勢は、かつて武田軍が進軍をはばまれた山屋根の険路を、六文銭の旗印をなびかせて直進した。

「進め、進め！」

「怯むな、怯むな！」

読経のように声を合わせて進むと、意外にも少しの抵抗もなく、大手口に辿り着くと、驚いたことに城門が内から開かれて無血入城となった。黄金の威力が、この奇蹟を可能にしたのだ。

「これで成った！」

幸隆は、この瞬間、武田晴信から与えられた朱印状が、現実の物となったことを感じたが、拠城の葛尾城に在って、それと知った村上義清は、一瞬、呆然とし、

「われ、甲州金に敗れたり！」

と呻いたといわれる。

もっとも、これほどに鮮やかな幸隆の殊勲も、例の『高白斎記』は、

「二十六日節。砥（戸）石ノ城真田乗取」

と、簡略に過ぎるほど簡略に、素っ気なくしるすにとどめている。

幸隆の入った戸石城は、一転して、本城たる葛尾城攻略の強力な拠点となった。攻守、所を代えるとは、このことであった。たちまち村上陣営は、身辺から裏切り者がいつ出るか分からぬ、という疑心暗鬼に駆られ、戦々恐々として浮き足立った。と見て勘助は、

「殿、真田弾正殿の苦労、無駄にしてはなりますまい」

「うむ、勘助、いよいよ、村上義清とどめの一戦を挑み、積年の怨みを晴らす時が訪れたようだな」

「御意、一気に押しましょうぞ」

勘助は、晴信の顔に、かつてのような生気と精悍さが甦ったのを見て、内心にほっとする思いであった。

晴信は、早刻、村上義清討滅の軍を起した。勢いに乗った武田軍が、「風林火山」の戦旗をひるがえして迫ると知った義清は、ついに葛尾城を捨てて北へ奔った。彼は、越後春日山城の長尾景虎を頼ったのである。

「長尾景虎が……」

勘助は、腕を組んで凝と考え込んだ。ふと脳裏を、例の子連れの阿久里が洩らした一語がよぎったのだ。彼女は、十枚の烏賊の一夜干しを手土産に持参したが、もう一つ、

藤林多佳女配下の忍びの者、最後の御奉公として、

「わたしの見るところ、越後の長尾景虎という若者は、さして遠からぬ将来、必ずや武田の殿の難敵となるに違いありませぬ。どうぞ心して下されませ」

という言葉を残して立ち去ったのである。

その阿久里の言葉を裏づけるように、かねて小田原の北条氏康軍に抵抗していた関東管領上杉憲政が、上州平井の居城を捨てて、これまた長尾景虎を頼ったと思うと、後を追うように信濃守護たる小笠原長時もその懐中に逃げ込んだというのである。

しかも上杉憲政は、上杉家重代の太刀「天国」はじめ関東管領補佐の綸旨、大織冠藤原鎌足以来の系図等を景虎に贈り、養子の縁を結んだのだ。

ここに長尾景虎は、名門関東管領山内上杉姓を名乗る身となった。関東管領は、室町幕府の職名であり、威権、将軍に次ぐとまで称された顕職である。が、時移り、小田原北条氏のような新興勢力の台頭とともに、その威権も昔ほどの力はなく、急速に色褪せた感はまぬがれない。

しかし、名分を重んじる景虎は、その肩書きを真っ向うにかざして、関東の争乱に割り込む意欲を示しているのだ。管領家の膝元だった上州は、北条・上杉・武田の三勢力の草刈り場と化し、いよいよの紛糾が予感されるのであった。

そもそも、長尾景虎という漢、つねづねから、

「依怙によって弓箭は取らぬ。筋目を以て何方へと合力いたす」

というのを信条としているのだ。「依怙」は「私利・私欲」といったところか。筋を通しているなら、誰にでも助勢すると心底から思い込んでいるのだから、信濃侵攻をはかる武田晴信などにとっては、まことに扱い難い相手なのである。

「勘助、村上義清も小笠原長時も、厄介千万な漢の袖に隠れおったものだな」

晴信が渋い顔をしたのも無理はない。義清や長晴に救援を求められた景虎は、必ずや晴信の信濃侵攻に立ちふさがるに違いないからだ。しかも、新関東管領の肩書をふりかざして。

「今後、景虎の動きから目を離せませぬ」

勘助は、私欲によっては動かぬという、風変わりな若い武将の出現に、いささかの戸惑いと、やがて自分と遭遇するであろう光景に想いを馳せ、武者震いにも似たものを覚えたものであった。

その勘助が、われにもなく、感情をとり乱した変事が突発した。諏訪御料人が、諏訪湖に入水自殺を遂げてしまったのだ。

「何たることよ……！」

伝騎によって、それと知った瞬間、殆ど動転した勘助は、

「姫のお命を縮めたのは、この勘助じゃ」

と呻いたことであった。

当時、晴信に油川夫人なる新たな側室が出来たため、諏訪御料人は、上原城の支城――湖畔の高島城に身を寄せていたが、突如、乱心して諏訪湖に身を投じたのだ。

恐らくこれは、敬愛する父諏訪頼重を死に追いやった晴信に、身をまかせ、子までなしてしまったことを、彼女は諏訪氏の血をうけた女として自責するあまり、その繊細な神経を無残に分裂させてしまったものに違いない。

（わしの一言が、姫の運命を決定してしまったのだ。彼女の入水自殺原因の一端は、この山本勘助にもある）

日頃、冷徹を自認する勘助が、おのれにも不思議なほど、諏訪姫の自殺に衝撃をうけているのであった。勘助には今なお、御料人というより、姫と呼んだほうが彼女に似つかわしいという思いがあるのである。

勘助は、晴信に願い出て、高島城へと馬を奔らせた。後につづく丈太郎には、勘助の背がひどく悲しげに見られた。

（御師匠様は、泣いておられる……）

事実は勘助は、憤っていたのである。晴信も諏訪姫の死を知って悲痛な顔であったものの、正室三条夫人と新側室油川夫人に気兼ねして、わしは動けぬと歎いてみせ、

「勘助、諏訪の姫をねんごろに弔うてやってくれい」

と言ったのだ。

（殿も多情に過ぎる！）

勘助の憤りは、このことであった。諏訪姫の人柄があまりにも清らげであっただけに、この思いにひとしおなものがあるのである。

「丈太郎、少し速めるぞ！」

勘助は、怒鳴って、ぴしりと一鞭、馬に当てた。

諏訪姫の葬礼を終えた夜、勘助は望楼に立って諏訪湖を眺めていた。満天の星空の下に、暗い湖がひっそりと静まっており、

（これが姫の恋うていた諏訪の湖か……わが一語から、悲しい道を辿らせてしもうたようだが、もう済んだことだ、姫よ、ゆっくりと眠られよ……）

湖心に諏訪姫の哀しげな面影が見えるような、しいんと沈んだ感覚の勘助であった。

「御師匠様」

ふいに丈太郎が、いかにも感慨深げに、

「不思議なものですね。駿府で安倍川の流れに小石を投げていた私が、今、こうして御師匠様と御一緒に、信濃の高島城の望楼から諏訪湖を眺めているのですから……これから先、私はどのようになるのでしょう」

「分からぬ。そなたは、まだ若い。恐らくは、これからも思わぬ事態に遭遇したり、いろんな人物にもめぐり会うに違いない。われらの殿も、甲斐の国に信濃の国を併せて、この戦国乱世を生き抜こうと懸命であられ、真田弾正殿もまた、わが家の再興を願うて必死の働きをしているが、それとてこの先どうなるかは、誰一人として分からぬのだ」

「知ることは出来ないのですね」

「うむ、思えば、そなたは合戦で討死した侍の遺児であり、しずかも同様の身の上だ。いつぞや、浄古寺村の屋敷にて、そなたとしずかは、スバルの星が頭上にある時刻、蕎麦の種を蒔き、やがて収穫し、蕎麦掻きを食すような平穏無事の暮らしを望んでいたようだが、武士の世界にある限り、絶対に望めぬものと覚悟せねばなるまい」

「はい、そのように思うておりまする」

「いや、そなたらは、まだ若いのだ。小源太が商人に転身したように、他に生きる道は残されている筈だ、わしへの遠慮なら無用ぞ」

「いえ、私は、御師匠様に従いて参ります」

「困った奴だ。これからは、厳しい合戦が待ちうけているぞ」

勘助の脳裏には、越後の長尾景虎という戦国の申し子のような若い武将の名が浮かんでいた。

勘助の想定する、これからの厳しい合戦とは、その長尾景虎こと、新関東管領上杉政虎との激突である。事実、景虎は、上杉憲政の一字を貰って政虎と名乗ったものの、の

ち将軍足利義輝の一字を賜って更に輝虎を名乗り、さらに入道して謙信と号するのは、後のちの元亀元年（一五七〇）四十一歳の時だが、宿命的なライバル武田晴信は、永禄元年（一五五八）三十八歳にして、すでに信玄と号している。ゆえに、これから先は、世に通る上杉謙信と、武田晴信ならぬ信玄の名で話の先を進めたい。

勘助には、女忍黒駒の阿久里の予言が的中した、との思いが濃かった。阿久里は、かつて越後の春日山城下に潜入し、長尾景虎の動向を捜索していたが、縁あって柏崎の漁師と結ばれて子まで儲けた。

それで覚悟を定めた彼女は、浄古寺村の屋敷に還って、忍びの身分を解かれんことを乞い、これを許した勘助に対し、女忍最後の奉公として、

「わたしの見るところ、長尾景虎は、やがて必ずや、武田の殿の難敵となりまする。この事、きっとお心に止めおき下され」

との言葉を残し、柏崎の浜辺へと戻って行ったのだ。

以来、事態は阿久里の指摘通りに進行した感があった。執拗なまでに、景虎の晴信への挑戦が繰り返されたのである。景虎こと上杉謙信は、北信濃の国境周辺の要請に応じて信濃川中島に出撃し、すでに武田軍と三度も対戦、いずれも勝敗の結着がつかぬままになっているのだ。

その二度目の対戦から帰還した際、思いがけなく勘助の屋敷を小源太が訪ねて来た。

いや小源太といっては正確を欠く。今や小源太は二代目塩屋宗右衛門である。男子の実子を持たぬ先代宗右衛門は、小源太の商才に惚れこみ、これを女婿として迎い、おのれはさっと隠居してしまったのだ。

初め鉄砲五挺の購入で苦心した二代目だったが、すでに武田家に五百余挺を納入している商才を示しており、武田家はもとより今川家にも信頼厚い、脂の乗り切った大商人と化していた。

その二代目宗右衛門が、勘助に懇えた心情は意外にも、勘助が諏訪姫に抱いたものと同質のものであった。

「山本様、こたびの合戦にて、多佳女配下の者たちが多数討死したようですが、あれらは皆、わたしが見い出し、浄古寺村の屋敷へ送り込んだ女ばかりです。確かに、あの娘たちは、いずれも合戦で親を亡くしたり、はぐれて孤児になった者ばかりで、その日の暮らしにも困っていたのを拾い上げました。しかし、平凡ながら、平穏な一生は送れた筈でした。その運命を狂わせてしまったのは、このわたしでございます。まこと、罪深いことをしたものと、今となって悔やんでいるものの、どうするすべもありませぬ」

明らかに二代目宗右衛門は、かつての喜多嶋小源太ではない。真率な面持で、

「わたしだけが幸せになっては、申しわけがございませぬ。許されることなら、年老いたとか、傷ついたため、もはやお役に立てぬといった場合、どうぞわたし共に引き取ら

せて下さいまし」

「小源太……いや宗右衛門、嬉しいことを言うてくれる。よろしく頼む」

と勘助は頭を下げた。

とにかく勘助には、次の謙信との合戦は、必ずや死闘となり、女たちにも多くの犠牲者が続出するに違いないという思いがある。出来ることなら、女たちの従軍は許すまいと胸中に思いはするものの、貴重な情報収集源には、やはり思い悩むのであった。

だから勘助は、上杉軍が一ヶ月におよぶ小田原城包囲中、信濃国境の割ヶ嶽城を陥した時も、「こんどこそ決戦となる」と予測し、女たちの扱いに心を砕いたのである。

川中島へ

勘助の予測は的中した。

精兵一万八千を率いた上杉謙信が、ついに信濃の善光寺平へと侵攻したのである。

千曲川河畔、海津城裏山の狼煙台から、越後来襲を告げる狼煙が突如うち上げられたのは、永禄四年（一五六一）八月十五日昼下りのことであった。

よく晴れあがった秋空に、狼煙はすうっと吸いこまれるように消え去ったが、その煙がまだ峰の上に漂いのこっている中に、向こう山の稜線上にぽっと煙が立ちのぼり、それはさらに次なる峰への合図となって、はるかなる甲斐の国へと伝えられていき、同時に、慌ただしく押し開かれた城門から、ぱっと奔り出た騎馬武者が一騎、狼煙のあとを追いかけるように駈け去った。

海津城から甲斐国甲府まで、およそ三十六里――その一四〇キロ余の道のりを、狼煙はわずか一刻（約二時間）ほどで達したというが、これは信玄がかねてから、緊急の場合にそなえて狼煙台を整備しておいた成果といってよい。

こうして海津城の狼煙は、思わざる速さで、越後軍一万八千の侵攻を信玄に伝えた。通信伝達機関の未成熟な当時においては、信じがたいほどの速さであった。

一方、狼煙によって謙信軍の信濃侵攻を知った信玄は、直ちに勘助を呼んで行動を開始した。

「ついに来おったな」

「はい。こたびの合戦をもって、越後との紛争には結着をつけねばなりませぬ。断じて、次の合戦は無きものと致しましょう」

「もとより、そのつもりである」

信玄は、勘助の顔をみつめて、きっぱりと答えた。声音に力があり、自信にあふれた表情は、いかにも今が男盛りの感を漲らせていた。

そのような信玄に、勘助の武将としての飛躍的な成長を感じ、これまでにない頼もし

さを覚えさせられた。

（よし、こたびの合戦は、面白くなりそうじゃ）

勘助は胸中に呟くとともに、

「丈太郎、忙しくなるぞ、油断すな」

と珍しく声を弾ませた。

謙信の来攻は、すでに予期していたことである。直ちに、将兵の動員を告げる伝騎が八方へ奔る一方、武器の整備、兵粮、馬匹の調達、点検等が精力的に進められ、甲府発進は三日後の八月十八日と決せられた。

勘助は、そうした慌ただしい出前直前の寸暇を盗んで、丈太郎を供に浄古寺村の御支配屋敷へと馬を駈った。

勘助と丈太郎の二騎は、雲の影が波状的にかすめる笛吹川沿いの街道を、時折り、鞭の音をきかせながら無言で疾走した。山々の緑は濃く、空と輝くばかりに青く明るいのだが、初秋の白い風が野づらを吹きわたっており、汗ばむこともないのであった。

やがて——浄古寺の御支配屋敷に辿り着いた勘助は、ふっと眉を曇らせた。山里が森閑と静寂なのはいつものことながら、屋敷に人の気配がまったく感じられないのである。

（これは……？）

と、ある予感を覚えたのと、丈太郎が、

「御師匠様?!」

と言ったのが同時であった。

丈太郎の反応は鋭い。即座に彼は、

「これ、誰ぞあられぬか。山本様……山本勘助様がお出でじゃ、門を開けられよ！」

と呼ばわった。

すると、やや間をおいて、かんぬきのはずされる音がして門が開かされたと思うと、姿をあらわしたのは、例の厳しい表情を決して崩すことのない留守役の老女おゆらであった。いつもの抑揚のない物言いで、

「いらせられませ」

と勘助に会釈してから、

「山本様、一足遅うございました……女たちは、昨日午後、大村右京亮様より越後軍来襲の報せをうけると同時に支度にかかり、夕景には信濃へ向かって出立しました」

「やはり……」

勘助は頷いた。彼女らの行動が機敏なのは承知している。打てば響くように即座に行動を起し、風のように姿を消して跡をとどめないのだ。

「こたびは大合戦になると、大村様も仰せられていました」

老女おゆらは、勘助と丈太郎を奥の広座敷に招じ、裏山に湧く冷たい清水を供しなが

ら、初めて感情のゆらめきを感じさせる物言いで、

「あの娘たちも、幾人生き残れるやら分かりませぬ。恐らくは、今生でふたたび会うことはありますまい。お世話になった山本様がお見えなされたら、よろしゅう申し上げて欲しいというておりました。とりわけ情の濃いしずかなどは、眸に泪をいっぱい浮かべておりまして、さすがのわたしも不憫に思ったほどでございます」

「あのしずかが……」

勘助は、遠くを望む面持で、ふと胸に落とすように独りごちた。庭先の大欅の梢で、山鳩がるるとのどを鳴らしており、女たちの姿の消えた御支配屋敷は、ただただ閑散としているのであった。

勘助は、椀の清水で喉をうるおしながら、独り言とも老女へ語りかけるともない物言いで、

「美味なここの清水とも、これでお別れとなるようだな」

「はい、女たちもそのように申し、十分に飲んだ上、竹筒に満たして旅立ちましてございます」

「そもじ一人が残ったわけだが、まさかこのまま屋敷を守って暮らすわけではあるまい」

「はい。御支配の大村様のお申しつけによって、当屋敷は数日中に廃されることになり、

わたしもお多佳様同様、浄古寺の御城内に入るようにとのことでございます」

「さようか、大村殿は雁坂峠口の警固にあたり、こたびの合戦には出陣せずともよいようである。そもじも、長年なじんだ女たちの顔も見られず淋しかろうが、老後を達者にお暮らしあれ」

「有難う存知ます。山本様も丈太郎殿も、どうぞ御健固に……陰ながら御武運祈りおりまする」

「さらばじゃ」

勘助は、ついに娘たちの行先……信濃のいずれへ向かったかは尋ねなかった。留守役の老女おゆらは、相手がたとえ呪懇の勘助なりとも、けっして明かさぬものと知っているからであった。

その勘助が、女たちの行方を知ったのは、帰路に立ち寄った浄古寺城主大村右京亮と多佳女からだ。右京亮は、信玄の信濃出陣に呼応して、秩父往還雁坂峠口守備の臨戦態勢に奔走していたが、勘助の顔を見るなり、例の闊達な物言いでもって、

「おお、参られたか……昨日午後、信濃出陣の伝騎が参ったと思うと、一刻と経たぬうちに、椿屋敷の女どもが旅仕度をして別離の挨拶をのべ、そのまま発足しおった。病後の多佳女は無理に留めおいたが、一同の素早い行動ぶりには、さすがはと驚いたことでした。彼女らは、いったん信濃の佐久郡望月城主望月盛時殿の御支配下に入り、盛時殿

の内室千代女の取締るところとなる筈……」

「なるほど、望月城を拠点にして、北信濃へと散らばるのですな。望月氏は滋野氏の一族、かの地方は血縁、縁類の者共が多うござるゆえ、女たちが動きまわるのにも何かと好都合でありましょう」

勘助は、北信濃地方に影のように潜行し、小豪族を次々と武田方へ寝返らせた滋野一族の梟雄、真田幸隆の猿のような貌を思い浮かべていた。

大村右京亮の浄古寺城を辞した勘助と丈太郎が、信玄率いる大軍団とともに信濃へと進発したのはその翌十八日のことであった。

虚々実々

信濃路は秋色が深かった。

八ヶ岳山麓の棒道――かねてこの日にそなえて整備しておいた軍用道路を急行、和田峠を越えるとともに、秋の色がいちだんと濃いのである。

峠から平原へと白銀色にほおけた芒の穂波に埋まり、高く青く晴れあがった中天には、無数の赤蜻蛉が舞っているのであった。

甲府進発時、一万七千の武田軍団も、上田を経て川中島にいたる頃には、馳せ参じた

南信濃の諸将も合流して、二万余も超える大軍団にふくれあがっていた。

その間にも刻々と情報がもたらされ、越後軍の動静は次第に輪郭をはっきりと浮き出してきた。大体、甲府から最前線基地たる海津城までおよそ三十六里（約一四四キロ）あるのに対し、春日山から川中島へは半分の十八里（約七二キロ）なのだ。当然、信玄軍より先に善光寺平へ進出していて、有利な地点に陣地を構築していて不思議はない。

それにしても、海津城の城将高坂昌信からもたらされた情報は、信玄に小首をひねらせるに充分なものだった。

「勘助、これはどういうことだ？」

眉根をよせて信玄は、

「報告は確かであろうな」

「恐らく、この通りと思うて間違いないでしょう」

勘助の脳裏には、あの浄古寺城の御支配屋敷から信濃へ潜行した女たちが、命がけで情報収集にあたっているであろうことが、異様なまで鮮明に浮かぶのである。

（死ぬるなよ……）

確かに、信玄が疑念するように、謙信は不可解な行動をとった。精兵一万八千の大兵団を率い、北国街道から善光寺平へと進撃した謙信は、大荷駄隊輜重五千をとどめると同時に、のこる歩騎八千を率いて犀川の流れを渡った。

この犀川と千曲川の合流する地点に出来た三角洲の平原が、すなわち運命の戦場川中島なのである。

犀川を渡り、川中島の平原をよぎり、千曲川をいっきに徒渉した謙信軍は、直ちに妻女山に陣地を構築した。むろん二重三重の空堀や防柵をめぐらし、たちまち武田軍との攻防戦に耐えうるよう妻女山一帯を城砦化したものである。

この妻女山は、犀川以南の善光寺平が、すでに武田方の勢力圏内に属しているというのに、さらに奥深く千曲川を越えた対岸にあって、宿敵武田軍の最前線基地たる海津城の、南西にへだたることわずか一里——すなわち四キロばかり、まさに目と鼻の先にある小山なのだ。

ひとたび戦端が開かれた場合、善光寺にひかえる後方部隊五千との連絡線は遮断され、敵地の真っ只中に孤立させられる危険の確率は高いと思わねばならない。謙信は、腹中にいかなる秘策あってのことか、まこと大胆不敵な戦略を選びとったものである。

この軍事的に破格、冒険ともいうべき謙信の行動は、謙信に遅れること六日目の八月二十一日、善光寺平を目前にした塩崎の地まで到った信玄や勘助らを困惑させた。

丈太郎が、例の御支配屋敷の女、甲武信岳（こぶしがだけ）のお遊に接触して得た情報によると、謙信軍は十六日到着以来、妻女山の防備を厳しく固めるばかりで、まったく動く気配を見せていないという。

「お遊さんは、土地の炭焼きの母娘に身をやつして、しずかさんと行動を共にしているとのことでしたが、敵の警戒も厳しいのでありましょう。ひどくやつれておられるように見うけられました」

「……」

勘助は、黙って頷いた。胸中、どのような感懐を抱いているのか、遠くに眸をやって茫乎（ぼうこ）たる面持であった。

勘助にも、謙信の真意を読み切れなかった。謙信ほどの戦上手が、何の策もなくして、破格の作戦をとる筈はないからだ。

（妻女山に立て籠って動かぬとは、彼にいかなる奇策、妙策があるというのだ……？」

勘助は、これまで脳裏に組み立てていた作戦の展開を躊躇した。

信玄もまた、勘助と同様、謙信の作戦意図を読み切りかねて、

「勘助、しばし様子を見よう」

と言い、急遽、当初の作戦を変更した。すなわち、恐らく救援を心待ちにしているであろう海津城を横目に見て、城とは千曲川を挟んで、真反対ともいうべき茶臼山（ちゃうすやま）に本陣をおいた。

茶臼山から謙信の籠る妻女山までわずか五キロ、海津城まで八キロしかない。ひとたび戦機うごけば、瞬時にして両軍は激突し、平原はきらめく刀槍と、陣鐘・陣鼓鳴りひ

びき、どよめき入り乱れる兵馬で埋めつくされるに違いない。

実は、信玄軍が茶臼山に本陣を据えたと知った謙信軍の将兵は、さっと顔色を青褪めさせたといわれる。上杉軍の作戦は、武田軍がまっすぐ海津城に入る、という前提のもとに組み立てられたものだからである。それが海津城に入らず、茶臼山に陣地を構築したとなると、作戦は根本的に立てなおさなければならない。

（信玄め、何を企んでいるのか？）

謙信も信玄の真意を計りかねる。

このあたり、双方ともに相手の作戦意図を摑みかね、疑心暗鬼に陥って動けない。たがいに、相手が尋常ならざる武将と知っているから、なおさらなのだ。

こうして武田・上杉両軍は、千曲川を挟んで対峙したなり凝と動かず、異様なくらい静かな五日ほどが流れた。

（嵐の前の静けさか……）

勘助は、いつの合戦でも、このような静かな一瞬のおとずれがあるのを知っている。この平穏無事な風光を、ふたたび目にすることがあるかどうかは運命の神のみの知るところといってよい。が、ふっと勘助の脳裏を、狼煙の伝送によって越後軍侵攻、と知ったと瞬間に覚えた、あの黒い翳りのようなものが掠めるのだ。

俗に、

「虫が知らせる」

とか、

「予感を覚えた」

などと言うが、後から思えば、勘助にも確かにそれがあったといってよい。

いつも合戦近しの報に接するや、ほとんど反射的にといってよいほど、胸の奥に熱い血の奔騰を感じるものだが、何故かこたびは違っているのだ。

実は、「越後軍信濃侵攻」と告げられた際に、熱血の奔騰ならぬ、一種異様な不安の胸騒ぎめいた感覚を覚え、思わず眉をひそめているのである。彼が出陣直前の多忙の中にあって、浄古寺の御支配屋敷までわざわざ馬を奔らせたのも、そうした常ならぬ感覚がとらせた行動というべきかも知れない。

（山本勘助ともあろう者が、これは一体、なんとしたことか……年来、待ち望んでいた大戦を前にして、何を迷うているのだ……）

勘助は、唇を噛んで胸中に呟いた。やがてその平原が戦場になるとは考えられぬほど、天も地も平和で静寂なのであった。

秘策と秘策

勘助は、善光寺平のかなた、平原を区切ってつらなる飯綱、戸隠の山なみが、早くも紅葉のきざしをみせているのを望みながら、さらに対妻女山の思念を凝らすのであった。

（敵は何を考えているのか……？）

と。

このことは信玄も同様であった。

はじめ信玄は、茶臼山に布陣し、上杉軍の退路を遮断し得たと見た際、

（これで、こたびの合戦は、わが勝ちぞ！）

と、思わず胸中に快哉を叫んだものだ。

ところが、窮地に追いこまれた筈の謙信が、少しも狼狽した気配もなく、また妻女山から動こうともしないではないか。

「妙だ。勘助、誰ぞ物見に……」

「丈太郎らを差し向けてございます」

即座に勘助は答えたが、間もなく戻った丈太郎の報告は、いよいよ信玄や勘助の眉を曇らせるものであった。なんと謙信は、小鼓を打ってのどやかに、謡曲「八島」を謡たっていたというのだ。謡曲「八島」は、両国行脚の僧が屋島（源平古戦場）で、漁翁の塩屋に泊ると義経の幽霊があらわれ、屋島の戦の昔語りをするという筋のものである。

これらのことを探ってきたのはしずかだが、その代償のように同行のお遊が傷ついた。怪しまれて逃走する際、しずかを庇って右肩を弓矢で射抜かれたというのだ。

「あのお遊が……で、しずかは、しずかはいかがした？」

「里の百姓家の納屋に、お遊どのを運びこみ、一応の手当てをしたとのことでしたが……しずかどのは、私に報告を済ませると、お遊どのの看病をせねばならぬというて、ふたたび戻っていかれました」

「そうか、戻っていったか……」

一瞬、勘助の表情に微妙なゆらめきがあったが、気を立てなおしたように、

「御苦労であった。退って休むがよい」

と丈太郎に言った。

信玄は、勘助から妻女山における謙信の様子を聞くや、

「なに、八島を謡とうていたと?!」

と、驚きを露わにした。

（八島を謡たう余裕は、どこから発せられるのか……）

いちだんと疑惑を深くした信玄は、あらためて物見の兵を八方に散らしてみたところ、

案の定、善光寺に近い旭山城に一軍がふせてあるというではないか。

「ううむ、やりおるわ」

信玄は唸った。

これで形勢は、一挙に逆転し、茶臼山の武田軍は、妻女山と旭山城の上杉軍によって挟撃される危険性が濃厚になったのだ。

「これは、ぐずぐずしておれませぬ」

「うむ」

信玄は、勘助の言葉に直ぐ反応した。急遽、茶臼山の陣をはらい、妻女山の眼前を横切り、広瀬の渡しから千曲川を渡ってするすると海津城に入城した。

「援軍が来たぞ！」

城兵は歓声を上げた。

もし、この時、謙信が妻女山から討って出たらどうなったか。恐らく海津城の城将高坂昌信は、待っていたとばかりに側面攻撃をかけたであろうし、この信玄の渡河入城には、あらかじめ、こまかい打ち合わせがなされていた。渡河入城と決した直後に勘助は、

「丈太郎よ、一汗掻いてくれい」

「はい」

即座に丈太郎は、勘助のしたためた密書を持って、白銀色と化した芒の平原に、けものように姿を没したのであった。

むろん一方の謙信も、当然、信玄は海津城と事前に打ち合わせているものと察しているから、妻女山から動かず、静かに上杉軍の渡河を見送っている。

このように、一方が誘導作戦に出れば、一方は素知らぬ顔でやり過す。このあたり、虚々実々、両雄の智略のかぎりを尽くした駆け引きの妙を見る思いがする。

これらが八月二十九日における戦況であり、以来、海津城の信玄と妻女山の謙信は、わずか四キロの距離をへだて、凝と睨み合ったまま、重陽の節句たる九月九日を迎えてしまった。

しかもなお、諧信は帰国する気配も見せず、謡曲などを娯しみながら、ゆったりと妻女山に籠っている。このあたりを『越後軍記』に、

「信玄西条山（妻女山）へよせて来て攻むるときは、彼が陣形常々の守を失ふべし、その時無二の一戦を遂げて勝負すべし」

と記されてある戦術をとり、謙信は武田軍の襲いかかるのを待ちうけていたのだ。

「いつまで、腰を据えているつもりだ」

信玄は、謙信の胸中にいかなる奇略あるのか、と警戒しながらも、いっこうに動かぬ謙信に対して、しだいに苛立ちを覚えてきた。

そうした信玄の様子を見て、ひそかに眉を曇らせたのは勘助はじめ典厩信繁や宿将飯

富兵部らであった。謙信の拠る妻女山は、海津城の側背に位置するから、海津城からの攻撃は作戦上不利なのだが、これ以上対陣を長びかせるのは危険と判断、ついに決戦断行と決議するとともに、これを信玄に進言した。

「おお、やるか！」

ぱっと顔を輝かせた信玄は、直ちに、

「明日の作戦を立てよ」

と勘助に命じた。

「うけたまわって候」

低声に答え、脚を引きずって信玄の前を退いた勘助が、その夜、知能のかぎりを尽くして練りあげた作戦が、古来、世に知られた「啄木鳥の戦法」である。

すなわち、啄木鳥が木中の虫を捕える時、正面から襲わずに、穴の反対側をコツコツと嘴でつつき、驚いた虫が穴から這い出たところを食うというものである。

「面白い。謙信めをつつき出すか……！」

信玄は、勘助の秘策を聞くや大いに興がり、二万の軍勢のうち一万二千を、高坂昌信、飯富兵部、真田幸隆らに率いさせ、謙信の籠る妻女山の背面を襲わせることにした。

（わが作戦は、後世にまで語り継がれるものとなろうぞ）

勘助は、おのれの創出した作戦に絶大なる自信を有していた。彼は、こたびの合戦に大勝することをもって、駿河今川家における九年間にもおよぶ屈辱的な所遇、および自分を流浪遍歴の一牢人の境遇から掬い上げてくれた、武田信玄という武将への返礼としたいという思い、更には大勝を導いた名軍師として、武家の名門「甲斐源氏」武田家の家老、重臣たちにも、もはや疎外視、新参者視はさせぬぞという思いがあった。

八月十日未明、寅ノ刻というから、今の午前四時頃、ひそかに海津城を抜け出た信玄の旗本は、山県昌景を先鋒として、川中島八幡原に布陣した。左水沢には典厩信繁、その左に穴山伊豆、右には両角豊後、内藤修理というふうに陣をとった。

信玄自身は、八幡社に陣所をもうけ、その身辺には中間頭二十人のほか、土屋平八、真田喜兵衛（後の昌幸）ら十七、八の御小姓連がひかえていた。

そして今――信玄はじめ、山本勘助、典厩信繁、逍遥軒信廉らが、いや、武田の全軍が、固唾をのんで待ちうけているのは、高坂昌信や飯富兵部らの率いる別働隊一万二千に、背面を急襲された上杉軍が、まさに驚いた虫のように、妻女山から川中島へとび出てくる瞬間であった。

（二度と八島を謡たわせはせぬ）

狼狽した謙信を信玄の本隊と、別働隊でもって前後から挟み撃ちにし、年来の抗争に終止符をうつ、というのが信玄の採った「啄木鳥の戦法」なのである。

しかし、信玄や勘助の予測だにしなかった事態が前途に待ちうけていたのであった。

さらば丈太郎

勘助は、なお気づかずにいたが、高坂昌信らの率いる別働隊が妻女山の背後へ潜行した時、すでに謙信の上杉軍は、妻女山を脱出して千曲川をおし渡り、信玄の八幡社陣地の前方わずか半里（約二キロ）の地点に身をひそめて、夜の白むのを待ちうけていたのだ。

これは前日、九月九日夕景、謙信が重陽の祝宴後、いつものように古謡を口誦みながら、はるかに海津城を望見したところ、異常に炊煙がたちのぼっている。

「はて……？」

謙信は、思わず小首をかしげた。対陣して十日あまりも、毎夕景、おなじ時刻に、よく目にしてきた光景ではあったが、いつもより炊煙のあがる時間が長いのだ。

（さては！）

一瞬、謙信の脳裏に、稲妻のごとくひらめくものがあった。

（あの炊煙は、出撃準備のものではないか……彼らは握飯の用意をしているのだ）

信玄の出動を予感した謙信は、直ちに行動を開始した。決断は速いのである。彼は信玄に一歩先んじて、逆に奇襲をかける作戦に出た。妻女山には、わずか兵百名をとどめ、

いつものごとく篝火をあかあかと燃やしつづけさせ、また紙の擬旗をひるがえさせるなどして武田軍の目をあざむくとともに、翌十日と日の改まった午前二時半頃、暗々たる深い夜霧にまぎれて妻女山を脱出、信玄の本陣と別働隊も気づかぬうちに陣を移し終えていたのだ。

夜半から千曲川に蒙と湧き出した濃霧が、山本勘助の不運というものであった。八幡原本陣における信玄らは、別働隊一万二千に奇襲をかけられた謙信の軍が、川中島へとび出てくるのは、多分、辰ノ刻（午前八時頃）になろうと計算していた。

ところが、東天が白み、川霧をつらぬいて朝の光がさっと平原に射しこんだ途端、思わぬ近さで「毘」の一字旗と、「乱れ懸り竜」の上杉軍突撃旗が浮かび上った。

「しまった！」

咄嗟に信玄は、「啄木鳥の戦法」が失敗したことを悟り、勘助は青褪めた。狼狽せねばならなかったのは、謙信にあらずして信玄だったのだ。

愕然とした信玄は、それでも気を立てなおし、急遽、高坂昌信、飯富兵部らの別働隊が馳せつけるまで、もちこたえるよう全軍に陣形を十二段にとらせようとはかった。

「急ぎ触れよ！」

「心得ました！」

たちまち、百足の指物をさした使番衆の馬がとび散り、諸部隊の間を駈けめぐった。

「しゃっ、武田家存亡の危機ぞ！」

急を知った典厩信繁は、直ちに兄信玄のいる八幡社の本陣に馬をとばした。

この日の信玄は、黒糸縅の鎧の上に、緋の法衣をはおり、明珍信家の名作「諏訪法性の兜」をかぶり、床几に腰をおろして、物見の者から敵状報告をうけていたが、弟信繁の顔を見るや、

「おお、典厩、思わざる形勢になりおった。謙信めに、見事、してやられたわ」

「はい、この戦、どうやら、またなき難戦になりましょうぞ。お屋形には、充分にお気をつけていただきたい」

「うむ、いかな難戦になろうとも、これに打ち勝たねば、わが武田家に明日は無い。よいか典厩、そなたも、お身を大事に生き抜いてくれい」

兄弟は黒い予感あってか、たがいの身を思う言葉を交わしたが、これが兄弟の永別となった。

一方、謙信はといえば、信玄が「啄木鳥の戦法」を用いたのに対し、「車懸りの陣形」をとった。これは文字通り、大車輪が回転するように、先隊戦って退けば、後隊ただちに、これにとってかわり、後隊退けば、先隊ふたたびこれにかわるという、間断なき合理的、激烈な戦法であり、二隊一群をなし、二群は一戦団となって旋回しつつ、絶えず新しい戦力を保持しているという謙信得意の戦法であった。

ただ、その謙信が心中もっとも怖れていたのは、武田軍の別働隊一万二千が、妻女山がもぬけの殻となっていると気づき、川中島に急行して来ることだ。そうなると、一転して上杉軍は背後をつかれる危険な事態となり、その確率は、時が移れば移るほど高くなると思わねばならぬからである。

謙信がじりじりしながらも、「突撃」の命令をためらったのは、敵将信玄の所在が摑めていなかったためだ。こたびの合戦は、武田・上杉両軍とも、これを最後にと挑んだ、まさに乾坤一擲の決戦なのだ。なのにいまだに敵将の所在知れぬ不安に、さすがの謙信も喉まで出かかった「進撃」の一語を嚙みしめるばかりであった。

同じ頃、兄信玄に別れの挨拶をのべ、わが陣に戻った典厩信繁は、信玄直筆で紺地の母衣に金で経文の書かれたのを脱ぎ、丁寧に折りたたむと、近習の者に、

「これはお屋形様の御筆であるゆえ、敵にうばわるるも無念である。ついては、わしの遺品として息子の長老（信豊）に渡し、決して粗略に扱うてはならぬと伝えて欲しい」

と言って手渡している。

この時点で、すでに典厩信繁は、討死を覚悟していたと見てよい。父信虎が勝手にしたこととはいえ、いちどは兄信玄と家督相続権を争った身が、無事生きのび得たのは、戦国時代における奇跡といってよいのだ。かつて兄信玄の寛容によってつながれた一命を、今、典厩信繁は、この川中島の一戦で、兄のために捨てる覚悟を定めたのだ。

彼はこの日、黄金作りの武田菱の前立打った兜をいただき、黒糸に緋をうちまぜて縅した鎧を着用、川中島水沢の瑠璃山鶴巣寺に床几をすえて采配をふるっていたが、ついに甲斐国の守護武田信玄の弟の身でありながら、自ら白刃をふるって敵中へ斬り込む。

なお、信玄・典厩信繁兄弟は、勘助創案になる「啄木鳥の戦法」破綻について、一言も非難の言葉は口にしていない。が、兄弟に目礼してよろめくように本陣を退いた勘助は、

「わが秘策が破れるとは……」

と呻き、その独眼に深い苦渋の色を湛えていた。

小姓組の真田喜兵衛は、勘助を追いかけたが、五、六歩で立ち止まり、哀しげに黙って見送った。代わりのように、息せき切ってあらわれた丈太郎が、

「御師匠様、典厩様の部隊が、直ちに出撃なされるとのことでした」

「わしも斬り込む。ついては、頼みがある」

「どのような事でありましょうか？」

「しずかのことだ」

「やはり……」

「やはりとは、どういう意味だ……丈太郎、そなたは……？」

「はい、以前、御支配屋敷で取締の多佳女どのが話された際の、御師匠様の様子から、

もしかしたら、しずかどのは、御師匠様のお子ではないかと思うておりました」

「左様か……あの娘は、わしが旅先の備前国六条院の里で病に罹り、行き仆れ同様の身になった際、親身になって介抱してくれたお志乃という女との間に生れた娘のようだ。お志乃は大内氏が陶晴賢の反乱で破れた折、討死した武士の後家であった。その娘のしずかが、流転の果ての小田原で多佳女を助けたのが縁となり、われらが浄古寺村の屋敷で暮らすようになるとは……」

「御師匠様……！」

「わが娘と気づいた瞬間、わしは恐ろしいばかりの因縁を覚えさせられた。旅をつづけてしもうたゆえ、あの娘が生れたとも知らずにいたとはいえ、父親として何も手をさしのべてやれなかった、おのれの罪業は深い。こたびの合戦を終えたら、すべてを話してとも思うていたが、今となってはその機会も失うた。もはや今生では会えまい……丈太郎、しずかをこの戦場で死なせては、あまりにも哀れである。そなたに、頼みとはこのことだ。わしの命令によると言い、しずかと負傷したお遊を援けてこの地を脱出し、浄古寺城の大村右京亮殿を訪ねるがよい。あの城砦には多佳女どのもいるし、このことは、かねて右京亮殿に話してあるゆえ、悪いようにはせぬ筈だ。往けい丈太郎！」

「御師匠様！」

「泣くな、丈太郎……そなたには、さしたる事もしてやれなかったが、悪い主を持った

と思うて勘忍してくれい」

「御師匠様、私もお供に……」

「ならぬ。よいか丈太郎、これは、この山本勘助という漢の生涯にかかわる問題なのだ。わが組み立てた『啄木鳥の戦法』が破綻し、幾百千の味方の将兵が斃れるとあっては、なんの面目あって信玄公の前に出られようか……これは漢のケジメというものなのだ」

一気に言った勘助は、そこでふっと思い出したように、

「そうだ、丈太郎……これなる狐裘をしずかに渡し、父の遺品と思うよう言うてくれい」

と言って腰に下げた「狐裘」を丈太郎に手渡した。「狐裘」とは、狐の腋の白毛皮で作ったかわごろもである。古来、貴重な品とされており、かつてしずかが勘助の腰にそれを見、羨望したことがあったのだ。

「さらばじゃ、丈太郎」

馬に跨った勘助は、一瞬、丈太郎の顔に独眼をすえたが、次の瞬間、ぱっと馬腹を蹴った。抜き放った白刃が、朝の光の箭をきらりとはじき返した。

山本勘助が真額に白刃をかざし、一番駈けに敵陣にむかって突進すると、それと見た典厩信繁は、

「しゃっ、勘助に先を越されたか！」

と叫び、これまた白刃をかざして馬を奔らせたが、勘助の孤独な翳をきざんだ姿も、典厩信繁の武田菱の前立打った兜も、やがて乱戦の渦の中にのみこまれた。

この瞬間から、千曲川の流れも静かな川中島の平原は、けものを思わせる喚声や、はげしい陣鼓・陣鐘のひびき、入り乱れる敵味方の旗差物や刀槍のきらめく凄惨な天地と化したのであった。

時刻は、巳ノ上刻、午前十時頃か、薄れた濃霧の彼方から、朝の白い光がさっと修羅の平原を射した。

すでに、山本勘助の姿は、見られない。

2003年７月17日　初版発行
2006年11月２日　第2刷発行
発行人 —— 大沢広彰
発行所 —— 株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5 〒145-8502
印刷・製本 — 中央精版印刷株式会社
© Keinosuke Nagaoka 2003 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
編集内容に関することは —— 編集部直通 03-5447-2311
• 在庫・不良品（乱丁・落丁等）に関することは ——
出版営業部 03-3726-8188
• それ以外のこの本に関することは ——
学研お客様センター 学研M文庫係へ
文書は、〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15
電話は、03-3726-8124
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。
複写（コピー）をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複写権センター TEL 03-3401-2382
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉

な-2-3

学研M文庫

武田信玄

工藤章興

天文十年夏、武田信虎が甲斐から追放された。
だがそこには信虎・信玄父子と
重臣五人の間で交わされた秘事が存在した。
「甲斐武田家が天下を盗る」
父子の野望は、聖なる御旗屋で誓盟された。
信玄の自立から死に至るまでの三十余年を、
合戦を軸に描く、信玄一代記。

定価 七七七円（5%税込）

学研M文庫

武田家臣団

信玄を支えた24将と息子たち

近衛龍春

戦国の名将として名高い武田信玄。
そして戦国最強と謳われたその家臣団。
武田神社の画像に残る24将を中心に
さらに主要人物を加え、
信玄を支えた精鋭たちの足跡を追って、
武田家中の結束の固さとその強さの秘密に迫る。

定価 七九八円（5%税込）

学研M文庫

最新刊

飾り屋盗賊闇裁き
かんざし慕情
江戸の人情と意地に生きる男の正義の鉄槌！
喜安 幸夫

極楽絵とんぼ 犯画帖
喧嘩は弱いが情は厚い、お気楽絵師が悪事を暴く！
中里 融司

東海道中竿栗毛
女利き屋蛸六
女目利きの幇間蛸六 お初にお目にかかりやす！
雑賀俊一郎

平八捕物帳
落とし胤
襲いくる刺客を迎え撃つ、師弟の固き絆!!
宮城 賢秀

服部半蔵と影の一族
家康を陰で支えた男とその一族の軌跡と真実!!
橋場 日月

分析 日本戦史
日本の行方を左右した20の戦い
日本を形作った戦争の歴史を的確に分析する！
柘植 久慶